

白先勇研究  
—「流浪する中国人」の民族的アイデンティティの探求—

目次

一 白先勇文学の意義.....	3
二 白先勇文学に対する評価.....	5
1、台湾文学における白先勇 .....	5
2、大陸における白先勇評価 .....	6
第1章 白先勇文学の独自性 .....	8
一 白先勇文学の原点.....	8
1、「六十年代世代」の一員としての白先勇 .....	8
2 白先勇の独自の疎外感.....	10
二 白先勇の作品と先行研究.....	12
1、三つの時期.....	12
2、先行研究 .....	15
三 本稿の目的 .....	18
第2章 疎外体験から「歴史主題」の誕生まで.....	21
一 「滄桑感」、「疎外感」と抵抗意志の形成.....	21
1、二つの危機意識.....	21
2、危機意識の背景.....	23
3、自殺—自我喪失に対する抵抗 .....	25
4、期待と不安混じりの渡米 .....	27
二 「歴史意識」の形成——「台北人」シリーズをめぐって .....	29
1、「歴史意識」の登場 .....	29
2、歴史による危機の化身—尹雪艷.....	30
3、「歴史意識」の具体的展開 .....	34
4、「滄桑感」と「歴史意識」.....	36
第3章「中国」主題の出現——「シカゴの死」 .....	41
一 異国での疎外感—「中国人」という自意識の再確認 .....	41
二 喪失感の根源.....	45
1、「留学生文学」との異同 .....	45
2、故国から逃避する主人公 .....	46
三 換骨脱胎の精神的遍歴 .....	48
1、換骨脱胎した白先勇 .....	48
2、台湾時代の白先勇 .....	49
3、他者との出会いによる自己発見.....	52
第4章 「香港——一九六〇」から見る白先勇の中国像.....	57

一 「紐育客」シリーズの作品としての「香港——一九六〇」 .....	57
1、看過された「香港——一九六〇」 .....	57
2、「紐育客」シリーズのモチーフ .....	58
二 「香港——一九六〇」における「中国」 .....	60
三 「香港——一九六〇」における自己 .....	63
第5章 中国の喪失と自己放逐の精神 .....	69
一 「流浪する中国人」 .....	69
二 先行研究に指摘された逆らえない力 .....	70
三 華人社会における連帯感の崩壊 .....	72
四 抗争意識への相反する感情 .....	74
五 恩師夏済安の苦闘と無念 .....	77
第6章 暗闇の中での模索——「謫仙怨」 .....	81
一 「台北人」たちの中国への反発と依存 .....	81
二 白先勇におけるアイデンティティ・クライシス .....	84
三 『現代文学』にかける白先勇の思い .....	88
第7章 歴史に翻弄される中国人 .....	93
一 「夜曲」に見られた理想と現実の隔絶 .....	93
二 「骨灰」における白先勇の「中国」像 .....	97
三 現実に追随しない白先勇 .....	102
終章 .....	107
付録1 白先勇略年表 .....	119
付録2 白先勇著作の目録 .....	125
付録3 参考文献 .....	134

## 序章 現代中国文学史における白先勇の地位

### 一 白先勇文学の意義

今日、海外にいる中国語作家のなかで、在米作家白先勇はおそらくもっとも読まれている一人であろう。一九九九年一月、白先勇の作品「台北人」シリーズは、台湾で「台湾文学経典」の小説類の第一位に選ばれた<sup>1</sup>。さらに、同年6月に香港の『亜洲週刊』が選出した「二十世紀中国語小説ベスト100」のなかで、同じ白先勇の「台北人」シリーズは、魯迅、沈從文、老舍、張愛玲、錢鐘書、茅盾に続いて第七位にランクされた<sup>2</sup>。また、大陸では、一九七九年、白先勇の小説が海外中国語作家の作品としてはじめて大陸の読者に紹介されて以来、今日でも人気が衰えていない。短編小説集「台北人」シリーズや、同性愛主題を扱う長編小説『孽子』などが大陸で複数の出版社から出されて、版を重ねた。また、小説だけではなく、論文、評論、エッセー、雑文などをほぼ全部収めた『白先勇文集』も二〇〇〇年一月に広州の花城出版社から刊行された。

白先勇の文学の影響は二十世紀の終わりごろにひとつの頂点に達したと言える。しかし、この白先勇ブームから三十数年前に、一人の在米文学評論家は、すでに三十数年後のブームを予見したかのように、白先勇文学の価値に注目してきわめて高い評価を与えていた。

白先勇は現代短編小説家の中で稀に見る奇才である。台湾では彼よりも名高く、創作も豊富の小説家は多くいるが、恥ずかしいことに私には詳しく読む機会はなかった。もし、彼らの「才能」は白先勇よりも高く、「質」はもっと優れているのであれば、私は当然より一層喜んで、中国の文壇のために喜び祝う。しかし、五四運動から大陸が変色するまでの間の短編小説なら、私は少なからず読んだ。私からすれば、芸術レベルにおいて白先勇の後期の小説に匹敵に値するもの、あるいは彼の業績を超えた者は、魯迅から張愛玲までわずか五、六人しかいなかったと思う。白先勇はまだ三十二歳で、長編をまだ書いていない。彼の才能と努力次第で、将来、中国文学史上の巨人の一人となるであろう<sup>3</sup>。

これは一九六九年十二月に、アメリカ在住の著名な文学評論家夏志清が書いた「白先勇論」の中の一節である。

白先勇は中華民国政府の著名な将軍白崇禧の息子で、一九三七年に中国大陸の広西省に生まれた。中華民国が中国大陸での統治権を失った一九四九年に、十二歳の白先勇は兄弟と共に香港に脱出、一九五二年、民国政府と一緒に台湾に渡った父母の後を追って台湾に入り、そこで中学校と大学教育を受けた。台湾大学に在籍していた一九六〇年三月に、白先勇は同じ外国語学部のクラスメート王文興、欧陽子、陳若曦らと共同で『現代文学』を創刊し、二十世紀の西洋文学を積極的に紹介する傍ら、自らも積極的に文学創作を行なって、相次いで十一篇の短編小説を『文学雑誌』や、『筆匯』、『現代文学』に発表した。一九六

三年、白先勇は留学のためにアメリカに渡り、そのままアメリカに定住するようになった。彼は一九六四年からアメリカで文学創作を再開し、翌一九六五年に代表作である「紐育客」シリーズ、「台北人」シリーズをスタートさせ、『現代文学』で発表した。今日まで、白先勇は三十八編の短編小説と一部の長編小説『孽子』を世に送り出している。

夏志清が評論を書いた一九六九年は、白先勇のもっとも旺盛な創作時期にあたり、白先勇は四年足らずの間に「台北人」シリーズ十四作中の七作を立て続けて発表し、世間の注目を集めた。その時から、白先勇文学に対する評価が、その作品の言語と技法を賞賛するものと、作品の主題が退廃的だと批判するものに分かれていた。そうした賛否両論の中で、夏志清は、白先勇の台湾時代の早期作品に見られる人生や愛情に対する独自の考え方の存在及びそのような独自の視角を持たせた作者の同性愛傾向を指摘したうえで、渡米後白先勇が「中国と中国人に対する考えがさらに深まり」、「『台北人』は民国史でさえ言える」、また、「ニューヨークを背景とした小説の中で……大陸が陥落した後の中国人の精神状態を表現した」<sup>4</sup>と主張した。夏志清は、渡米後の白先勇が個人的な哀楽に囚われた早期の作品から脱皮して、個人の運命に国家、歴史を重ねて表現するという象徴手法の駆使したことにより、主題の拡大に成功した、と白先勇の文学価値を高く評価した。

夏志清は、一九二一年に上海で生まれ、一九四八年にアメリカへ留学して、エール大学で英文学の博士号を取得した。一九六一年からコロンビア大学で教鞭を取った。五十年代に台湾で『文学雑誌』を創刊し、西洋文学を率先して紹介した台湾大学教授夏濟安はその兄にあたる。夏濟安教授を師として仰ぎ、彼の主催する『文学雑誌』から多くの影響を受けた白先勇らが、アメリカに渡った後、夏志清と密接な交流を持つようになった<sup>5</sup>。夏志清も『現代文学』に大きく寄与し、その周辺に集まった作家たちに関心を注ぎ続けている。その意味では、夏志清は白先勇およびその文学を最もよく知っているひとりである。

夏志清の代表作の一つは、一九六一年にエール大学に出版された「A History of Modern Chinese Fiction」である。この論著の中で、夏志清は、うわべにある社会意識の強弱や、政治立場の左右に惑わされずに、作品の深層に潜んだ芸術性や人生観を掘り下げ、中国現代文学の面白さとその価値を明らかにした。「西洋のアカデミーでの中国現代文学研究の基礎を築いた」<sup>6</sup>と評されているこの著作は、その後、増訂版がだされ、さらに一九九九年にコロンビア大学から第三版が出版された。しかし、文学の社会意識、政治主張が強調されてきた中国大陆と台湾では、長い間、夏志清の文学論が紹介されてこなかった。『中国現代小説史』という題に翻訳されて、夏のこの著作が中国語圏に紹介されたのは、香港では一九七九年、台湾では一九九一年、大陸では二〇〇五年、であった。つまり、英文版から最大四十年以上がかかったのである。それにもかかわらず、夏志清の影響はすでに香港、台湾、大陸に広がっていた。台湾の龔鵬程教授は「小説の道—論夏志清『中国現代小説』」という論文のなかで、八十年代末、九十年代初期に大陸で起きた「文学史の書き直し運動」を「党性文学の現代文学史から夏志清氏が切り開いたパラダイムに転換する歴史」<sup>7</sup>だと位置づけ、夏志清の文学論の大陸での影響を指摘した。

夏の白先勇論についても同じである。三十数年前の夏志清の評価は、その後の白先勇研究に大きな影響力を持ち続けたといえる。白先勇に対する夏志清の並々ならぬ高い評価は、

何より白先勇が独特な視角から「民国史」と、「中国人の精神状態」を表現した、という点にあるように思われる。しかし、従来、白先勇と白先勇の文学に関する研究がけっして少なくないとはいえ、白先勇の独特な視角を抉り出し、白先勇文学の価値を十分裏付けられるような研究はまだ少ないと思われる。一方、夏志清自身は、白先勇の独自性とその文学の価値を洞見したが、白先勇文学についての分析を行っていない。その意味では、二十世紀末の白先勇ブームにおける白先勇に対する捉え方が夏志清の評価から大きな影響を受けたが、夏志清と考え方との間にずれがあるように思われる。

白先勇文学の独自性がどこにあるのか。その独自性をどのような価値を持っているのか。それを明らかにしない限り、白先勇文学の台湾文学、ないし中国現代文学にとっての意義見損なうことになるであろう。

## 二 白先勇文学に対する評価

### 1、台湾文学における白先勇

大陸生まれで、現在アメリカ在住の白先勇がその文学活動をはじめたのは、六十年代初期の台湾においてであったが、彼の主な作品は、アメリカに渡った後の六十年代中期から七十年代にかけて創作され、台湾で発表したものである。八十年代中期以後、白先勇は自ら作品を映画や新劇の脚本に書き直したり、英語に訳したり、エッセー、評論の執筆をしたりするが、新たな作品は三本しか出さなかった。しかし、白先勇は、すでに台湾現代文学史において不動の地位を確立した。彼は、六十年代の台湾文壇にモダンリズムの新風を吹かせたもっとも重要な一人として文学青年たちから絶大な支持を受け、大きな影響力を持った。八十年代末、台湾学者李瑞騰が『中華現代文学大系・評論巻』を編集した際、七、八十年代の台湾の文学評論状況について調査したところ、その期間に於いて白先勇は台湾文壇で最もよく批評される作家の一人とされた<sup>8</sup>。さらに、前述したように、一九九九年一月に彼の代表作「台北人」シリーズは、台湾文学経典で一位に選ばれた。

しかし、他方、台湾文壇において、白先勇の文学に対する批判もまた後を絶たない。中国大陸で共産党との内戦に敗れ、一九四九年に台湾に撤退した国民党は、その後、「反攻復国」の目標を高々に掲げた。五、六十年代の台湾文壇が時の体制側の思惑を反映して、「反共文学」、郷愁文学が氾濫していた。そうした状況のなかで、出口の見えない暗黒のなかで不安を募らせ、徘徊する若者を描く白先勇の早期の作品は、「不健康」的なものとして強く糾弾され、また、国民党政権と一緒に台湾に逃げ込んだ大陸からの人々の悲哀を綴った「台北人」シリーズや、戦乱、政治的要素で海外に流浪する中国人のアイデンティティ・クライシスを表現する「紐育客」シリーズも、現実を暗く捉えすぎたと批判されてきた。例えば、「台北人」のなかで描かれた頹廢のかつ暗い世界は台北の現実と乖離している、という批判や、白先勇を「ゴミ収集の名人」<sup>9</sup>、「わざと腐ったリンゴをえぐり出す人」<sup>10</sup>と非難した意見が数多く見られた。

他方、モダニズム文学がもたらした西洋一辺倒の歪みを改め、台湾の現実を目を向けて、

台湾という土地に根を下ろそうとする「郷土文学論争」が勃発した七十年代以後、白先勇の作品が台湾に根を下ろしていないという批判に曝された。例えば、台湾の研究者高天生は、白先勇の「台北人」シリーズをはじめとした文学を評価しつつも、白先勇の長編小説『孽子』について、長年台湾を離れた白先勇は、台湾における新しい世代に対して深い理解がなく、もっぱら昔の自分の体験から論断を下したため、彼が「小説の中で構築したあの隔離と自棄の世界は、畢竟、代表的とは言いがたい」<sup>11</sup>、と指摘した。七十年代に、台湾の民族主義論の特徴として、「中国と台湾の多元的重層的把握」<sup>12</sup>にあったため、もっぱら「外省人」を主人公とした作品集「台北人」シリーズに対する批判は、まだそれほど影響力がなかった。しかし、その後、台湾の民主化が急速に進み、台湾化（独立問題）が焦点になったなかで、中国意識が色濃くもっている白先勇文学への風当たりは強くなった。一九九九年に「台北人」シリーズが「台湾文学名著」の第一位に選ばれたことによって生じた「首位騒動」は、そうした意見が噴出した結果だと見てよかろう。新聞、雑誌には、連日、疑問や反発、批判の意見がたくさん寄せられた。批判の矢先は主として二つの点に集中されている。一つは、大陸生まれの在米華人である白先勇がアメリカで創作した作品は、台湾文学であるかどうかという疑問であり、もう一つは、戻れぬ大陸への郷愁と、失われた過去への思い出に朽ちていく「外省人」の心情を綴った「台北人」シリーズは、台湾の文学史において「首位」という評価に相応しいかどうかという疑問である。こうした反撥からわかるように、白先勇文学は、きわめて高い評価を与えられている一方、「台湾意識」が台頭しつつある現在の台湾社会において、文化、国家、民族、歴史意識が重層的に存在する白先勇の文学が、台湾文学という枠からはじき出されるかもしれないという不安定な一面も持っている。

## 2、大陸における白先勇評価

中国大陸では、文化大革命が終結したあと、白先勇の作品がいち早く紹介された<sup>13</sup>。それ以来の二十年数年間、白先勇の作品は持続的に大陸で紹介され、研究された。現在、白先勇の作品は、そのほとんどが大陸の文学雑誌や小説集に掲載され、白先勇の小説集や作品集などの単行本も数多く発行された。そんな中で、白先勇とその作品に批評も盛んになされている。

大陸の白先勇文学に対する捉え方は、ここ二十数年間で大きく変わってきた。七十年代末、白先勇の作品がいち早く大陸で紹介された背景には、「統一」という政治的要素が強く働いたことは否めない。一九八二年に出版した中国社会科学院文学所編集の『台湾作家小説選集（三）』の前言の中で、白先勇の代表作である「台北人」シリーズに描かれた芸術形象の意義を次のように解説した。

これらの芸術形象の客観的な意義は、旧社会や、旧制度、旧時代、旧社会のために送った挽歌というところに留まらない。これらの形象は同時に、歴史発展の必然的趨向を雄弁に反映した。彼らにとって、望郷、懐旧の矛盾と苦痛を解決し、そこから解放され

たければ、三十年にわたった台湾と大陸の非常事態を一日も早く終わらせて、台湾を早期に祖国に回帰させ、祖国統一の大業を成し遂げさせるしかない。「台北人」におけるこの種の芸術的効果について、おそらく白先勇は創作する前、また書き上げた後も予想しなかっただろう<sup>14</sup>。

いわゆる「革命史観」に拘束された八十年代初期の大陸の評者は、「統一」への関心からか、「台北人」の中の民族的要素、人間の普遍的感情などに理解を示したものの、最終的にかれらの苦痛の根源を人民の歴史の対抗側についた「台北人」たちの誤った歴史観に帰し、同情を示さなかった。

しかし、その後、大陸の白先勇研究は、むしろ白先勇の歴史意識に大きな関心を寄せるようになった。文革などの政治運動に翻弄された大陸の人々の心情は、歴史の無情、人間の無力を表現した白先勇の歴史意識に同調しやすいのはその一因であっただろう。そのためか、八十年代初期に、大陸では、一時期、人民の敵である国民党の末路の象徴として冷ややかに見られた「台北人」たちの悲運は、「革命史観」が著しく色あせた九十年代において、中国歴史の特性や中国人全体の運命をよく反映するものとして、捉えなおされるようになった。一九九五年に出版された劉俊の『悲憫情懷—白先勇評伝』はこの時代の代表的な白先勇論と言えよう。

歴史意識のほかに、白先勇文学における中国文学伝統の要素も大陸で大いに注目され、評価されている。白先勇の作品における中国の歴史意識や、伝統文化に対する継承などの理由から、大陸の研究者は白先勇を「正真正銘の中国作家」と評するようになった<sup>15</sup>。実は、振り返ってみると、台湾における現代文学の勃興が、六十年代の『現代文学』の存在や白先勇などの若い作家たちの活躍と不可分の関係にあったため、八十年代の大陸文壇において、白先勇をはじめは台湾作家として紹介されていたのである。

しかし、白先勇を「中国作家」に帰属させるようになったことによって、台湾から出発し、アメリカでの体験を基礎にしている白先勇の文学の独自性を見失うことにならないのだろうか。

たしかに、台湾文学を中国文学の一部分として捉えることができる。しかし、半世紀以上独自に発展を遂げてきた台湾文学は、その独自の性格をもっていることはいまでもないことである。そこには中国文学を「外」から見るという視点を備えている。台湾作家としての白先勇もちろん例外ではなかった。その意味では、中国文学伝統との同一性だけが注目されれば、白先勇文学の「外」からの現代中国文学に対するインパクトという視座は、もはや獲得することはできない。

同様、台湾における白先勇文学の批判者が、白先勇文学が台湾文学を代表できないという疑問を呈したのは、一面においては正しい。なぜなら、アメリカ在住の白先勇は台湾でその作品を発表しているとはいえ、台湾文学に対してやはり「外」の視点をもっているからである。

その意味では、大陸からの放逐とアメリカへの自己放逐という二重の放逐経験を持つ白先勇の文学は、中国に内在しつつ、「外」の視点を備えているものとして捉えることがで

きると思われる。放逐によってもたらされたアイデンティティ危機から、白先勇を中国にこだわらせ、また、放逐によって「外」からの視点を強いられ、自己放逐によって「外」からの視点をみずから意識的にもつようにさせた。では、このような「外」からの視点がどのように形成され、また、その独自性がどこにあるのだろうか。

## 第1章 白先勇文学の独自性

### 一 白先勇文学の原点

#### 1、「六十年代世代」の一員としての白先勇

実際、白先勇の文学は六十年代の台湾文学と切っても切れない関係にあり、戦後台湾の知識人の精神史の重要な一面を体現している。日本の研究者陳正醜は、白先勇を「六十年代世代」、すなわち「一九六〇年前後に青春を迎え、同時に台湾の文学・思想界の主力となった世代」<sup>16</sup>の一員として位置づけて、つぎのように指摘した。

白先勇の中国に対する心情は、白崇禧を親に持つ彼個人の特殊な境遇と心理に帰すべき要素を含んでいるとしても、なお、あらゆる意味で過渡期の存在であった、白が属している世代が共通して感じ取っていた閉塞状況の反映であることを否めない。この点から言えば、白の小説のこの側面の考察はむしろ、この世代の知識人の国家・民族との関わり方と彼らの人生に対する希望と不安の混在する心境との関連という、戦後台湾思想史上の一般的なテーマに対する探究の一助となりうるかもしれない<sup>17</sup>。

同じく「六十年代世代」の一人である劉大任が、一九八一年に、六〇年代前半の台北を舞台にした小説『浮遊群落』を発表した。その中で、劉は、一九六〇年代の若い知識人たちを浮遊生物、つまり社会に浮かれた存在として表現し、当時の台湾社会における「六十年代世代」の強い疎外感を代弁した。

六十年代の台湾は大変閉塞の社会であった。大陸政権をなくした国民党政府は国際社会において孤立されていた。一九四九年に大陸から台湾へと敗退したあと、国民党政府は、終始「反共、反攻」を掲げ、あらゆる面で軍事独裁を実施し、新聞、出版から大学の講義内容、個人の発言の自由まで厳しい言論統制を行っていた。中国近代史以後の思想、歴史、文学に対する継承も厳しく制限されていた。魯迅をはじめとする大陸の学者の著作は、台湾で禁書になっていた。他方、日本の植民統治から解放されたと喜んで「本省人」は、「二・二八事件」の弾圧、日本語排除などの新たな専制を受けて、社会における発言の可能性を失ってしまった。こうした厳しい統制がなされた一方、台湾に渡った数百万とも言われた「外省人」の望郷の思いが政権側の「反攻、復国」の原動力として利用され、ひたすら煽られた。そうした背景の中で、当時の台湾文壇では、もっぱら「郷愁文学」や、政府の立場を支持している「反共文学」によって埋め尽くされていた<sup>18</sup>。



そんな環境に最もなじめなかったのは若い世代であった。彼らの中には、一九四九年に親世代と共に台湾に渡った白先勇のような「外省人」がいた一方、日本語の教育を受けた親の世代とは異なり、北京語の学校教育を最初から受けた陳若曦のような「本省人」もいた。六十年代に入ると、青春を迎えた彼らは、自分たちの上の世代の郷愁によって織り成された社会——しかも、それが体制側の都合によって裁断され、記憶の断片でできた虚構の社会——に強い抑圧と疎外感を覚えた。白先勇は、一九八八年に書いた『現代文学』創立の時代背景及びその精神風格の中で、「六十年代世代」が直面した困境を次のように指摘している。

事実上、われわれの父兄の世代が大陸で作り上げたあの旧世界はとっくに瓦解し、崩壊した。われわれはあのすでに消えて、あくまでも記憶と伝説の中にしか存在しない旧世界とは自己同一することができない。われわれは父兄の庇護の下で成長したのだが、しかし他方では、父兄の世代が旧世界から持ってきた価値観をわれわれに強いることから抜け出して、独立した人格と理想を求めなければならなかった。エリクソン (Erik Erikson) のいわゆる「認同危機」(identity crisis) は、われわれのときに相当に深刻なものであったのである<sup>19</sup>。

劉大任の「浮遊群落」と、白先勇の「認同危機」とが共通しているのは、六十年代の台湾社会に対する疎外感と拒否感であった。それは西洋の現代文学の紹介に力を入れる『現代文学』が一九六〇年に若い知識人たちによって創られ、歓迎された原因であり、また流浪の意識と結びつく海外への自己放逐を引き起こす心理的要因でもあった。後に台湾現代文学の主力となった「六十年代世代」の出発点は、まさに疎外感から由来する当時の台湾社会への強い反発と拒否にあったのである。彼らのこの時期の作品は、現実から逃避して、人間の内面を表現しようとする傾向が強かったのは、以上のような精神的背景があったといえよう。

「六十年代世代」は、その後、それぞれの道を歩み始めた。よどみ、救いがないように見えた台湾社会は、六十年代以後、経済の急成長時代に突入した。社会が大きく変動する中で、文学青年はそれぞれ行く道を選んだ。一つは現実に目を向けたものである。例えば社会主義的理想を抱いて、資本主義に走る台湾社会を批判する作家陳映真である。彼は一九六八年に台湾当局に叛乱罪に問われ、七年の牢獄生活を強いられたが、出獄後、彼は、台湾の現代社会における多国籍企業などで働くさまざまな台湾人の生き方を描き、近代社会に対する批判を展開した<sup>20</sup>。また、アメリカに渡った後の劉大任は、憧憬していた中国大陸に対して、次第に批判的な目で捉えるようになった<sup>21</sup>。

もう一つの道は、国家、政治から遠ざけて、人間の内面の世界を探求し続けるものである。たとえば、王文興はその代表的な作家である。六十年代に白先勇らと一緒に『現代文学』を創刊させ、西洋の現代主義文学を積極的に紹介した王文興は、終始、現代主義の文学理論を提唱、実践し続けている<sup>22</sup>。一九七三年に発表された彼の代表作「家變」は、父親を家出に追い込んだ息子の心理を描いた作品である。その作品には前衛的な手法を駆

使され、中国社会の伝統的な倫理観、人間関係が批判され、反伝統の色彩が強かった<sup>23</sup>。

そして、同じく社会に対する強い疎外感から出発した白先勇は、渡米を機に、個人的な悩みに留まらずに、国家、民族、歴史の問題に主題を広めたが、個人の疎外感作品の中で消えることなく、歴史にはじき出された「台北人」たちの悲劇や海外に流浪する中国人のアイデンティティの危機を二重写しにして、歴史の裏を暴き、中国人社会の不安定性を表現することに成功したのである。

いずれにせよ、疎外感は閉塞の時代に置かれた「六十年代世代」の精神的原点であり、六十年代の台湾文学に政治に左右されない独立な視点を持たせた。それらが今後どのように継承されていくのか、それとも切り捨てられてしまうのかは、台湾文学の将来を占う要素になるだろう。同様、大陸でも、中国近代史の翻弄によって大陸から放逐され、さらに台湾から海外へと自己放逐した体験をもった「六十年代世代」の文学の独特な価値を見落としてしまえば、歴史に対する批判の契機と、中国現代文学をより豊かな視座をもたらす可能性を失いかねないだろう。

## 2 白先勇の独自の疎外感

白先勇が「六十年代世代」の一員として、当時の台湾社会に対する疎外感を抱いていたことは前述した。しかし、同時に、白先勇は「六十年代世代」と共有した疎外感以外に、さらに彼個人的な疎外感も抱いていた。それは小さい時から募らせてきた周囲への違和感であり、同性愛者の故に抱える孤独と不安であった。

白先勇は、一九三七年、中国の広西省南寧市で生まれ、一歳頃故郷桂林に戻った。父親は国民党の将軍白崇禧であり、北伐戦争や抗日戦争で名を馳せて、抗日戦争が勝利した後、国民党政府の初代国防省長官に就任した人物である<sup>24</sup>。

白氏の祖先は、元の時代にアラビアからインド洋、南シナ海、東シナ海を経て南京に辿り着いたイスラム教徒であり、明に至り、太祖が外国人に外国名字の使用を禁じたため、白という名字に改姓したといわれる。白先勇の父親は貧しい環境で育てられた。しかし、勤勉な白崇禧は困難な状況の下でも勉強を続けて保定軍官学校を卒業、後に北伐、抗日戦争を通じて、智勇兼備の才能を存分に発揮し、一人の兵士から将軍の地位まで登り切った。したがって白崇禧は子供の勉強を大変重視する、厳しい父親だった<sup>25</sup>。

白先勇の母親馬佩璋は、桂林の豊かな官吏家庭で生まれ育ち、胆力と知謀を持った前向きな女性であった。抗日戦争及び国、共内戦の中で、大家族を連れて何度も無事に避難して、十人の子供を育った彼女は、白先勇にとってこの世で最も尊敬する人の一人であった<sup>26</sup>。

白先勇は十人兄弟姉妹の五男で、上に三人の姐、四人の兄、下に二人の弟がいた。十人兄弟の中で白先勇はとりわけ三番目の姉白先明と仲がよかった。二人は年が三つ違いで、桂林にいた頃いつも一緒に学校に行ったり、遊んだりしていた。特に白先勇が肺結核を患い隔離された期間中、先明が唯一大人の目を盗んで見舞いに来た人である。先明は心の優しい人だが、勉強はあまり得意ではなかった。内気の彼女は十人兄弟の中で、両親に見落

とされやすい存在であった。先明は一度アメリカに留学にいったが、結局、精神病にかかり、親の元に戻った。彼女は四十九歳のときに、肝炎にかかり亡くなった<sup>27</sup>。先明との兄弟愛は白先勇にとって、幼少時代の数少ない暖かい思い出であった。

白先勇は七歳まで桂林で楽しい幼年時代を送った。父が将軍として活躍していたため、家の中で宴会が開かれたり、貴賓たちが出入りしたりして繁盛ぶりを呈していた。特に父の凱旋を祝う宴会と祖母の九十歳誕生祝いの盛況は、幼い白先勇の記憶に焼き付けた<sup>28</sup>。

その時期、上の姉妹たちは先明を除いて皆重慶で勉強していた。弟たちとの年齢の差もあって白先勇は殆ど先明と一緒に行動していた。そうした体験によって白先勇と先明との間に強い絆が築かれた。

そんな憂愁知らずの幼年時代から一転して、一九四一年以後、白先勇は転々と移る生活と肺病との戦いに明け暮れる少年時代に入った。何よりも幼い白先勇の心を傷つけたのは、伝染病のため皆から隔離されたことである。それまでのちやほやされた地位から、いきなりまわりから棄てられたような境地に立たされた。肺病に特效薬はなかった当時、白先勇の周りの人は移されるのを怖がって、皆彼をなるべく避けようとしていた。肺病が治ったまでの四年間、白先勇は世から隔離された。

病中のある日、家の近くの川が氾濫して男女を乗せた小舟を波で呑み込んだのを病床で見た白先勇は、手が差し伸べられないことに焦りを覚えた。また、自宅の花園で行った賑やかな宴会に参加させてもらえないとき、幼い白先勇は「一瞬、人に棄てられ世に忘れられた悲しみ、怒りが湧いてきた。思わず慟いた」<sup>29</sup>。このように病氣と孤独が幼い白先勇の心に死の影を落としてしまった。

私の童年——実は、私にはほかの子供のような童年はなかった——は上海郊外にある大きな囲まれている庭で過ごした。一日中花、草や小動物を仲間にしていた。いつも独りぼっちだった。あの日々について、今でもはっきりと思えている。庭にあるアオギリの葉が落ちたのを見て、思わず愁傷にとられたこと。あの時私はまだ子供だったのに<sup>30</sup>。

七歳の白先勇は身に迫ってくる死の恐怖、周囲の人から見捨てられた憤懣と耐えがたい寂しさをひとりで耐えなければならなかった。明るく、好奇心旺盛な、活潑な童心が失われたかわりに、敏感、繊細で、感情豊かな心が時間と共に培われた。童年時代の隔離された経験が白先勇の性格を大きく変え、彼の後ほどの文学にも大きな影響を及ぼした。

さらに、七歳（一九四四年）から十五歳（一九五二年）までの八年間、白先勇は国民党軍隊の進退とほぼ一致して、桂林から重慶、南京、上海、南京、武漢、広州、香港、台北へと転々とした生活を余儀なくされた。こうして病氣と戦乱のせいで、白先勇はどこでも長くはいられなくなり、まわりの子供たちの輪に入れず、孤独だった<sup>31</sup>。

台湾に着いた後に、白先勇は台北建国中学校に入った。当時のことを白先勇は次のように回想している。

台湾の高校に入った私は、三年間に三分の一のクラスメートと挨拶さえ交わすことは

なかった！それは私が傲慢で人を無視したのではない。考えてみると、多分、私は彼らの世界に入るのを怖がっていたからであろう。彼らの世界は私のそれとずいぶん違っている。私が意味しているのは内面の世界で、社会階級、家庭背景などとは無関係である<sup>32</sup>。

周囲から隔離された童年時代の体験と戦乱による頻繁な移住は、白先勇と同年代の仲間との交流を妨げ、彼を孤独の世界に押し込んだ。

さらに、もうひとつ白先勇に周囲からの疎外を感じさせたのは、彼は同性愛者だったからである。白先勇は自分が同性愛者であることを公にしたのは一九八八年であったが、一九五四年、彼が十七歳の時からすでに同じ中学校の同級生である王国祥と知り合い、その後三十八年間連れ添った。周囲に理解されえないなかで、王国祥はおそらく白先勇の感情世界の唯一の理解者であったろう。しかし、そうした二人の間の感情も多くの苦難の洗礼を受けなければならなかった。白先勇と王国祥は高校卒業後一緒に台北を離れて、台南にある大学に入り、二人の世界を作った。しかし、一年後、白先勇は台湾大学教員である夏濟安の主催する『文学雑誌』に惹かれて、王国祥を台南に残して、台北にある台湾大学に転学した。一年後、白先勇の後を追って王国祥も台湾大学に転校し、二人はようやく一緒になれたが、今度、王国祥が難病である再生不良性貧血にかかり、生死をさまよった。白先勇は『現代文学』の編集、出版、さらに文学創作を精力的に行ないながら、王国祥の看病に当たった。王国祥もまた白先勇の『現代文学』に支援を惜しまなかった。病気から回復後、奨学金をもらってアメリカに留学した王国祥は、長い間毎月自分の奨学金から二百ドルを『現代文学』の経費に当て、白先勇を裏で支えた。一九八九年、王国祥の病気が再発し、三年間の闘病の末、一九九二年五十五歳の若さで世を去った。一九九九年一月、白先勇は『聯合報』に「樹猶如此」<sup>33</sup>のエッセーを發表し、王国祥と一緒に過ごした日々を振り返って、その早すぎた死を悼んだ。この文章の中で、白先勇は二人が力をあわせて病魔と闘い、その成敗に一喜一憂したことを綴ったが、社会や周囲から受けた疎外を全く触れていなかった。しかし文章に溢れている深い愛情、信頼は、この同性愛カップルが病魔をはじめとする多くの阻害と闘ってきたことを物語った。

## 二 白先勇の作品と先行研究

### 1、三つの時期

白先勇の創作は小説、脚本、翻訳、評論、エッセーなど多岐にわたるが、小説に限定してみれば、一九五八年から今日まで、全部で三十八篇の短編と一部の長編がある。それらの作品はいずれもアイデンティティの探求に関わるものであるが、同性愛など個人的な疎外感を表現する早期、歴史記憶をめぐる違和感や国家、民族の不安定性を表現する第二期、そして個人レベルから歴史、国家、民族レベルまでの自己統一の困難を一律に取り上げ、アイデンティティそのものの持つ複雑さ、不安定さ、自己衝突の性質を描く第三期、という

三つの時期に分けることができる<sup>34</sup>。

早期は一九五八年のデビュー作「金大奶奶」から一九六二年の台湾を離れる前の「卒業」までの十一部の短編からなっている。これらの作品は時間の流れによる生命の消失への危機感や周囲への違和感が表現され、作者の人生や社会に対する茫然たる不安、孤独が浮かび上がらせた。

こうした早期の作品に見られる個人の苦悩に耽った傾向から脱皮したのは、渡米後創作された「台北人」シリーズと「紐育客」シリーズにおいてであった。中国近代史や中国に対する作者の考えや思いが鮮明に表現したという共通項は、この二つのシリーズを白先勇の第二期の作品に分類する理由である。「台北人」シリーズは、一九六五年に発表した「永遠の尹雪艷」から一九七一年に発表した「国葬」までの十四部の短編が含まれる。これらは、いずれも一九四九年に民国政権が大陸から台湾に撤退した際、台湾になだれ込んだ大陸の人々を主人公にしている。台湾生まれの人々から「外省人」と呼ばれた彼らの人数は、数百万にもものぼると言われている。白先勇は「台北人」シリーズにおいて、こうした台北に生きるさまざまな階層の「外省人」の境遇を描き、有為転変する人間の中に、大きな歴史の流れを浮かび上がらせた。特に歴史にはじき出された「台北人」たちの精神世界に対する考察によって、民国の歴史の裏に明かりを当てたのである。作品の中で、白先勇は抗いがたい歴史に疎外された「台北人」たちの無力さと悲惨さを描いただけではなく、逆境や喪失感に圧倒された「台北人」たちが多かれ少なかれ過去や故郷の記憶を浄化したり、美化したりするような精神的萎縮や、貧弱、狭隘さを描いたことによって、嘗て生き生きとした民国の歴史が活気と精彩を失い、崩壊の一途を辿っていったという悲劇的な過程を表現した。そこに表現された人と歴史との持ちつ持たれつの関係、つまり、人間と歴史とがお互いに影響しあうことは、白先勇の独特な歴史意識と言えよう。白先勇が故郷喪失という大きな苦難と試練に見舞われた「台北人」たちを通して考察した人と歴史との依存関係は、度重なる存亡の危機に立たされた二十世紀の中国人と中国近代史との間の関係を象徴しており、歴史に対して翻弄される無力感と崩壊させた責任感という矛盾に苦しめられ、揺れ動いていた二十世紀の中国人の心の彷徨を映し出したのである。

また、アメリカに在住する中国人を描く「紐育客」シリーズは、一九六五年に発表した「謫仙記」をはじめ、一九六九年の「謫仙怨」、一九七九年の「夜曲」、そして、一九八六年の「骨灰」の四作からなっている。本稿はその四作のほかにも、白先勇が渡米後の一九六四年、一九六五年に創作された「シカゴの死」などの五作もこのシリーズと関連して論じる。なぜなら、これらの作品が、社会主義の中国大陆や、自由・民主と称した六十年代の台湾、さらにアメリカのどちらにも帰属しない、いわゆる宙吊り状態にある中国人の国家、民族をめぐる複雑な思い、不条理の感覚を表現した、という点では共通しているのである。これらの作品は、もつれた人間関係に疎外され、散々痛めつけられながら、それにこだわったり、しがみつくながら自己の存在が求められないと自覚したりすることなど、海外中国人の心の葛藤を通して、二十世紀の、政治から文化や、社会生活までのあらゆる基盤が揺るがされ、より所のない中国の危機的な姿を浮き彫りにした一方、最悪の状態のなかでも変動する可能性とかすかな希望を秘めているというもう一つの中国像をも覗かせた。つま

り主人公たちの激しく衝突する心情の裏に、危機と希望という、二つの中国像のぶつかり合いがあった。

この常に不安定状態にある中国像は、実は、白先勇の民族的アイデンティティをめぐる思いの表れである。民族的アイデンティティを追求しながら、その不安定性を明確に自覚し、表現した白先勇の文学は、二十世紀六十年代の台湾文壇では貴重な存在であった。なぜなら、六十年代当時、「六十年代世代」の文学者の中には、閉塞の台湾社会に反発したため、陳映真や劉大任などのような密かに社会主義中国に憧れを抱いた人も存在し、王文興のような西洋文学に傾倒した人も多く見られ、さらに渡米後、生活や学業に追われて、創作をやめた人も続出した。こうした中で、そのどちら側にも属さない白先勇が書き続けた作品は、作者の独自の視点によって独自の道を切り開き、六十年代の台湾現代文学や思想をより豊かにした。そして、特定の理念や政治教条、強い社会意識によって物事が単純化され、硬直的に捉えられがちな現代の中国文学の中でも、白先勇の描いたダイナミズムに満ちた中国近代史、中国像はひととき異彩を放っている。

こうした歴史や、国家、民族を立体的かつダイナミックに捉えた第二期の作品は、同性愛者であり、また、歴史や国家の枠組みにはじき出された疎外された者の一人として、白先勇自身が常に疎外感を感じ取り、そこから逃げずに向き合い続けたことによって創作されたものである。それは、同時に、人間の存在の不安定性について身をもって体験した二十世紀の一文学者の心得であったろう。

一九八一年に単行本として発行された長編小説『孽子』は、台北の同性愛者の溜まり場に入出入りする十代の若者を主人公にした作品である。彼らは戦後の台湾で生まれ育ちながら、同性愛者であるために、学校や家庭から追い出されてしまった。若い世代のほか、「台北人」世代、「紐育客」世代も、同時に作品の中で登場し、三つの世代が互いに関わっていくというのは、この作品に見られる最大な特徴である。この作品には、世代間の歴史意識の違いや、民族的アイデンティティに対する自覚の有無など、中国近代史や中国という要素も存在しているが、しかし、それらがあくまでもこの作品に描かれたいろいろな人の多種多様なアイデンティティの一部にすぎない。作品の中で、中国近代史に放逐された「台北人」、中国から疎外された「紐育客」、そして社会から追放された同性愛者など、これらの主人公たちは嘗てそれぞれの苦痛に閉じこもっていたが、同性愛という問題をきっかけに、お互いにぶつかったり、交流したりするようになった。その結果、彼らは今までの自分を反省しはじめ、他の世代を理解しようと努力しはじめるようになり、新しい人間関係を築く糸口を掴んだ。言い換えれば、この作品には、一人ひとりの感情や、尊厳、家族のあり方などを相互に理解、尊重し、連帯感を持つことによって、新しい人間関係を築き、異なった歴史意識や、国家、民族的アイデンティティがもたらした世代間の断絶を克服しようとする作者のメッセージが込められていると思われる。その意味では、この作品は、「中国」とはなにか、中国近代史とはなにかを中心に追求した白先勇の第二期の作品と違って、第三期として分けることができる。同じく人間の基本的な感情や生死に対する思いを追求する二〇〇二年の短編「Danny Boy」と二〇〇三年の短編「Tea for Two」も第三期に分けられる。

## 2、先行研究

白先勇文学に対して、今までいろいろな角度から注目され、白先勇と白先勇文学に関する研究はこれまで大きな成果を挙げている。特に、政治意識に囚われない白先勇文学の研究としては、欧陽子、夏志清、陳正靨、劉俊、林幸謙らの研究は代表的である。

### (1) 普遍的主題の析出－欧陽子の研究

欧陽子は、白先勇とは台湾大学時代の同期生で、大学時代から文学活動を行い、『現代文学』周辺の現代派の一員として知られている。彼女は白先勇と共に熱心に『現代文学』の創刊、編集に携わり、中心的な役割を果たしていた。大学卒業後、欧陽子は白先勇と同じように、アメリカに渡りそこに定住した。彼女はアメリカに渡った後も中国語での文学創作、文芸評論などの仕事を精力的に続け、著名な華文作家である。欧陽子は一九七六年に、白先勇研究の専著である『王謝堂前的燕子—「台北人」的研析与索隱』を発表した<sup>35</sup>。この著書は「台北人」シリーズの十四篇の小説を詳細かつ周到に分析したものである。白先勇の作品を専門に研究したこの著作は、発表後高く評価された<sup>36</sup>。「台北人」シリーズについての欧陽子の分析は、白先勇本人も高い評価を与えている。白先勇はこの著作についてこのように述べたことがある。

欧陽子がこの本を著す前に、私と相談したことはなかった。私は彼女の構想にも関与していない。書き終わった後、私が読んでみたら、たいへん驚いた。私に対する理解は、彼女が私自身よりも深い。……これは傑出した文学評論である。欧陽子は厳格な西洋文学評論の訓練を受けたことがあり、文学や、人生に対する高度な洞察力を持っている。この本は、新批評法という研究方法を用いており、また、彼女の中国文学に対する感性を持ち合わせたために、非常に優れている<sup>37</sup>。

「台北人」シリーズに対する欧陽子の研究は、白先勇の作品の根源的なところを衝いたようである。欧陽子の著作は、「台北人」シリーズの作品を逐一に分析した十四篇の論文と、作品の主題を概観する「白先勇の小説世界」から成っている。著者は作品分析の論文の中で、主として白先勇の優れた創作技法、巧みな作品構成と表現の鋭さなどに着目し、作品の芸術性を高く評価した。さらに、「白先勇の小説世界」において、欧陽子は「今と昔の比較」、「魂と肉欲の争い」、「生と死の謎」という三つの側面に分けて、白先勇の作品の主題を探究した。欧陽子は、白先勇の作品の中には、中国の伝統文化・社会の解体と没落に対する哀惜の念が見られると指摘し、それは究極的には、止まらぬ時間の流れの中で、生命が減びていく、という白先勇の抱いた人類の宿命への不安と怨恨に由来するものだと主張した。つまり、彼女は、白先勇の作品の主題が、人類の抱えた普遍的な危機意識を表現するものだと見ているのである。欧陽子の上述の見解について、白先勇は、

欧陽子は、私の小説が過去と現在とを対比させていると指摘した。考えてみれば、私が今までの書いたものは全部この主題の延長であった

と認めている<sup>38</sup>。欧陽子は、「台北人」シリーズの中から人間の宿命という主題を析出することに成功した。白先勇がその優れた創作手法を駆使し、主人公の「台北人」たちを通じて、人間が普遍的に直面している問題を表現した。では、そうした問題は、どのような構造の中で、具体化され、個性化されているのだろうか。言い換えれば、白先勇の独自性、白先勇が白先勇たる所以はどこに求められるだろうか。欧陽子の析出した主題、すなわち白先勇が意識的に表現しようとした実存への危機意識という主題は、人間に普遍的なものであり、これまで無数の文学者によって追求され、表現されてきた主題でもあり、必ずしも白先勇の作品にしか見いだせないものではない。したがって、白先勇の独自の特色は、恐らくそうした普遍的な主題を表現したこと自身にあるのではなく、それがどのような構造の中で具体化されているのかという点にあるのかもしれない。残念ながら、欧陽子の研究はそれについて答えていない。

## (2) 「中国」の発見－陳正醒の研究を中心に

これに対して、白先勇の作品に見られる「中国」の要素という特徴に注目したのは、夏志清と陳正醒である。

前述したとおり、夏志清がもっとも早く白先勇の「中国」意識に言及した。のみならず、夏志清はさらに、「台北人」シリーズの中に見られる「歴史感覚」(The historical sense)の存在が、白先勇の創作過程において極めて重要な変化と飛躍だと指摘した。この「台北人」シリーズにおける「歴史感覚」の特徴に対する夏志清の指摘は極めて重要な指摘だと思われる。しかし残念ながら、夏志清はそれについて具体的な論議を行っていない。

一方、大陸でも、「台北人」シリーズにおける歴史を反映する側面に注目した議論が多かった。しかし八十年代前半まで、大陸でのこうした論議には、革命史観に基づいた特徴が見られる。つまり人民に背を向けた「台北人」が滅びるのは歴史の必然であると見なし、歴史に対する批判はなかった。例えば、福建人民出版社が一九八二年に出版した『白先勇短編小説選』の中の「白先勇短編小説的認識価値」という評論は、「台北人」シリーズについて、「歴史舞台からはじき出され、まるで秋風にさらされた落ち葉のようなあの『上流社会』の衰亡の末路を細緻に再現した。それは白先勇の作品の価値である」<sup>39</sup>と論じている。封祖盛は「論白先勇的小説」の中で、「白先勇は旧中国の崩壊と台湾社会の衰亡を見たくないが、しかし、事実の前で、彼は現実を直視する勇気と悲しい気持ちをもって実際の状況をそのまま表現した」<sup>40</sup>と主張した。はじきだされた側の立場から歴史を反映することには、白先勇のどのような思いが込められたのかについて、大陸の白先勇論は追究していない。



そんな中で、作品に存在する「歴史意識」に注目し、そこから白先勇の思いを探究しようとしたのが、日本の研究者陳正醜である。陳は、一九八九年に「白先勇『孽子』と中国」という論文の中で、白先勇の長編小説『孽子』における「歴史」という要素を分析し、その中に白先勇を含めた「六十年代世代」知識人の実存と「民族」的アイデンティティの問題に対する執着や感慨が見られると指摘した<sup>41</sup>。国家や民族などの主題とは一見関連のない『孽子』から、陳は作品に織り込まれた「衰退の歴史を背景にした不確かな存在という『国』の形象」<sup>42</sup>をあぶりだし、白先勇の「中国」をめぐる思いをえぐり出した。さらに、放逐された作中人物の故郷への愛憎の混ざった心情や、定住、流浪に対する相反する感情、故郷についての親子の間に生じた差違などの、作品に潜んだ作者のメッセージを炙り出して、陳正醜は、自らを放逐した社会、そして「中国」との間の関係を模索する主人公の姿勢が描かれていると結論づけた。陳正醜の研究は示唆に富むものである。

しかし、陳正醜は『孽子』を通して抉り出したのは作中人物の中国意識であり、作者である白先勇の中国意識ではない、ということに注意しなければならない。そして、陳正醜の研究の力点があくまでも「六十年代世代」の一員としての白先勇における「中国」意識の存在を証明することにあるため、我々はそこから、「六十年代世代」の文学者たちの持つ独特な特徴を見ることはできるが、「六十年代世代」と区別される白先勇の独自性という点について、さらに白先勇自身の独自の疎外感や個人体験などの要素を考えるべき点が多く残っているように思われる。本論文は、白先勇と、同じく「中国意識」を抱いている同時代の文学者たちとの違いを明らかにし、白先勇の独自性を考察して、さらに、白先勇にとっての「中国」の意味について考えたい。

### (3) 普遍主題と中国主題の両面からアプローチ

近年、白先勇の小説をほぼ全面的に分析した著作は、主として林幸謙の『生命情結的反思』(一九九四年)と劉俊の『悲憫情懷』(一九九五年)という二つの研究がある。この二つの専著の共通するところは、白先勇の作品において、時間がもたらした人生の虚無を表現する側面と、中国近代史がもたらした中国人の生存危機という歴史的な側面とが存在していることに注目したことである。さらに、イデオロギー、社会一般の倫理や常軌に囚われずに、作品独自の論理性を解明しようとする両著者の姿勢も今までの白先勇論になかったものであり、この二つの著作は白先勇の作品に対する理解をより全面的なものにした力作であると言えよう。

林氏は主に西洋の近代文学理論を駆使して、白先勇の思想及び作品における人間の生存という主題を抽出し、西洋の近代文学思想と中国の伝統的リアリティ精神との融合を成し遂げた白先勇を高く評価する。「融合」という観点は、今までの白先勇論にもたびたび出て来た論点であるが、しかし、実際にどういう部分、どのように融合したのかについて、ほとんど論じられていないと思われる。それに対して、林氏は白先勇における「融合」を見事に立証した。しかし、林氏の白先勇論には、普遍的な主題と中国主題との融合という側面を重視するあまり、時代の変化にしたがって普遍的な主題と中国主題が起伏消長して

いたという決して安定した融合とは言えないという側面を見逃した。白先勇文学の実際の歩みを考察せずに、もっぱら論理的視点から分析するならば、作品自身のダイナミズム、息吹を見逃してしまう恐れがある。

一方、時代の変遷と共に人生に対する探求を深めていく白先勇の文学道路を「評伝」の形をとって詳細かつ丁寧に分析した劉俊氏の著作には、作品に込められた作者のメッセージを伝えようとする意欲が伺える。著者は、白先勇の文学手法を重視しながら、各時期の作品の特徴をよく概括し、白先勇の重層的な思想を明らかにした。しかし、劉氏は、白先勇における、歴史がいかに人間を翻弄し、人間を追い詰めたかという抗わない側面だけを指摘して、歴史を運命の女神のように受け止めた。この側面だけでは、白先勇の歴史意識を全面的に掴めたとは言えないと思われる。なぜなら、白先勇は「憂患意識」を持ち合わせた伝統的な中国知識人であるため（この点について劉氏も指摘しているが）、歴史に対する白先勇の心情には、ただ無力、感歎だけでなく、憂患、批判的な部分も大いに存在しているはずだからである。その意味で言えば、劉氏の指摘は、まだ白先勇における「歴史意識」の一面にしか捉えていない。同じ歴史にはじきだされた者として、白先勇は「悲憫」の気持ちで主人公たちの悲運を書きとめたが、そこには悲運に無抵抗の甘受ではなく、白先勇の抗争の姿勢があると思われる。

### 三 本稿の目的

では、前節まで見てきた白先勇の作品における普遍的テーマと歴史的テーマとは、白先勇の文学においてどのような関係にあったのか、また、それをどのように位置づければいいのか。これについて、山田敬三の「民族アイデンティティと白先勇の文学」の中での指摘はたいへん示唆的である。

白先勇がほぼ三十年間にわたって書き継いできた三十五編の短編小説と一編の長編『孽子』は、題材や内容から大別すればおよそ三種類に分類できるのであるが、しかしそれらの多くに共通してみられるのは、アイデンティティへの発問であり、中でも民族的なそれへのこだわりが、大きな比重を占めてある<sup>43</sup>。

つまり白先勇の文学創作には、アイデンティティへの問いという一貫とするテーマが存在しているということである。作品に見られる危機意識——欧陽子が指摘した人間の宿命に対する危機感や、陳正醜が抉りだした歴史によってもたらされた不条理など——が、いずれも彼の貫いたテーマに密接にかかわっている。しかし、アイデンティティへの探究という大主題から見れば、欧陽子と陳正醜の研究は、それぞれ白先勇文学における一側面だけを取り上げたといえる。なぜなら、欧陽子は歴史がもたらした危機意識の構造に注目していないし、逆に、陳正醜は「歴史」という要素を重視したものの、実存に由来する危機という普遍的テーマに目を配っていないと思われるからである。白先勇という作家の全体を見ると、実存と歴史の両方に由来する危機意識を総合に考察しなければいけないと思わ

れる。

歐陽子は、「台北人」シリーズから、実存に由来するアイデンティティの危機、換言すれば時間の流れの中ではまったく無力である人間の宿命からする自我の意味の喪失感、という白先勇が表現しようとした主題を見事に析出した。しかし、「台北人」がほかの「○○人」ではなく、「台北人」である最も大きな理由は、それが中国近代史という背景の中に置かれているからである。つまり、「台北人」には、夏志清が指摘したように、白先勇の「歴史感覚」が存在しているのである。実存に由来するアイデンティティの危機、喪失感はいわば世界中の人々に共通したものであるが、中国近代史の翻弄によってもたらされたアイデンティティの喪失は、まさに「台北人」だけが味わわされた不条理である。時間意識だけで包括しきれない歴史意識の現れが、「台北人」シリーズの最大の特徴であるといえよう。

しかし、注意しなければいけないのは、中国歴史を中心に据える民族アイデンティティは、白先勇の全作品を貫くものではないし、その内実もけっして一枚岩として捉えるべきではない。それには二つの理由が挙げられる。まず、白先勇の文学創作活動の全過程を概観すればわかるように、歴史的主題と普遍的な主題が消長、起伏の関係にある。一時期において確かに歴史的主題が鮮明に現れたが、しかし、その後、それを乗り越えようとする反動も明白に存在している。二〇〇三年十月に発表された最新作の中に、中国の歴史、文化などの中国要素がまったく見当たられないのは、そのためだと思われる。本稿は、アイデンティティの危機を深く探求することによって大きく変化していく白先勇の創作過程を、個人の存在に不安を感じた早期、中国人のアイデンティティへの探求・構築を試みた第二期、そして、歴史、民族の制限から自由になろうとする第三期、という三つの時期に分け、そこに見られる中国要素の起伏を追い、白先勇のアイデンティティの流動性、多重性及び対立の様態を明らかにしたい。

二つ目の理由は、白先勇の中国に対する思いは実に複雑で、葛藤に満ちたものである。そのため、第二期の作品に現れた民族アイデンティティはけっして不変のものではなかった。まず、「台北人」シリーズと「紐育客」シリーズに取り扱われた中国要素が大きく異なっていることは周知の事実である。前者は直接中国近代史に翻弄された人々を対象にしているに対して、後者は中国と直接にかかわりを持たない海外中国人を主人公にする。時代や社会における立場の違いは、当然、この二つの集団に中国の歴史や、中国人のアイデンティティ、伝統文化などに対する異なった考えをもたらしたのである。そして、「台北人」シリーズや「紐育客」シリーズのどちらを取ってみてもわかるように、そこに表現された歴史意識や、中国像は多種多様なものである。本稿は、白先勇がアイデンティティを探求する精神過程を考察するという問題関心から、従来、十分に分析されてこなかった「紐育客」シリーズを中心に、作家の想像と中国の現実とのギャップに揺るがされながら懸命に立ち上がろうとする白先勇の中国像を手がかりに、中国人への自己アイデンティファイすることに戸惑い、しかし、こだわり続ける、という白先勇の精神世界を浮かび上がらせたい。それは激動する時代に翻弄される中国人のものがく姿であり、国家、民族、文化、集団など多くの枠組みに分裂され、疎外され、抛り所をなくした現代人の一つの自画像でも

あると思われるからである。

## 第2章 疎外体験から「歴史主題」の誕生まで

白先勇の作品が最初に世に問うのは、国語の先生に励まされて雑誌に投稿した中学校の頃であったが、彼が本格的に文学創作を展開したのは、台湾大学に在学した時であった。この時期の作品は、1958年に夏濟安主宰の『文学雑誌』で発表された「金大奶奶」をはじめ、1963年にアメリカ留学するまでの間に書いたものを合わせて、全部で十一部の作品があり、いずれも短篇であった。

これらの作品は、主として、周囲に一体感を持ってない孤独感と疎外感、時の流れに呑み込まれ老いていく恐怖感、そして、前途を見出せない不安感、などを表現することを主題としている。これらの作品によって表現される危機感、多感の青春時代における白先勇の悩み、苦悶をよく反映したものだ。そして、そのような危機感の背景には、六十年代台湾社会の閉塞状況、それから作家個人の成長過程の影響などがあると考えられる。

### 一 「滄桑感」、「疎外感」と抵抗意志の形成

#### 1、二つの危機意識

白先勇の早期の作品は、主として二つの危機、すなわち、人間の実存の危機と疎外感の危機を表現している。前者は、時間のもたらした生命消滅への危機感として描かれ、後者は、周囲に溶け込めない主人公の違和感と疎外感が表現された。そして、過ぎ去る時間に対する敏感は、白先勇が「滄桑感」という中国の文学伝統に注目するきっかけになり、それが「疎外」とともに、その後も白先勇の作品の性格を規定する重要な要素となったといえる。

まず、時間が過ぎ去ることは人間に生存の危機をもたらす、という人間の実存に関する主題は、白先勇が作品の中で一貫にして表現するテーマである。白先勇は自分の早期の作品の創作時期を「ロマンティシズムの時期」<sup>44</sup>と呼んでいる。彼はこの時期を振り返って、次のように述懐している。

あの時、私は年がまだ二十一、二ぐらいで、若かったが、時間に対してすでに大変敏感になり、時間が流れて逝くのを感じていた。あの時から、時間が流れて逝くことは私にとって、ずっと最も関心を持ち、最も敏感なテーマのひとつである<sup>45</sup>。

白先勇は、この時期の作品を取り上げて、自分の意識を説明した。たとえば、「月夢」と「青春」は、いずれも老人と少年との対比、及び同性愛を描いたものであるが、しかし、より高い次元から見れば、この二つの小説はいずれも、青春が戻れないことと、時間、及び時間の移り変わりによってもたらされる壊滅と、に対する恐怖—あらゆるものはみな時間の流れと共に消えること—を描いたのである。そして、「月夢」と同時に発表した「玉

卿嫂」は、熟年の女性とある若い男との愛を描いたものだが、時間もやはりその中の主要な要素のひとつである。そもそも、愛情と時間とは、密接不可分の関係にあるのである<sup>46</sup>。

明らかなことに、白先勇がその早期の作品において、戻らない時間のもたらした危機を表現しようとしたのである。時間の束縛に囚われた早期の作品における主人公たちは、いずれも自我の存在、自我の価値を見出せない困境、つまりアイデンティティの危機に陥っていたのである。

小説「月夢」は、失った愛を時間の手から取り返せない医者悲哀を描いた。呉医師は、数十年前に、美少年静思と巡り会ったが、幸せはわずかの間で消えた。静思がその直後に肺炎を患い、命を落としてしまったのである。静思を失ったことでたいへん悲しい思いをした呉は、数十年後の今敏腕の医者となった。そして彼は再び肺炎を患い瀕死の美少年と出会った。しかし彼の必死の治療も甲斐がなく、その少年がまた亡くなった。

この小説は、実は命を助ける医師と生命を奪う病気、時間との戦いを描いたものだと思う。その結果は病気、時間が全勝で終わった。二人の美少年は、同性である呉医師にとって、自己愛の象徴であり、仕事の意義、自我の価値の象徴でもあった。少年の命を助けることができなかつたため、呉医師は深い敗北感と喪失感に陥った。

時間に思うままに翻弄されて、何もすることができなかつたのは、「小陽春」の中の数学者である。若い頃有能の数学者であった勲教授は、長い年月のあとに、自分の才能と家族愛をいつの間にか全部失ったことに気づき、彼はもどかしさ、悔しさと無力感に襲われた。小説の中で、数学者は数学の複雑の構造が解けられるが、時間の中の自分の人生をまったく予想できなかつた。若き頃の彼の才能を見抜いて、その明るい前途を明言した大先生の予言は空しくなり、最愛の娘も偶然の火事で命を落とした。時間の中での人生がいかにも無常であり、空しいものであるのかを、白先勇は勲教授の哀傷を通して、存分に描き出した。

時間の侵食から生命の輝きを取り戻そうとしたのは、「青春」の中の老人である。青春を絵にして、それを永遠不滅のものにさせようとした老画家は、少年の美しく、純潔で、活力に溢れた裸体を画布に一生懸命に描き残そうとした。しかし、老衰の彼は、結局、画布に青春という二文字だけを残して、とうとう力が尽きた。

さらに、以上のような時間に由来する危機のほか、白先勇の早期の作品における主人公たちを取り巻くもう一つの危機が存在している。それは周囲との一体感が得られない疎外感による苦悩であった。これらの小説における主人公はたいてい個人的な弱みを持つ人間であり、自分と周囲の違いを無意識に感じ、周囲への違和感を禁じ得なかつた。

「金大通通」のなかで描かれているのは、ある容貌平凡の女性の悲劇である。洒落た男金大に嫁いだ金持ちの女性—金大奶奶は、財産が夫に取られ、彼女自身も夫に虐待された。結局、夫が若い女を正妻として家に迎える日に、彼女は自殺を選んだ。

「厘断看菊花去」は、「私」が精神病を患った姉に「一緒に菊の展覧会を見に行こう」とうそをついて、姉を精神病院につれて入院させる過程を描く短篇である。現実の世界を拒否し、自分の世界に閉じこもっている姉に、「私」は理解と共感を持っているため、彼女を騙して入院させるということを非常に不憫に思う。しかし病院へ行く途中、姉はどう

しても帰りたくなかった。周囲の人からの怪訝な視線が、「私」の姉に対する態度を急変させた。

姉がいきなり引っ張ったため、私は足元がぶらつき、彼女の胸元に転びこんだ。その途端にまわりから大笑いが起こった。慌てた私は何故か姉の腕を強くつねった。姉は『あぁ』と悲鳴を挙げ、あがきをやめて、次第に平静とおとなしさを回復したが、丸く腫れ上がった顔が大きく歪んだ<sup>47</sup>。

「私」は姉を不憫に思う一方、周囲の視線をたいへん気になっていた。まわりの注目を避けようとするため、私は結局、姉を傷つけることを選択した。しかし自分と心が通じ合う姉を鉄条のついている病室に入れたあと、「私」の心の痛みがいつまでも和らげられない。

また、「悶雷」は、惨めな夫とハンサムな男との間で、心が激しく揺れた女性を描いた。迷いに迷った末に、彼女はどちらにも自分を託したくなくなった。一人に取り残された彼女は、暗闇に包まれた。そして、「偲眺議十七歳」の中で、同性愛傾向のある楊雲峯は、同級生や家族と、新公園の同性愛者のどちらにも違和感を持ち、自分の居場所は寺にしかないと真剣に考えた。

以上の作品の中に見られる主人公は、いずれもまわりに溶け込めずに、自己の居場所を見出せない困境に直面していた。彼らにとって、自分を取り巻く環境は窒息させるものであり、時には致命的なものであった。

## 2、危機意識の背景

周囲に適応し得ない苦悩は、まず、白先勇の孤独な青少年時代と大きく関わっていると思われる。実は作品に描かれた肺病、同性愛の傾向、精神病の姉など、白先勇の実生活と一致している要素が多かった。夏志清は「白先勇早期的短篇小説」の中で、それについて指摘している。

白先勇早期の小説は、二種類に分けることができる。一種類は多かれ少なかれ自分自身の体験に基づいて創作したものである。例えば、『金大通通』、『我們看菊花去』、『囁売菱』、『偲眺議噴鈍慎』などがそれである。これらの小説は、いずれも第一人称の記述という形を取っていたが、しかし、物語を語る人物は、後の『謫仙記』の中の『私』と異なり、多少幼少時代の作者の姿と重なっていた<sup>48</sup>。

当時に夏志清はあくまでも推測に基づいてこのように論じたのである。近年になって、夏志清の推測を裏付けたいくつの事実が白先勇自身によって明かされた。一つは、姉の先明が精神病を患ったことは、一九八三年に、白先勇が亡くなった姉の先明を偲び、「第六隻手指」を発表したことによって明らかになった。もう一つは、白先勇自身が同性愛者で

あること。一九八八年七月号の『PLAYBOY』に蔡克健の「訪問白先勇」が掲載された。その中で、白先勇は自分の同性愛傾向が生まれつきのものであると語った<sup>49</sup>。

また、すでに紹介した幼少時代の孤独の闘病生活と家の頻繁の遷移も、白先勇の孤独の性格形成に大きな影響を与え、彼の、周囲に対する違和感によってもつ疎外感をもたらした。幼少時代の生活体験は、同時に白先勇における今ひとつの危機意識、すなわち時間のもたらした生命消滅の危機感、を形成する重要な原因でもあった。

童年時代の生死の縁を彷徨した経験は、白先勇にとって忘れられない体験であったに違いない。重い肺病を患った彼は、特効薬のなかった当時、いつも死の恐怖に脅かされていた。その時から、人間の意志に左右されない時間の無情さ、時間によってもたらされる危機への焦慮が、すでに彼の心に焼き付けられたのだろう。そうした経験があつてこそ、のちに、時間との対決の中で、敗北するのはいつも人間のほうだ、という人間の宿命の主題が、白先勇の早期の作品に執拗に出てきたのである。

幼い白先勇を孤独の世界から救ったのは、中国の古典文学であった。そして、白先勇が中国古典文学の中から読み取ったのは、なによりも、時間のもたらした世の移り変わりを感嘆する「滄桑感」という文学感性であった。白先勇は後にこのような「滄桑感」を「中国文学の最高の境地」と位置づけている。

中国文学の重要な特徴の一つは、歴代の興亡や、時代への感慨と悲しみに対する追悼である。屈原の『離騷』から杜甫の「秋興」八首まで、それらのなかで表されていた人間社会の移り変わり（滄桑）という物寂しさ（蒼涼感）は、まさに中国文学の最高の境地であった。それは『三国演義』における「青山依旧在、幾度夕陽紅」という歴史感、および『紅樓夢』好了歌における「古今将相在何方、荒塚一堆草沒了」という無常感でもあった<sup>50</sup>。

中国文学伝統におけるこのような「滄桑感」が自分の人生観と創作に大きな影響を与えていることを、白先勇はいろいろな場で言及している。

もちろん、「滄桑感」のなかの歴史感は、白先勇がその早期の作品を創作するときはまだはっきり意識されていなかった。しかし、少年時代に、病魔に命を脅かされた体験が、白先勇に中国古典文学が表現した時間のもたらした危機に対する哀愁と無力感——「滄桑感」に共鳴しやすくさせていることは明らかである。周囲から隔離され、孤独と恐怖に強いられたことを体験した彼は、後に、中国の文学伝統のなかから自我表現の感性を見出したのである。その後、時間のもたらした危機を反映し、時間の中で無力のままである人間の苦痛を表現するのは、彼の文学創作の根源となった。「滄桑感」は白先勇の作品の性格を規定する重要な要素の一つになった。

さらに、白先勇の早期の作品が表現した若者の孤独、危機感は、単に彼自身の体験を反映しただけではなく、六十年代の台湾社会をも映し出したといえる。序章ですでに述べたように、六十年代の台湾は閉塞の社会であった。

このように、以上のような個人的な孤独体験と同性愛の傾向、および閉塞な時代状況は、



白先勇の早期の作品に危機、苦悶、疎外感という性格を持たせたと同時に、「滄桑感」や「疎外感」という白先勇のその後作品の性格を形作った。

### 3、自殺—自我喪失に対する抵抗

白先勇の早期の作品は以上のように、時間に勝てない人間の宿命を背負いながら、周囲との一体感を求められない、という二重の危機に陥った主人公たちを描き出した。しかし、主人公たちは決して無力のままでそれぞれの悲劇をたどったのではなく、むしろ、それぞれの苦境や孤独から抜けだすため、懸命に抵抗しようとした。そして、その最終的な抵抗手段として、彼らは自殺を選んだ。

一般に、白先勇の早期の作品を批評するとき、主としてその西洋現代主義文学の影響に注目し、その十一部の小説に見られる絶望や苦痛、彷徨、自殺、死を、現代主義文学によく見られる孤独や頹廢、反逆を反映したものとして見なして、当時の白先勇を現代主義作家として評価する傾向がある<sup>51</sup>。

確かに、現代主義思潮が当時の白先勇に大きな影響を与えたのは事実である<sup>52</sup>。しかし、白先勇の作品に現代主義思潮と異なった一面ももっている。この点について、夏志清は白先勇の早期の小説を分析して、作品に掴むことを意味する動詞「塵」、「涯」などの言葉がよく使われる、という注目すべき指摘をしている。

「欠陥人」（白先勇の早期作品の主人公を指す——筆者注）は一方では現実を逃避し現実を嫌い、他方では懸命に現実を掴もうとする（掴むことを意味する動詞は白先勇の小説によくでてくる）<sup>53</sup>。

これは極めて興味深い指摘である。主人公の“掴む”、“探す”行為は、困境に陥った主人公たちが何かを掴み、その困境から脱出したい、という気持ちを伝えている。作品の表面に漂っている無力感や退廢、死の影などの裏に、積極的な一面が潜んでいるのである。

その困境に対する積極的な態度は、白先勇の当時の人生観を反映したと思われる。自分の早期創作時期を「ロマンティズムの時期」<sup>54</sup>と呼んでいる彼は、後に、

愛情が死を征服した。私はロマンティズムの時期に、『生まれつきの多情者』にたいへん感動されていた。そのため、私は、愛情があらゆるものにうち勝つことができるということを描く作品を書こうとした<sup>55</sup>。

と述べたことがある。つまり早期の作品を創作した時期に当たって、白先勇は人の意志に関係なく、ひたすら前へと流れて、最終的に人を死に導く時間に対する危機意識をもっていた一方、時間にうち勝つための何らかの方法があると信じようとした。そのため、彼の早期の作品には、主人公の必死の抵抗が描かれたと思われる。

愛は死をはじめとする一切の障害にうち勝つことができるということを描く作品は、実

際、白先勇の早期の作品に存在しなかったが、そのかわりに苦境から脱出する手段として、主人公たちの自殺が描かれた。自ら死を選んだ金大通通、囁売菱、そして「黒虹」の主人公たちにとって、自殺は絶望を象徴するものではなく、逆に、困境から脱出するための最後の手段である。自殺によってそれぞれの窮状から逃げ出せるという希望が彼らの心にあったと思われる。

例えば、「金大通通」においては、夫の金大は上海の若い芸人を正妻として迎えるために、金大通通を家から追い出そうとしたが、それに対して、金大通通ははっきりと抵抗すると決意した。家に居座りつづけても無視された彼女は、最後に金大が結婚式を挙げる当日に自殺をした。それはその結婚に対する抗議だけでなく、彼女は自殺によって、誰であろうと彼女から何も奪えなくなり、彼女が永遠に金邸の女主人の位置を守れると信じていたのである。

そして「囁売菱」の中で、囁売菱は自分と慶生との間にある超えがたい年齢の溝を埋めようとして、彼を殺したあとに自殺した。死後の囁売菱の表情が大変満足そうだった。彼女の自殺は絶望によるものではなく、新たな可能性を求めようとするものだからである。

しかし、自殺は、けっして主人公たちを窮状から救い出すことができないのである。「署寄通通」の場合、

署寄通通は、三日後に埋葬された。埋葬されたあと、そのことがあまり取り上げられなくなった。みんなの注目は、全部新しい署寄通通に集まるようになった。この新しい署寄通通は年が若くて、容貌が美しい。しかも手前がよくて、手段もあり……みな争って彼女を『署寄通通』と呼ぶようになった<sup>56</sup>。

金大通通の死は、自分の金家の女主人としての地位を維持するどころか、むしろみんなに忘れられるようになった。その情けない結果は、自殺がいくら主体性の強い行動であるにせよ、困境からの脱出には役立たないということを意味している。

また、「囁売菱」の場合、死後の囁売菱について、小説の中でこのように描かれた。

眉毛は自然に広がり、目はしっかりと閉じていて、表情は非常に平静なもので、まるで気持ちよく寝ているかのようである<sup>57</sup>。

このおだやかな表情は、慶生を永遠に占有する目的を達成したと信じる囁売菱の満足感を物語っている。しかし、慶生の表情はまったく異なるように描かれていた。

慶生の両目はかすかに開いていて、両手はしっかりと拳を握り、息が絶えたとはちっとも思えない。彼は相変わらず若くて、せっかちのように見え、まるでずっと何ものかともがいているようである<sup>58</sup>。

そのもがいた様子は慶生の深い未練を表した。さらに興味深いことに、この描写が、生

前に囁売菱と一緒にいた時の慶生に対する描写とほぼ一致している。生前の二人は目と目が合わせた時、慶生の反応は次のように描かれた。

彼女（囁売菱を指す——筆者注）が自分のほうを見つめていることに気づくと、彼はさっそく臉を垂れて、時には両手が拳を握ることもある<sup>59</sup>。

生前と死後の慶生が、同じように表現されたのは、死を通して慶生の心を永遠に自分のものにしたいという囁売菱の目的が、結局達成できなかったということを示している。

白先勇は早期の作品で主人公たちの抵抗する意欲を表現した。それらの抵抗はいずれも失敗に終わったが、しかし、もし作品の表に漂っている無力感や頹廢、死の陰だけに注目するなら、その底に流れている肯定すべき積極的な一面を見逃すことになるだろう。実際、途方に暮れたことによる自殺を描かず、それを抵抗、窮状からの脱出手段として扱い、さらに自殺に対して盲信しないのは、白先勇と現代派との大きな違いと言えよう。

白先勇が早期の作品を創作する期間は、ちょうど台湾大学の外文系に在籍する期間と重なっている。当時、彼は同級生と一緒に『現代文学』を創刊し、そこで作品を発表する傍ら、欧米の現代主義文学を積極的に紹介していた。『現代文学』の誕生は、六十年代の台湾文壇に新しい息を吹き込んだ一方、現代主義の氾濫をも引き起こした。郷愁文学に共感を覚え、厳しい専制の下で、現実の社会を写実するリスクをも犯したくない多くの若い文学者は、欧米の現代主義文学に飛びつき、人の暗い内面世界における苦悩や焦慮、彷徨、死、変態などを扱う作品が一大風潮となった。

王尚義が「現代文学的困境」の中で述べたように、「伝統に反抗する熱狂の中、現代文学は人類の墮落の精神と相まって、消極的な虚無の隅に閉じこもり、価値観の真空を作り、人類の精神的麻痺を深め、逃避と自殺的な壊滅活動を押し進める」<sup>60</sup>。それはまさに六十年代台湾に氾濫した現代主義のありさまであった。目標を喪失した現代主義作家にとって、破壊や死亡、風狂などは、刺激と快感をもたらすものにすぎなかった。そのため、白先勇のような、苦境からの脱出を目指して、文学作品のなかで真剣に「死」を扱い、探求する作家は、許南村が「現代主義の亜流」と名づけた、欧米の現代主義文学を模倣する台湾の現代派とは、異なっているのはいうまでもない。

このように、白先勇は作品のなかで、いつも主人公の死をストーリーの結末としたが、それはけっして著者の消極性や、虚無を意味するものではなく、むしろ主人公を通して抵抗の意志を表明することを意味している。たとえその抵抗が希望をもたらすことができないにしても。こうした抵抗の姿勢は、白先勇のその後の作品にも受け継がれていくこととなった。

#### 4、期待と不安混じりの渡米

白先勇の早期の作品では、危機から抜けだそうとする主人公たちの意欲が、主として自殺を通して表現された。ただし、この種の脱出の試みはいずれも空しい結果となった。し

かし、白先勇が台湾で創作した最後の作品である「畢業」（後に「那晚的月光」に改題された。——筆者注）には、微かな希望が見えてきた。

「畢業」は、問題が山積みだった現実から遠ざかっている大学生生活を手放したくない主人公の心理を描いた。時間が立つにつれ、色あせた自分の恋や、家族に後足を引っ張られた自分の境遇に哀傷と無力感を感じた主人公は、自由のアメリカへ向かおうとする友人を羨ましがっている。作品は主人公の考えをこのように描いた。

蛎練鵲（主人公の同級生—筆者注）は希望のある人だ。彼は必ず外国へ行く。彼は有名な科学者になるはず。……彼らはみな外へ行くべきだ。物理学を勉強する人がここにいないなら、希望はない<sup>61</sup>。

「ここ」は希望のないところで、「外国」は希望のあるところである。この小説が反映した「外国」—アメリカへ行くことに対するある種の期待は、白先勇をはじめとする六十年代の台湾青年の気持ちのある側面を反映したと思われる。

しかし、白先勇は、今の困境から抜け出すのに、アメリカにある種の期待を抱いた一方、大きな不安も抱えていた。それは彼の渡米に大きな陰を落としたのである。

その一つは、彼が出発する二ヶ月ぐらい前の一九六二年十二月四日に、最愛の母親が病気でなくなったことである。十人の子供を持つ大家族である白家では、母親馬氏の存在は大きかった。抗日戦争の時、国のために前線で軍隊の指揮を取っていた白崇禧の代わりに、親族を守る重任を担った母親は勇気と才識で果たした。大家族を連れて避難を重ねたなかでも、子供の教育に少しの緩めをも許さず、いくら厳しい環境のなかでもいつも明るく、前向きに振る舞い、周りの人を勇気づけながら支えた母親は、白先勇ら十人の子供にとって、時には世間に名高い父親よりも重要な存在であった。一九五七年に白先勇が世間に出世が良いとされる理科系の大学を独断で中退し、もう一度大学試験で文化系の台湾大学に入ったことに対して、母親は寛容の態度を取っていた<sup>62</sup>。この文化系に転向する行動は、白先勇にとって人生の一大転機であるに違いなかった。そんな重大の転機にさしかかった白先勇を、母親はずっと温かい目で見守って、支えていた。

母親の死は白先勇に大きなショックを与えた。彼は自分の感受をこのように記した。

アメリカに来た最初の一年、私の心境は寂寥そのものであった。母親の死は、私の心に大変な衝撃を与えた。あのような生命力旺盛の母も、一瞬にして雲散霧消になった。……出棺の日、埋葬の時、葬られたのが母の遺体ではなく、自分の生命の一部分であったように感じた。それは私が死と身近に接触した最初の体験であった。抵抗できない死の威力を私は強く感じた<sup>63</sup>。

母の死をきっかけに、白先勇は生命の限界を実感した。実存に由来する危機への焦慮に加えて、それは一層彼を苦しめたに違いなかった。アメリカへ行っても、このような実存の危機を解決することができるのか、時間のもたらした危機を前に、白先勇は決して楽観

的になれなかった。

しかし不安はそれだけではなかった。もう一つ白先勇の心に影を落としたのは、姉先明の不幸である。白先勇にとって、もっとも親密の兄弟である姐の白先明は、十七才のときに二人の姐の後を追って、アメリカへ留学にいった。しかし、彼女はアメリカで重い精神病を患い、一九五五年に親戚に付き添われて台北に戻った<sup>64</sup>。先明のアメリカ体験は、悲惨な結末で終わった。先明はどうして精神病になったのか、アメリカで一体どのような挫折を受けたのかは、当時の白先勇がはっきり分からず、心の中に不安ばかりを募っていた。さらに西洋現代文学の危機感に強く共鳴していた白先勇は、現代社会としてのアメリカの抱える問題をも認識していたに違いない。そのため、白先勇はアメリカに傾倒した多くの留学生と異なり、複雑な気持ちで新しい一歩を踏み出したのである。

期待と不安を抱えて、一九六三年に白先勇はアメリカに渡った。彼はまもなくそこで実存以外の新しい世界を発見した。

## 二 「歴史意識」の形成——「台北人」シリーズをめぐって

### 1、「歴史意識」の登場

白先勇は人間の心の苦痛を表現することが自らの創作の原点だと認識している<sup>65</sup>。この点は彼の早期作品のなかからも読み取れる。渡米後、白先勇はその創作において、一貫して人間の心の苦しみを見つめ、その根源の解明に力を入れた。

期待と不安の中で初めてアメリカに上陸した白先勇は、ほかの留学生たちと同じように異国の地で多くの疎外感を体験したに違いない。それについて、白先勇は自身のことをあまり語らなかったが、彼が渡米後、創作を再開した後に書いたいくつかの作品が、いずれもそうした疎外感を表現したものであったことから、白先勇のその時の心情が推測されよう。多くの留学生と違って、白先勇の異国で感じた疎外感は、異文化に向けたというよりむしろ自分の民族的なアイデンティティに集中していた。それに加えて、父親の悲劇的運命に対する関心もあって、白先勇は、それまで、早期作品のなかで人間の普遍的な実存課題として疎外感を表現したが、渡米後、疎外感の問題を、より具体的に中国社会とのかかわりの中でとらえ、疎外によってもたらされた苦痛の原因を探りはじめるようになった。

しかも、このような心の痛みに対する探求は、中国近代史と直接に繋がったものだった。そのきっかけは、ある夏休みの日に白先勇がニューヨークの映画館で、外国人によって撮影された中国歴史の映画を見た体験である。「驀然回首」の中で、白先勇は映画を見る時の様子をつぎのように回想している。

西太后の死から、辛亥革命、北伐、抗日戦争、内戦と、半世紀にわたる中国の歴史が目の前に繰り広げられた。南京大虐殺や重慶空襲は、もはやただの歴史名詞ではなくなった。蹂躪され、凌辱され、引き裂かれ、焼き焦がされた肉体が、血と涙に浸され、苦難に満ちた中国の大地に横たわった。映画館の暗い隅に座った私は、身の毛がよだつほ

ど感情が高ぶった。映画館を出ると、外は相変わらず繁華雑踏の風景を呈していた。多くの車が往来し、ネオンの明かりが目には痛いほどに輝いた。私はニューヨークの街頭をさまよひ、一時どこにいるかわからなくなった。渡米後、私ははじめて国家や家庭の滅亡による彷徨をしみじみと感じた。

故国を長く離れて、自国の文化に対する郷愁は日々に深まったため、「紐育客」、及びその後の「台北人」に取りかかった<sup>66</sup>。

映画の白先勇に与えたインパクトは大きかった。そのインパクトは二つの側面から捉えることができると思われる。まず、映画を見た白先勇にとって、中国近代史は、もはや一つ一つの歴史名詞によって構成されたのではなく、映画を通して、その一つ一つの歴史名詞の裏に潜んでいた、血と涙に満ちた一人一人の中国人の悲劇が生々しく提示されたのである。このような、中国の近代史を実体化させた表現手法は、その後の彼の作品——「紐育客」シリーズ、そして、特に「台北人」シリーズの中で、用いられるようになった。

しかし、中国近代史をより生々しく感じれば感じるほど、白先勇はより強く自我の喪失を意識せざるを得なかった。それは、白先勇が中国近代史の映画を見ることによって受けたもう一つの大きな衝撃であった。その喪失が映画館内外の強烈の落差によって感じられたと白先勇は述べた。苦難の中国の近代史とまったく違った世相を呈していた映画館の外で、白先勇は自分の高ぶった感情の発散する場を見出せず、彷徨を感じるようになったのである。おそらくその時から彼は、自分がすでに中国近代史の世界からはじき出されたと明確に認識するようになったのであろう。つまり、映画における中国人の苦難の歴史は、そうした悲劇を強いられた人たちと同じようなアイデンティティを持つ白先勇に、大きなインパクトを与えたが、しかし、白先勇はすでにそれと無関係の場に身を置いたのである。しかも、彼は自らそれと関わろうとしても、関われないのである。引用から分かるように、その中国近代史にはじき出されたことから生じた喪失感—国家、家庭の滅亡による自我の喪失は、アイデンティティの危機意識及び「歴史意識」の強い『紐約客』と『台北人』を生み出したのである。

## 2、歴史による危機の化身—尹雪艷

朱鵲橋辺野草花、  
烏衣巷口夕陽斜。  
旧時王謝堂前燕、  
飛入尋常百姓家。

これは『台北人』の冒頭において、白先勇が引用した劉禹錫の「烏衣巷」である。この詩の中で、「王謝堂前」に代表された「過去」と、「尋常百姓家」に代表された「現在」とが鮮明な対比を為している。欧陽子はこの対比に注目して、彼女の白先勇の作品における一貫した主題に対する関心から、『台北人』の中の「過去」は、「青春、……栄光、希望、

美、理想と生命」の象徴であり、「年配、……失敗、猥褻、絶望、醜態、現実と死亡」に象徴された「現在」と対比を為しており、作品が時間に由来する危機の怖さを表現したと主張している<sup>67</sup>。

白先勇のよい理解者として、欧陽子は確かに白先勇の一貫した関心を明らかにしたが、しかし、劉禹錫の詩の引用について、白先勇はさらに次のように説明した。

私は「台北人」の冒頭に『烏衣巷』という詩を置いた。そこにはアイロニー (irony) が込められている。歴史上の着地点から言えば、彼らは台北人のはずだったが、しかし、彼らは心の中で依然大陸のことを思っていた。私は表現しようとしたのは、本籍の問題ではなく、歴史文化全体の問題である<sup>68</sup>。

つまり、「台北人」における「過去」と「現在」との対比を、白先勇自身が歴史の中でとらえたのである。

白先勇のこのような思いを正確に捉えたのは山田敬三であると思われる。彼は「民族アイデンティティと白先勇の文学」の中で、次のように指摘している。

過去と現在、若年と老年、大陸と台湾を対比しながら、台北人の現在は、大陸時代の過去に遡及する。彼らもまた、魂の祖国を喪失しているのである。

それにしても、祖国への喪失感は、「逃亡兵」としての自覚であり、民族アイデンティティの危機であって、それは「台北人」シリーズと「紐育客」シリーズの両方に共通する重要なテーマの一つである<sup>69</sup>。

山田敬三は、「台北人」のアイデンティティの喪失が時代とかが変わったものだと考えている。

白先勇の「歴史上の着地点」という言葉が示したように、「台北人」の中における大陸と台湾とは単に時間の中の「過去」と「現在」を象徴しているのではない。白先勇は二つの地理名詞に歴史の内実を賦与した。大陸は、外省人の失ったアイデンティティである民国時代の象徴として使われているのは、明らかなことである。台北に着いた外省人が、台北人に成れなかった原因は、彼らが大陸を魂の祖国と見なしていたからである。アイデンティティの故郷としての大陸と、アイデンティティの喪失を象徴している台湾という、「大陸—台湾」の対比に見られるこのような思いは、「六十年代世代」の台湾知識人の共通したものである。陳正靨は、「六十年代世代」の中国に対する矛盾の心情を指摘したときに、このように述べている。

「中心」から持ち込まれた「普遍」的価値によって育てられながら、「中心」から切り離された弱小の「周辺」に活動の場が限定されていた、という矛盾に苦しめられた。……台湾の六十年代世代の大半は、自分の貢献すべき対象たる「中国」を無意識のうちに「中国大陸」と対置していた、或いは少なくとも「中国大陸」を中心に考えていた。

……中国大陸外に居住しながらも「中国」のために貢献すべき責任を負っているという、この不条理の感覚は、彼らの世代の「中国」をめぐる苦悩の基層を形成することになる<sup>70</sup>。

陳正醜の指摘した「六十年代世代」の「中心一周辺」をめぐる矛盾な感情は、「台北人」の中で、「大陸—台湾」をめぐる対比という形として実体化された。したがって、欧陽子の指摘した「青春—衰亡」という時間と関わる対比が、たしかに作品の底流のひとつをなしているが、しかし、「中心一周辺」という歴史と関わった対比こそが、白先勇が「台北人」の中での本質的な関心を反映したと思われる。

「台北人」に収められた小説は全部で十四篇ある<sup>71</sup>。第一作の「永遠的尹雪艷」は、「台北人」の代表作であるゆえに、最も注目されている作品である。作品の中で、白先勇は外省人を苦しめる根源の象徴として、尹雪艷という形象を創りだした。

台湾にやってきた尹雪艷は、上海にいた頃と全く変わらぬ生活を送っている。その美貌、地位、財産、魅力のどちらも上海キャバレーの人気者であった十数年前と同じである。彼女のとりこになった人たちは、相次いで難にあい、地位や財産、命まで失っていったが、少しも心を動じされない彼女だけが永遠に輝いている。彼女の今昔一貫の家に、かつての栄耀を失った老人から、美貌が衰えた貴婦人や新興実業家まで、いろいろな外省人が集まってはにぎわっていた。しかし何故かこの人たちは尹雪艷と対照的に、決まって非業の死や失意などの不幸に見舞われた。

「永遠的尹雪艷」の中で、以上のように、二つの形象が描かれた。一つは永遠に輝いている尹雪艷である。そしてもう一つは内戦ですべてを失ってしまった外省人たちである。欧陽子は、尹雪艷を「死の女神」と見なしている。

尹雪艷は、象徴的な意味から解釈すれば、人間ではなく、悪魔である。彼女は幽霊で、死神である。彼女は、時間の束縛を超脱している：「尹雪艷はいつまでも老けることはない」。同時に、空間の制約をも超脱している：「けっして外界の変遷と異変に自分のバランスを崩されることはない<sup>72</sup>。

確かに死の宿命から逃れる尹雪艷は人間ではなかった。そして、尹雪艷と対照的に描かれた人たちは、死の女神の掌に操られた無力な存在であった。「死の女神—無力の人間」、それは欧陽子の見た対比である。

ただし、「永遠的尹雪艷」には、年寄りばかりが描かれたのではない。尹雪艷を十数年にわたって追隨する人たちの惨憺の晩年を描いたと同時に、白先勇は、特に尹雪艷の新たなとりこになった壮年実業家の無念の死を強調したのである。四十才過ぎの徐壯図という男は、上海で大学を出て、台湾で企業の経営に成功した新興実業家である。家庭円満、前途洋々のその男は人生の暮れに入ったほかの外省人と全く違った形象である。それにもかかわらず、尹雪艷の宅を出入りするようになって一ヶ月にもなっていないうちに、彼の身には家庭崩壊や事業の行き詰まりが起き、最終的に死が訪れた。



徐壯図の悲劇をもたらした尹雪艷は、単なる「死の女神」ではなかったはずである。何故なら四十代の徐にとって、肉体の老衰による実存の危機は目前に迫ってきた最大の脅威ではなかった。壮年の彼を追い詰めたのはむしろ心の病みだったであろう。死の女神である尹雪艷は、実はもう一つの顔持っていた。それは繁栄の大上海によって具現された近代の歴史であった。まさにそのために、「台北人」の心はそれにひきつけられていったのである。そこに彼らの繁栄した過去があり、「中心」から追い出された後に残された美しい記憶があった。彼らは尹雪艷にしがみつくとによって、過去の記憶に浸り、「周辺」という現実背を向けた。彼らはアイデンティティを依然として過去に置いたのである。

上海名門大学出身の徐壯図も例外ではなかった。彼は台湾で事業を成功したにもかかわらず、依然として、記憶に焼き付かれた繁華の上海によって体現される過去に、自分の心のふるさととしていた。そのため、彼は尹雪艷のところで過去に浸った。しかし、現実と過去とが引き裂かれた中で、徐は両者を両立することができなかった。あるいは、それはそもそも不可能なことであった。彼は、現実の生活を嫌悪するようになり、まわりの人に八つ当たりするようになった。結局、工場の労働者に刺されて死をたどったのである。

徐の死は「台北人」のアイデンティティの喪失によるものだと言えよう。作品の中で、外省人は尹雪艷によって代表される過去にアイデンティティを置きながら、まったくそれに関わることができなかった。尹雪艷は彼らの上に君臨して、彼らの運命を手中に握り、翻弄する巫女であった。それはまさに陳正醒の指摘した「六十年代世代」の中国に対する矛盾な心理の反映である。つまり、中国へのこだわりを持つ彼らは、「中心」から切り離されて、中国に関わろうとしてもまったくできないという不条理である。

「死の女神」が人を死に導いた武器は、尽きることのない長い年月の侵食というものである。人間の人生を時間の流れをもってゆっくりと削っていくことは、「死の女神」の掟である。しかし、尹雪艷には、決して時間によって定められた掟が見られない。いつ何処で誰を裁くのか、完全に尹雪艷の自己ペースで行うことこそ、彼女の掟である。

尹雪艷は自分の旋律がある。尹雪艷は自分の拍子がある。外界の変異はけっして彼女の均衡に影響を与えない<sup>73</sup>。

尹雪艷の自己ペースが小説の中で再三に強調された。彼女がどのように動くのか、それが知る由もないことであるために、彼女は「死の女神」よりも神秘であり、恐ろしかったのである。小説の中で、興味深いシーンがある。徐の葬式の場に現れた尹雪艷が徐の幼い息子の頭を撫でて去った後に、徐の未亡人一撫でられた子供の母親は気絶して倒れて、まわりの人々は騒然したというシーンである。母親およびまわりの人々の反応から、尹雪艷の恐ろしさが克明に反映された。幼い子供にも手を出すかもしれないという恐怖は人々をゾッとさせたのである。

このように尹雪艷が象徴したのは、単なる人間の生命を奪う死の女神だけではなく、「台北人」の故郷の幻像として、彼らを断腸の郷愁に誘惑させ、彼らを意のままに翻弄する、運命を操る巫女であった。青春と心の故郷、その二つを一身にした尹雪艷は、外省人を思

うまに操っていた。尹雪艷という形象に、外省人を苦しめる実存と歴史の両方に由来する二つの危機が揃われているが、「台北人」の中で、中国歴史によってもたらした危機がより強調されていると思われる。

### 3、「歴史意識」の具体的展開

「台北人」の第一作の主人公として登場した尹雪艷は、その後、「台北人」のあらゆる作品には、陰の存在として威力を発揮していた。尹雪艷によって象徴される「歴史意識」の存在は、『台北人』の最も重要な特徴である。

「一把青」は「台北人」の第二作である。その作品は上、下二部に分かれ、それぞれ南京と台北を舞台にして、朱青という女性の物語を展開した。上部の舞台は抗日戦争勝利後の南京であった。純情な女子高校生朱青は国民党空軍の青年将校と恋に陥り、学校、家庭の妨げを退け、駆け落ち結婚をした。しかし、幸せの日々は短かった。内戦が勃発して、朱青の夫が戦死し、彼女自身はその衝撃を受けて、立ち直らなかった。作品の下部は、何年後に、台北に現れた朱青を描いた。その時の彼女には、もうかつての純情の面影もなく、若い男をおもちゃのように扱う冷血の女となった。

朱青の身に起きたこのような強烈な対比は、歳月がもたらしたものではなかった。なぜなら、

朱青の顔には化粧が施されていない。しかし、依然として異様に若くて爽やかに見える。とても三十代の婦人には見えない。……歳月が彼女の顔に何の跡も刻めないようだった<sup>74</sup>。

朱青は相変わらず若かったのである。彼女を壊滅させたのは、時間の威力ではなく、戦乱に満ちた中国近代史である。歴史はかつて彼女に幸せの日々を与えた。抗日戦争が勝利したまもなく、彼女が家族の反対を押し切って、当時に社会の賛美と注目を浴びていた国民党軍隊のパイロット結婚したのであった。若き英雄の妻となった彼女は、幸せな生活と満足の社会地位を手に入れた。しかし、歴史は一瞬にしてまたそうした彼女の幸福を砕き、彼女を喪失のどん底に押し込んだのであった。

「椎匯頭僮匯違碯議凝冗雜」は、強い帰郷の願望を抱いた退役兵王雄の切ない死を描いた。台湾で退役した王雄は、大陸の故郷に残された母親と幼い許嫁を片時も忘れられなかった。小学生の麗児という女の子の使用人になった彼は、許嫁の姿を麗児と重ねて、一所懸命に麗児を守っていた。しかし日々が経つにつれ、麗児が成長し同年代の友達と遊び、王雄から遠ざけるようになった。ショックを受けた王雄は、死ねば故郷に帰れると信じて海に身を投げた。しかし、彼の腐った死体は、海岸の岩場で挟まれて発見された。

故郷に帰り、二人の弱い女性を守ることは、王雄の最大の生きがいであるにもかかわらず、それが実現できなかった。彼の帰郷を阻止したのは、歴史による兩岸の政治的分断である。

欧陽子は、ここで時間のもたらした変化を強調していた。

時間は絶対に逆流しない。たとい母親と妹は生きていても、彼女たちはもはや当時のままの母親と妹ではなく、王雄の心に焼き付けられていた形象と重ねることは永遠に不可能である<sup>75</sup>。

確かに時間の流れの中で、故郷や人間が刻一刻に変わっていて、昔のままの状態を維持することができない。王雄は故郷に辿り着くことができるにしても、記憶の中の許嫁に会えない。しかし、時間という障害が問題になる前に、中国歴史という厚い壁がすでに王雄の前に立ちはだかり、彼の人生を破滅に追い込んだのであった。大陸を魂の故郷と見なした王雄は、そこに近づくことさえできなかった。

以上の物語から窺えたように、これらの外省人はいずれも抗しがたい力によって、無情に翻弄されていた。朱青の幸せを砕いた砲弾、帰郷したい王雄を阻害した障害などは、直接に姿を現していないが、外省人を思うままに弄ぶ尹雪艷の陰の化身のように、主人公に付きまとっている。「台北人」の第一作に出てきた象徴意味を強く持っている尹雪艷の形象は、それ以後の作品の中で次第に実体として現れた。「尹雪艷」は、阿青の幸福を一瞬にして奪った戦火であり、王雄の前に立ちはだかった政治的分断であった。尹雪艷は単なる「死の女神」ではなく、中国人を翻弄し、度重なる苦難を与える中国近代史を象徴する巫女である。白先勇は「台北人」の中で、悲劇の外省人と彼らを不幸にさせた尹雪艷という二つの形象を通して、歴史にはじき出された外省人と戦乱に満ちた中国近代史との関係を浮き彫りにした。

「台北人」シリーズは、一見、個人的な孤独、行き詰まりなどを表現する人生物語のように見えるが、実はその中に一般的な人生物語に存在し得ない特殊の要素—中国近代史の中でしか見られない中国人の生存の危機という主題が巧みに織り込まれている。この主題は、次章以降分析するように、「台北人」シリーズと前後して創作した「紐育客」シリーズの各作品のなかからも読み取れる。

こうして、白先勇は人々が人生の中で直面するいろいろな困難を、中国人が中国近代史の中で体験させられた危機に重ね合わせた。そのため、失われた甘美な過去を名残惜しむ十四個の物語は、中国近代史の表舞台から追い払われ、孤島台湾に閉じこもられる人々の境遇と心境を窺わせた。例えば、「金大班の最後一夜」の金大班の結婚をめぐる動揺と苦痛の選択は、もはや老いた踊り子の打算の範疇を超えて、重い過去を引きずって、未来が見えない外省人の不安と焦燥の現れでもあった。退役兵王雄の帰郷を阻止した海峡は、古来の辺境を守る兵士の前に広がる広大な砂漠と違い、それが単に越えがたい地理上の隔たりではなく、なによりも中国近代史によってもたらされた断絶の象徴であった。

中国の近代史は、「台北人」を、彼らの栄光の象徴、魂の故郷である中国大陸から台湾に放逐した。それこそが「台北人」の不幸をもたらす根源であった。「台北人」シリーズは「外省人」の自我喪失の危機を描き出すことによって、それを明らかにしたのである。

#### 4、「滄桑感」と「歴史意識」

これまで、白先勇の「歴史意識」に注目しつつも、それをもっぱら中国知識人の伝統的歴史的感性として捉えられ研究者が、決して少数ではなかった。例えば、袁良駿は「論白先勇小説的伝統特色」の中で、つぎのように論じている。

社会の歴史と人間の心を生き生きと反映する文学は、当然、歴史の辛酸や世の中の無常を描きとめ、人々の感慨の感情を表現しなければならない。時間が経つにつれ、それが中国文学の長い歴史のなかで滔滔とした感情の流れに集まった。……「台北人」シリーズの十四編の小説は、例外なくこのような歴史的感傷を奏でたものであった<sup>76</sup>。

袁良駿がここで指摘した「歴史的感傷」は、容易に白先勇が述べた「滄桑感」を想起されよう。すでに述べたように、白先勇は滄桑感を「中国文学の最高境地」と評している。彼は、屈原や杜甫、および中国古典文学伝統における滄桑感に大いに共鳴し、自分もそのような滄桑感を受け継いでいることを認めている。「世紀性的漂泊者」という題の評論の中で、白先勇は、敗戦による「外省人」の台湾への亡命を二十世紀の世界的亡命現象の中で捉え、次のように述べた。

海外に亡命した中国作家は、当然中国式の亡命文学を創作した。それが、一方では、屈原以来の時を感じ、国家を憂患する（感時憂国）という中国の伝統を継承し、他方では、二十世紀の西洋の影響を受けた文学感性も含まれている<sup>77</sup>。

白先勇が指摘した屈原以来の「感時憂国」意識は、明らかにその士大夫としての「滄桑感」から発したものである。白先勇における「歴史意識」が、そうした「滄桑感」から大きく受け継いでいることは間違いないだろう。

袁良駿はこのように、「歴史的感傷」をもって、白先勇を「正真正銘の中国作家」と証明しようとした。しかし、袁は「台北人」シリーズに見られる白先勇の「歴史意識」に注目したとはいえ、それを、古来文人の感受した「滄桑感」と同一視するのは、果たしてよいのだろうか。言い換えれば、外省人の悲哀を描いた「台北人」は、単に中国の古典文学における王朝興亡に対する文人たちが感じた「滄桑感」と同じような「歴史意識」によるものだと見なしていいのか。

「台北人」シリーズに現れ出てくる「歴史意識」は、それまでの中国の歴史上、存在しなかったものと思われる。なぜなら、「台北人」が表現した歴史の無常による喪失感は、たしかに中国古典文学によく見られる「滄桑感」に共通する一面を有しつつ、他方では、近代史としての鮮明な時代的特色を持っているからである。「台北人」における外省人が経験した苦難は、史上未曾有のものであり、近代史の歴史的証言者であったのである。

白先勇は「世紀性的漂泊者」の中で、中国歴史上の戦乱によるいくつかの大移動の例をあげ、それらが殆ど本土にとどまったものだと指摘して、二十世紀の中国人の流離を次の

ように述べた。

中国人の亡命の大波は、一九四九年に始まった。百万人に昇る人たちが相次いで中国大陸から脱出して、香港、台湾、そして世界の隅々に渡った。その規模の大きさ、(亡命者の)分布の広さ、そして、亡命期間の長さは、いずれも未曾有なものだった<sup>78</sup>。

「中心」から「周辺」にはじき出されたという悲運は、王朝興亡が頻繁に起きた長い中国の歴史の中で、特殊なものではなかった。しかし、二十世紀の亡命の規模の大きさ、そして、何よりも母国との断絶という状況から見れば、「外省人」をはじめとした亡命者が受けた傷害は、前例のないものであった。白先勇は「滄桑感」の伝統を受け継いぎながら、彼の文学創作は、中国の近代史が作りだした中国の歴史における未曾有の大規模の亡命、を対象にしている。そこには白先勇の「歴史意識」の独自性が潜んでいるのである。

一部の研究者は、白先勇の作品を古来の文人が時代の没落を哀傷して創作した追憶の作品と同じようなものとしてとらえて、白先勇の文学を「貴族文学」と呼んでいる。そうした批評に対して、白先勇は何度も反論した。例えば、「王謝堂前答客問」の桂文亜との対談の中で、白先勇は、「最後の貴族」という尉天聡の評論に対して、反論を行っている。尉天聡は白先勇を論じて、

感情面においても、意識面においても、どちらも濃い「貴族」の味を帯びている。…  
…作中人物は、生活面では病的であり、蒼白で、感傷的、懐旧のものであった<sup>79</sup>。

それに対して、白先勇は次のように述べた。

私は人に力点を置いて小説を創作している。よく分析してみれば、「台北人」における貴族たちは、地位の低い商人、兵士や、市井の小民と同じように離郷の苦に陥っていた。彼らは、経済状況や社会地位が異なっているが、心に受けた創傷はまったく同じだった<sup>80</sup>。

ここから、白先勇の創作意図がはっきりと読み取られる。彼は単に士大夫的感傷、懐旧を持って「滄桑感」を表すのではなく、彼の作品は、将軍、貴婦、大学教授、小学の教師、退役兵、踊り子、娼婦など、社会のあらゆる階級を包括した「外省人」集団を対象にしている。白先勇は社会全体の各階層にある「外省人」の悲劇を描くことによって、主人公たちの共通した「心の傷」を明らかにし、「史上未曾有の亡命」を通して、近代史の未曾有の破壊力を浮かび上がらせたのである。そして、亡命者に共通した「心の傷」はすなわち中国の歴史上、未曾有のアイデンティティの喪失であった。

中国の近代史が、「周辺」に追い出された「外省人」にもたらした最も根源的な危機は、彼らのアイデンティティの抛り所を徹底的に取り除いたことである。歴史上の民衆の流離は、中国の本土を離れることはなかったし、歴史上の知識人は、政治生命を断たれても、彼ら

の主体性が大きく脅かされることはなかった。その意味では、彼らがアイデンティティの喪失という危機に直面することはなかった。歴史上の知識人について、白先勇は次のように述べた。

中国の歴史上、政治動乱や、社会混乱の時代のなかで、知識人たちは、あるいは自分の身を守り、あるいは抗議の意を表明し、あるいは単に生存を求めため、往々にして自ら集団を離れて独居を選んだ。これらの自我放逐した人たちは、大自然や哲学のなかに心の慰めを求め、美術や文学の面で自我表現の場を探した。彼らの芸術作品はその時代においてはあまりに注目されなかったが、時代の証しとして後世に伝わった<sup>81</sup>。

つまり歴史上の知識人には、まだ自分の意志を示す自我放逐を選ぶことができる。中国歴史上の知識人は、乱世に遭っても、一定の進退の自由を持っていた。隠居、独居は彼らにとっても必ずしも絶望的な窮状ではなかった。それは時には、彼らが自ら進んで選んだ抗議の手段でもあったのである。そして、たとい隠居や独居に強いられ、政治舞台から追放されても、彼らには生活や文学芸術というような私的な領域が残されている。知識人たちは依然として憂患意識をもって、「天下を以って己の任と為す」という姿勢を保つことができるし、詩文という自分の仕事に力を注ぐことができるのであった。

それに対して、中国近代史にはじき出された「台北人」の中の知識人は、あまりにも大きな喪失を経験したせいで、精神的に貧弱になり、世に抵抗する気力をすっかり失い、世に流されるようになったのである。例えば、「冬夜」の中の余教授という形象はそうした知識人の典型である。台湾の余教授は、かつて北京大学での同級生であり、今はアメリカの著名華人学者になった呉教授と二十年ぶりに再会した。余教授のぼろぼろの家で、二人は五・四運動に投身した自分たちの青春時代を思いだし、話が弾んだ。しかし、大陸を離れて、台湾やアメリカに移った後の話になると、暗い、悲しい、醜い話題は連ねていた。二人の栄光の昔と変わり果てた今とが、強烈な対比を為していた。

かつて強烈な愛国の念にかきたてられて、五四運動の先頭に立っていた二人の教授は、いまになって、生活難に苦しむ余教授は、アメリカへ出稼ぎに行くことばかり考えている。二人が別れるときに、余教授は呉教授にアメリカで中国語を教える仕事を紹介してくれないかと頼んだ。他方の呉教授は、アメリカでの教授の職を維持するために、空論ばかりの著作を著した。この二人にはもはや教育者として、師範としての面影も残っていなかった。最も彼らの知識人としての存在感のなさを象徴したのは、呉教授がアメリカのある学会で経験した出来事であった。

アメリカのある学者が「五・四運動の再評価」という題で報告し、五・四運動に否定的な観点を示した。その学者は、結論の中で、運動の中の青年が西洋文化を盲目に崇拝し、中国の思想界を空前の大混乱に陥らせた。父権中心の社会の中で成長した彼らには、独立した思想体系もなければ、堅い意志もなかった。したがって、儒教が否定されるや、彼らも精神上の自我放逐を始め、全体主義に身を投じたり、破れた伝統に戻ったり、海外に逃避したりした、と主張した。学会に出ていた中国人の教授と学生たちが呉教授に反論を期待

したが、呉教授は逆に彼らの期待とは裏腹に、一言もせずに会場を離れたのである。

余教授に対して、呉教授が次のように述懐した。

海外で何十年間の逃亡兵をしている私は、その場でどうして挺身して「五・四」のために弁護する面目があるのか。海外にいる私は今まで、民国史について語りたくないのだ<sup>82</sup>。

昔日愛国と使命感に燃えていた熱血青年の二人は、過去においてしか自分の情熱と自負が見出せない。近代史による分断は、彼らを「周辺」に追い払い、彼らを「五・四」の精神から切り離し、深刻なアイデンティティの喪失感を味わさせた。しかも、彼らは「国家」、「天下」、「民族」などに関われないどころか、日常生活を維持するために苦勞せざるを得ない、という境地に強いられた。彼らには、もはや古来の文人のように自分の哀傷を文字訴え、後世に残す心気と気力さえ失ったのである。彼らの沈黙は、中国古典文学に見られる「滄桑感」よりも深い悲傷と失意—自我の喪失という悲哀の表れに他ならない。

白先勇は、体制に迎合し、反共の一色に染まった、五十年代の台湾における単調な文壇を分析して、このように指摘した。

五十年代初期、これらの亡命作家は、自分たちの追放された生涯を反映する重要な作品を書けなかった。このような現象をもたらす原因はいろいろ考えられる。一つは、当時、老舍、沈從文などのようなもっとも優秀な作家たちがほとんど大陸に留まっていたことであり、もう一つは、台湾に移った作家たちの心理的問題に原因がある。彼らは一方では、取り乱した心がやっと収まったばかりであり、まだ大陸で受けた強いショックから回復していなかった。他方では、錯綜複雑な新しい情勢を見極めるだけの識見と胆力を持っていなかった。そのため、彼らは政府が宣伝した反攻の神話を盲目に受け入れるしかなかった。しかも、彼らは、このような追放が永久的なものだと認める勇気も持っていなかった。結局、これらの作家が描いた人物は、現実とかけ離れたものであり、構成とストーリーも紋切り型で、公式化されたものである。作品の主人公たちどんなに追放の苦痛を受けていても、最終的に必ず故郷に戻り、大陸の家族と団欒することができる。これらの作品は郷愁の気持ちに満ちているが、このような感傷の気持ちは陳腐で常套のものであり、まったく新味がなかった<sup>83</sup>。

致命的なショックを受け、さらに混乱に満ちた新しい環境にいきなり放りだされた渡台の知識人たちは、環境への適応に迫られ、自分の心の苦痛を見つめる勇気が持てずに、もっぱら政府の宣伝に追随することしかできなかった。白先勇の「冬夜」に登場した教授の形象から、こうした中国近代史にはじき出された知識人が陥った困境と、五十年代台湾文壇の寂寥の原因を窺うことができる。

以上見てきたように、近代史にはじき出された「台北人」は、史上未曾有の深刻な危機に見舞われた。このような危機は、「台北人」全体に及ぶという範囲の広さからしても、個

人の実存が脅かされ、アイデンティティが喪失するという深刻さからしても、いずれもかつてに無かったものである。その意味では、「台北人」たちの喪失感、中国古典文学によく見られる「滄桑感」を越えた深刻さがあると思われる。白先勇は「台北人」シリーズを通して、そうした深刻な喪失感を描き出し、「周辺」に追い出された人の存在価値を徹底的に破壊する、という中国近代史の特色を炙り出した。「台北人」の独自性と価値はまさにそこにあるといえる。

また、「台北人」シリーズとほぼ同じ時期に創作された「紐育客」シリーズも例外ではなかった。渡米後の白先勇が認識するようになり、作品を通して表現した「歴史意識」という主題は、同じく「紐育客」シリーズの中でも貫かれている。以下の各章は、「紐育客」シリーズの各篇を取り上げて、白先勇の早期作品における「疎外」と「抵抗」、「台北人」シリーズにおける「歴史意識」主題を念頭に置きつつ、白先勇における「中国」の主題を考察したい。



### 第3章「中国」主題の出現——「シカゴの死」

白先勇がその台湾での早期作品の中で、主として彼自身の中における実存の危機による不安、苦悩と孤独の心境を反映した、ということはすでに前章で見てきた。一九六三年、白先勇はアメリカに赴いた。アメリカ留学の体験が、彼における創作と意識の変化の大きな契機となった。

渡米の直前、白先勇にとって最も重要な存在であった、最愛の母親が他界した。そうした重い気持ちに加えて、アメリカに渡った後の異国でのカルチャー・ショックなどは、白先勇の心に新たな苦しみを与えた。そのため、彼はしばらくの間、創作活動を続けることができなかった。渡米の一年後の一九六四年、ようやく心の整理ができた白先勇は、創作活動を再開し、「シカゴの死」を上梓した。そのあとの一年の間に、白先勇は一気に、「上摩天楼去」、「香港一九六〇」、「安楽郷的一日」、「火島之行」を著した。この五つの作品は、白先勇が台湾で創作した早期の作品と大きく異なっており、それらの中に込められている「中国」という主題は、後ほどの「紐育客」につながった。

留学生を中心とする在米中国人を描くこれらの作品は、主人公の陥った困境を表現し、彼らの自我喪失の様子を描き出した。早期の作品に見られる、実存に由来する危機一時間の流れの中でまったく無力のままに操られること—という主題は、この時期の作品の中に依然として存在しているが、早期の作品と比べて、はるかに薄められている。この時期の白先勇の作品における最も大きな特徴は、実存の危機という普遍的な主題を探求するよりも、アメリカ社会の中で、「中国人」という自意識を強く持ちながらも、アイデンティティの喪失問題に直面している主人公たちの運命を描き、そうした運命がもたらされた根源を探ろうとしたことにあると思われる。作品の中における主人公は、いずれも二つの困境につき纏わされている。その一つは、アメリカ社会に感じた疎外感であり、もう一つは、台湾との繋がり断絶であった。そして、こうした主人公の自我喪失の問題を反映し、探求することによって、白先勇は「中国」という主題に目を向けるようになったのである。

#### 一 異国での疎外感—「中国人」という自意識の再確認

前述のように、「シカゴの死」（原題「芝加哥之死」）は、白先勇が渡米後の最初の作品である。白先勇がアメリカに渡った後、心の中の苦しみとカルチャー・ショックによる違和感乗り越えて、辿り着いたのは、この「シカゴの死」であった。したがって、この作品は白先勇にとって重要な意味をもっているといえる。

「シカゴの死」は、主人公呉漢魂が自己のアイデンティティを探し、幻滅する過程を博士号の獲得したその日に凝縮して表現している。

六年前に台湾からアメリカにやってきた留学生呉漢魂は、シカゴに着いたあと、すぐに地下室の一室を借りて、そこに閉じこもり勉学に励んだ。大学の講義に出席し、アルバイトに行く以外、彼は殆どあの汚い地下室から出ることはなかった。その間、台湾にいる恋人がほかの人と結婚しても、母親が死んでも、彼は動じずに一回も台湾に戻ることはな

った。六年の苦学の末、彼は文学博士号を手にした。しかし、就職活動に必要な履歴書を作成するとき、彼は、

「呉漢魂、中国人、三二才、文学博士、一九六〇年六月一日シカゴ大学卒業」<sup>84</sup>

以外に何も書けなかった。迷い込んだ彼は外の世界に飛び出した。しかし、地下室から出た彼は、人の流れに流されて繁華街を歩いているうちに、だんだん都市のリズムについていけなくなり、街頭を徘徊する。

呉漢魂はモンロー・ストリートとクラーク・ストリートとが交差する十字路の角に立ち、茫然として、どこに行けばいいかわからなかった。彼はまるで突然巨大なダンスホールに押し込まれたように、方向の観念を失い、集中力を失った。彼は、シカゴが足下で一つの澎湃とした韻律をもって震えているのを感じながらも、自分自身がひよろひよろと揺れ動いて、そのリズムについていけなかった<sup>85</sup>。

シカゴのリズムについていけなくなったということは、主人公がアメリカ社会に一体感を持たずに、疎外と、挫折を感じたことを意味している。

日が暮れて、歓楽街に迷い込んだ呉漢魂は、「優しい東洋人」を体験したいという娼婦らしき老女蘿娜にもてあそばされ、一夜を共にした。六年間ずっと自らをアメリカ社会と隔ててきた呉漢魂は、一日の間に疎外、恥と絶望を味わわせられた。夜明けの前に、彼は街を離れた湖畔に来て、

地球の表面に、自分の立錐の地さえ見つけられない<sup>86</sup>。

と心の中で叫びながらミシガン湖畔で自らの命に終止符を打った。

アメリカに来て地下室に籠もり、人との付き合いがまったくなかった呉漢魂が唯一接触した人物は、娼婦蘿娜であった。呉漢魂の内に入り、その内心活動を描写するこの作品は、蘿娜との唯一の対話を通して、呉漢魂の心の叫びを聞かせた。小説は、呉漢魂の名前を聞いたあとの蘿娜と、呉漢魂との対話を次のように描いた。

「呉——」

蘿娜は口を覆って大笑いした。

「おかしいね！ TOKYO とお呼びすることにするわ」

「私は中国人だ」 呉漢魂は言った。

「ああ、どうでもいいじゃない。あなたたち東洋人は皆同じように見えるから、見分けにくい」 蘿娜は笑いながら言った。

……

「寂しいから、ここへ刺激を探しに来たでしょう」

蘿娜は首を傾かせながら、人の気持ちをよく理解しているかのように言った。

「私はここに来たのは初めだ。」

吳漢魂は言った。彼は絶えずコップに残ったウイスキーを飲んでいた。

「もういいわ。あなたたち東洋人はいつもおとなしいふりをしてるから」

蘿娜は頭を振るって叫んだ。

「私はこんなところに来たのははじめてなんだ。」 吳漢魂は言った。

「私はこだわらないから、安心して」

蘿娜は吳漢魂の肩を叩いて言った。

「そんなに真剣にならないで。あなたは学生でしょう？」

吳漢魂は答えなかった。彼はコップの中の酒を一気に飲み干した。アルコールは鶏の爪で引っ搔かれるように、彼の喉をひりひりさせた。

「どう、当たったでしょう？」

蘿娜は急に吳漢魂の顔に近づき、鼻先で嗅いだ。そして、大笑いして言った。

「私は嗅ぐだけであなたの体についている本の古臭い匂いがわかるのよ。」

「私はもう学生ではない、今日卒業したばかりなのだ。」

吳漢魂は茫然と蘿娜を見つめて、自分に言い聞かせるようにつぶやいた<sup>87</sup>。

以上の会話から分かるように、自分が中国人だと自認した吳漢魂は、アメリカ人である蘿娜の語った中国人像には、強い違和感と危機感を抱いた。

客を引くために一所懸命に客のことを推測して、何とか話を続けようとしたにもかかわらず、蘿娜は結局吳を「TOKYO」と呼び、日本人と間違えた。そんな彼女に、吳漢魂は思わず自分が中国人だと声を挙げた抗議した。しかし蘿娜の中国人と日本人が同じように見えるという主張に、博士である吳漢魂は反論する言葉を失ってしまった。その時、彼は思わずはっとしたに違いない。つまり自分が中国人だと言える根拠はどこにあるということだ。

中国人としての根拠を見つけなかった吳漢魂は、アメリカ社会で生きるには、二つの道しかなかった。一つは中国人としての自分を完全に捨てて、アメリカ人の言う「東洋人」として振舞うこと、もう一つは今までと同じように地下室にこもって、社会から隔離することである。中国人だと自認した吳漢魂にとって、中国人としての自己の喪失に耐えがたかった。そして博士号の取得によって、学生の身分が消滅し、今までのように社会から逃げ出して生活する理由も完全になくなったので、吳漢魂は最後に死を選んだのである。

もしシカゴのリズムについていけない、大都市の中で彷徨する吳漢魂に対する描写が、アメリカ社会に溶け込めない吳漢魂の困境を思わせるのであれば、蘿娜とのかみ合わなかった対話は、その困境の根源を浮き彫りにさせた。つまり中国人のあり方をめぐって、吳漢魂とアメリカ人との間に大きな隔たりが存在し、アメリカ人の思い描いた中国人像に、吳は自己統一することができなかったことである。

同じくアメリカ人の中国人像に苦しめられたのは、「安楽郷的一日」の主人公一家庭主婦の依萍である。彼女は、株投資で成功した夫および小学校二年生の娘と一緒にニューヨ

ーク郊外の高級住宅地に住む。彼女はまわりのアメリカ人主婦たちの輪に入ることに大変疲れを感じた。著者は作品の中でこのように描いている。

安楽郷では、依萍の一家だけが中国人である。そのためアメリカ人の主婦たちはみな依萍を珍しい客と見なし、彼女に大変優しく、熱心である。時々彼女に電話をかけ、天気や冷暖の話をする。依萍を喜ばせるために、彼女たちは依萍と一緒にいると、いつも興味津々に彼女に中国の風俗、人情、何を食べる、何を着る、どんな住まいに住むなどのことを聞く。依萍がアメリカの習慣が分からないと心配する彼女たちは、我が先と彼女に教えて、主人としてのもてなしをする。それらは依萍にいつそう自分が中国人だということ意識させた。みんなと違うから、至る所で気をつけなければいけない。身だしから振る舞いまで、いずれも意識的に中国人としての特徴を強調するしかない。パーティに出る度に、依萍はチャイニーズドレスで身を包み、顔に微笑みを浮かべて、優しい声で何度も何度も婦人たちの質問を答える。後になって、また隣の奥さんに社交場に誘われても、依萍はいずれも婉曲に断った。出席する度に、依萍は意識的に中国人らしい振る舞いをしなければいけないから。それが原因で、家に帰ったあと、頭痛止めの薬を飲まなければいけないほど頭が痛くなったのである<sup>88</sup>。

アメリカ人の思い描いた中国人を意識して振舞ったことは、ひどい頭痛をもたらしたほど依萍に苦痛を与えたのである。しかしこれだけではなかった。依萍もまた吳漢魂と同じように、アメリカ人の中国人像に強い違和感を抱いた一方、自らの中国人像を確立させることができなかった。依萍には、アメリカのライフスタイルにすっかり馴染んだ夫とアメリカ育ちの娘がいた。ある日、「私はアメリカ人」と言い出した八歳の娘に対して、彼女は「私たちはみんな中国人だ」と説得しようとしたが、しかし、彼女がようやく見つけた理由は「私たちの髪と皮膚の色はみんなアメリカ人と違う」というものだった。その時に、依萍は自分の中国人としてのアイデンティティがいかに空虚なものであったかをはっきりと意識したに違いない。

アメリカ社会からの疎外よりも家族からの疎外に重きをおいて表現したのは、同じ時期に創作された「上摩天楼去」であった。

「上摩天楼去」は、幼時に母を亡くし、姉に甘えられて育てられた妹が、アメリカに留学している姉の後を追って、ニューヨークにやってきたところから始まった。姉に甘やかされていた時の甘美な思い出や姉と再会する幸せを胸に、姐の住まいに一直線に飛んできた妹は、きれいに着飾った姉の前で距離感を感じ、そして姉の応対に失望を感じた。姉に甘やかされながら一緒に憧れのニューヨークをぶらつくつもりだった妹は、結局、一人で夜色に包まれた摩天楼に登った。しかし、伝説のニューヨークは漆黒に取り囲まれ、妹はただ摩天楼の上で寒い風と大雪にさらされるままだった。

熱い希望を持ってアメリカに渡った主人公は、ニューヨークに到着直後、すぐに最愛の姉との甘い記憶から目覚めさせられ、大きな喪失感を味わわせられた。

「安楽郷の一日」と「上摩天楼去」の二つの作品は、「シカゴの死」と同じく海外の中

国人を主人公にしているが、主人公の異境における社会地位には変化が見られた。吳漢魂のようなアメリカ社会に排斥されて、立錫の地も見つけれない、という深刻な状況は、これらの主人公の身にはすでに見あたらなくなった。その代わりに、彼女たちを悩ませたのは、アメリカ社会に馴染んでいる自分の家族と一体感を感じられないことである。

このような、家族との関係がねじれて、孤独に陥っている主人公は、白先勇の早期の作品とは全く同じパターンであるが、しかし、この時期の作品における主人公たちの苦悩ははっきりしていた。それは中国人としてのアイデンティティの喪失である。この時期のまとまらなかった家族像は、中国人としての一体感が崩れてしまった在米中国人社会を象徴したのである。

## 二 喪失感の根源

### 1、「留学生文学」との異同

「シカゴの死」をはじめとする白先勇のこの時期の作品は、主人公が留学生であるため、それを六〇年代にはやっていた「留学生文学」の一部分とみなす研究もある。確かに、白先勇のアメリカでの体験は、六十年代以降台湾からアメリカにやってきた若者の共通した体験だと言ってよい。

六十年代から台湾や海外華人の間で大きな人気を呼んだ「留学生文学」が、すなわちこうした留学生の境遇と心情をテーマにしていたものである。「留学生文学の始祖」と呼ばれる於梨華が、一九六七年に『又見棕櫚、又見棕櫚』を発表した。それは、留学生たちがアメリカ社会に疎外されることによって、中国人というアイデンティティを強く意識しつつも、中国人ではいられないという困境をよく反映したものである<sup>89</sup>。作品の中で、主人公牟天墨は、アメリカに違和感を抱きながらも、アメリカ一辺倒の台湾にも自らの位置を求められず、結局、「根無し人」になってしまった。作者はアメリカでの留学生の苦悩と彷徨を描いた一方、アメリカ崇拜に走っていた台湾社会の歪みをも暴いた。そして、そうした歪みこそが、留学生たちをアイデンティティ・クライシスに導いたと見ている。

戦後の冷戦体制のなかで、台湾は西側陣営に組み込まれた。台湾は、朝鮮戦争を機に、アメリカに「反共」の前線と位置づけられ、大規模の経済援助を受けた。そうした圧倒的なアメリカの政治的、経済的影響の下で、アメリカ文化の影響も急速に台湾社会を浸透し、大陸文化と断絶し、植民地時代の文化が影を潜めた閉塞的真空を占領した。台湾におけるアメリカ留学ブームもそうしたアメリカ一辺倒のなかで起こったのである。そして、於梨華の作品で描かれた「根無し人」は、まさにそのような現状を反映し、批判したものである。著者は、アメリカ文化の浸透が台湾社会に伝統崩壊をもたらしたことを明確に指摘した。

後に、アメリカと母国と両方に帰属を求められない牟天墨が「根無し人」の代名詞となり、その世代の留学生の典型とされた。於梨華の作品は、六十年代の在米華人社会と台湾社会の状況を反映し、自己喪失の危機に陥る留学生の精神状況をよく反映したため、大き

な成功を収めた。それが「留学生文学」の代表作として大きな支持を受けた。

そして、同じような視角から白先勇の「シカゴの死」をはじめとするこの時期の作品を捉える研究は少なくなかった。なぜなら、呉漢魂を代表とする主人公たちが異国と台湾との狭間の中で、その自我喪失の過程を辿っていくという姿は、牟天墨のような「根無し人」と重なったところが大きいからである。

それに対して、劉俊は異文化による衝撃という単線的な視角からではなく、彼は呉漢魂らが直面したジレンマを指摘している。「シカゴの死」においては、母体文化の象徴である母親が呉漢魂の心の底では「冷たく硬直した死体」であり、他方で、西洋文化を代表するシカゴは「荒野」である。呉漢魂にとって、

中西文化の狭間でのもがきは彼を疲れ果てさせている。……彼は『母親』の冷たい死体を抱えて精神的価値を求めようとはせず、また、西洋文化の『荒野』に自分の生命の価値を見出すこともできない。彼は初めは伝統文化を放棄して西洋文化を追及することを選択したが、現実においては、伝統文化を徹底的に忘れることはできないし、西洋文化に容易に入り込むこともできない<sup>90</sup>。

ここでは、主人公の自己喪失が、西洋文化に疎外されたという原因だけでなく、死んでいる母体文化に戻ろうとしないという側面の指摘が重要である。つまり、劉俊は、主人公のアイデンティティ・クライシスをもたらした原因を、異文化によるカルチャー・ショックに求めるだけでなく、同時に母体文化に対する絶望感にも求めたのである。

しかし、その際、劉俊が再三強調したのは、工業文明の発展によって興りつつある西洋文化に対する時代に合わない、立ち後れている主人公の母体文化の「弱勢」であった。つまり、劉俊は、主人公たちが自分たちの母体文化から離脱しようとした原因を、あくまで西洋文化と比較された母性文化の劣勢に帰しており、母性文化そのものの内部に入って、その原因を求めようとしなかったのである。

しかし、白先勇にとって、西洋と中国との文化的衝突は、アイデンティティ・クライシスを認識する重要なきっかけではあっても、それ自身はけっして呉漢魂をはじめとした主人公たちの自己喪失の根源的な原因ではなかったと思われる。この点において、白先勇の作品は於梨華らの「留学生文学」と区別される。白先勇はアメリカで受けたカルチャー・ショックをきっかけに、自分たちの自己喪失の根源を母体文化自身の内部に求め、その作品のなかで「中国」という主題を確立した。彼は、「台北人」シリーズと「紐育客」シリーズのなかで、それぞれ歴史と現実の両方から「中国」を探究したのである。

## 2、故国から逃避する主人公

牟天墨という主人公が示したように、於梨華の描いた、アメリカで疎外感を覚えた留学生たちが、おのずから台湾に自分の帰属を求めようとしたが、しかし、彼らは六十年代の台湾社会と一体化し得なかった。それに対して、それまでの白先勇の苦しみと違和感を凝

縮した「シカゴの死」には、主人公の呉漢魂が、はじめから台湾から逃れようとしていたのである。

小説の中で、呉漢魂の台湾からの逃避は、母親から逃れることと、恋人に対する拒絶、という呉漢魂の思いと行動によって暗喩される。小説は次のように描いている。

呉漢魂は、毎月、家賃から節約した二十数ドルのお金を台北にいる母親に仕送った。彼が旅に立つ前に、母親は彼の耳元で震えた声で言った：「私が生きているうちに、一度私に会いに帰ってきて。三、四年先でも構わないけど、必ず帰ってきてね」。毎回、母親が手紙の中でいつ学位を取れるのかと聞くと、彼は決まってあと一年と答え、そして、節約した金を手形にして、封筒に入れた<sup>91</sup>。

必ず帰ってという母親の言いつけは、呉漢魂にとって大きな重荷であった。その原因について、作品の中では言及されなかったが、主人公は台湾に戻ろうとしなかったのは明らかだった。彼は、アメリカの摩天楼の汚い地下室に籠もり、節約した金を台北に送ることと引き替えに、帰郷の日を一年また一年と延ばした。その地下室は彼にとって、身を隠す最高の場所であった。

彼は自分の地下室が世から隔離されたように感じた。とくに冬になると、大雪が降ると、歩道の上の積雪は一、二尺も積もり、彼の窓を完全に埋め尽くす。大雪の下に身を隠して、エスキモー人のようになり、呉漢魂は非常に安全と感じる<sup>92</sup>。

呉漢魂は何から逃避しようとして、地下室に籠もらなければいけないのか。呉漢魂が暗唱した「荒地」というエリオットの詩の中に、その回答が隠れている。

四月はいちばん無情な月  
死んだ土からライラックを育てあげ  
記憶と欲望とを混ぜあわし  
精のない草木の根元を春の雨で搔きおこす  
冬は私たちの体温を保ってくれた  
忘れっぽい雪で大地を被い<sup>93</sup>

呉漢魂は「記憶と欲念」から逃したいのである。彼の「記憶と欲念」は、作品の文脈から見れば、いうまでもなく、台湾にいる母親と恋人のことであったろう。しかし、主人公は母親から逃避できても、「忘却」はできないのである。離台数年後、彼の恋人は他の人と結婚し、そして母親も病死した。母親の死後、呉漢魂は悪夢に囚われた。

あの夜、彼は高熱を出して、一晩中悪夢に囚われていた。彼は母の死体が裸のまま棺桶の上に横たわっている夢を見た。真っ白な死体は、少しも血の色が見えない。彼が

前へと向かって歩き出すと、母はいきなり大きな目を開け、茫然と彼を見つめた。彼女の口元はずっと震えていて、彼に話をしようとしたが、声が出せない。彼は母の前に飛びついて、手で母の死体を強く押した。死体は冷たくて重く、凍ったようである。彼は力を尽くして、その死体を棺桶の中に落とし込んだ<sup>94</sup>。

呉漢魂は「不孝」という罪悪感を背負ってまで、台湾に戻ることから逃避していたのである。

しかも、たとえアメリカで疎外されて幻滅を感じても、彼はやはり帰ろうとせずに、自殺を選んだのである。なぜなら、呉漢魂が言う。「台北には二十階の摩天楼がない」からである。それは決してモダンの世界に対する憧れによる叫びではなく、摩天楼の無い台北では、彼をすべてから逃れさせることのできる地下室がないのである。呉漢魂はとうとう行く道が無くなり、湖の中に身を投じた。

呉漢魂の死には、アメリカ社会での疎外感によることがある一方、より根本的な原因は、彼は台湾に戻ることを拒絶したからだと言えよう。行く道がなくなった呉漢魂は、牟天墨と同じように、「根無し人」となった。ただし、留学生たちの流浪の原因を問い詰める時に、於梨華は、アメリカ文化の浸透が台湾社会に伝統崩壊をもたらしたことを明確に指摘したのに対して、白先勇は「シカゴの死」の中で、主人公が台湾、あるいは母親から逃避する原因を提示しなかった。つまり、主人公は何故、彼の母親、台湾から逃れようとしたのか。そうした主人公を創り出した著者の意図は、恐らく彼自身の精神遍歴から窺えよう。

### 三 換骨脱胎の精神的遍歴

#### 1、換骨脱胎した白先勇

台湾にいた時、白先勇は台湾大学での仲間たちとともに『現代文学』を創刊したあと、旺盛な創作に取り組み、二年間も経たないうちに八篇の小説を発表した。しかし、そのあと、一九六二年一月の「卒業」という台湾時代の最後の作品から、次の「シカゴの死」という作品の発表までに二年間の歳月がかかった。この二年の間、一年目の白先勇は大学を卒業し、兵役に服した。その後、かけがえの無い存在である母親との死別を経て、アメリカに留学し、異国の地で一年近く過ごした。この二年間は、二十代の白先勇にとって、人生の重要な転換期だけでなく、彼の創作の重要な転換点でもあった。「シカゴの死」の発表まで、白先勇は精神的な「換骨奪胎」を経験した。

白先勇は後年、そのきっかけについて『驀然回首』の中で述懐したことがある。

初めてアメリカに赴いたとき、白先勇は、いきなり変わった環境のなかで、心が乱れてどこから筆を下ろして良いかわからなくて、まったく創作することができなかった。その年の暮れに、彼はシカゴへクリスマスを過ぎしに出かけ、一人でミシガン湖のほとりにある小さなホテルに泊まった。雪が降るある日の夕方、白先勇は湖のほとりで、広々とした湖を前にし、岸の華やかな摩天楼の灯火とクリスマスソングの中で、突然「奇異な感動」



を感じ、それまで混沌とした心が透き通るようになった。

ふと顧みると、二十五歳のあの自分がぼやけてしだいに消えていった。私は換骨脱胎を感じ、心の中にわかたたくさん年輪が刻まれた。黄庭堅の詞に、「去国十年、老尽少年心」と、あるが、十年はかからず、一年で十分だ。とくにシカゴのようなところでは。アイオワに戻ったあと、私はまた創作を始めた。第一作目は『シカゴの死』であった<sup>95</sup>。

一九六四年一月に発表された「シカゴの死」において、白先勇は、それまでの作品に見られるような現実的な背景がはっきりしないという欠陥を克服して、現実社会における人生に注目し始めた。そして、なによりも重要なのは、白先勇はこの小説から「中国」という主題を意識するようになったことだと思われる。この小説とその後の一連の作品において、白先勇は、二〇世紀の中国人の実存の苦境を表現し、自分自身の中にある「中国」像を考え、探求するようになった。これらの作品は白先勇文学の成熟を表したものであり、また、白先勇自身のアイデンティティへの探求、すなわち著者自身の中の「中国」についての思索と探求の過程でもあった。したがって、白先勇の文学創作からしても、「シカゴの死」はそれまでの白先勇文学の「換骨脱胎」を象徴する作品であった。

アメリカでの最初の一年は、白先勇が振り返ったように、環境の変化によって、心が乱れ、創作ができなかった。このような異国の地で感じた疎外感による困惑は、けっして白先勇一人の感覚ではない。およそ海外留学をしたことのある者は、多かれ少なかれみな同じような経験を持っている。そして、このような疎外感から、往々にしていっそう自分の国や自分の文化への同一性を強く意識することになる。しかし、白先勇の困惑と苦しみはそれだけではなかった。彼は、ある意味では、まさにそのような「中国」への自己同一性を強く意識したからこそ、より深刻なアイデンティティ・クライシスを抱えるようになったのである。そして、このような危機感は、彼に「中国」をその後の作品の主題に据え続けさせたのである。

言うまでもなく、湖畔で感じた突然な「奇異な感動」は、白先勇を自分の「換骨脱胎」を悟らせるきっかけであったが、彼の「換骨脱胎」はけっしてその一瞬間にできるものではなかった。実は、その「突然」の背景には、彼の、二〇代の若者にふさわしくない、あまりにも屈折した精神的歷程があったと思われる。

## 2、台湾時代の白先勇

一九五二年、十五才の白先勇は香港から台湾の両親の元に戻った。彼は台湾で高校を出たあとに、成功大学を経て台湾大学に入った。卒業してあと、白先勇は兵役に服して、一九六三年にアメリカに留学した。この間、閉塞した台湾の社会状況と家族の影響とは、白先勇に屈折した精神的歷程をもたらした。

五、六〇年代の台湾は閉塞の社会であった。台湾海峡兩岸の軍事的対峙もさらに台湾社

会に緊張を与えた。台湾の民衆は、このような緊張感と、独裁政治による厳しい統制と弾圧という恐怖の中で、強い危機感を募らせた。

他方で、国民党の軍隊と一緒に台湾に渡った外省人のなかでは、三年、五年、十年が経っても「反攻、復国」の影すら見られないことで、懐郷の思いが日々増していった。

当時、大陸から来た「外省人」の多くは、台北の松江路の近くに住んでいた。住宅は緑のペンキが塗られていた木作りの長屋だった。白先勇一家もそこに住んでいた。彼は後に当時の松江路の住民たちの心情を次のように表現している。

これらの外省人たちは、そのとき、心の中で「反攻、反攻、大陸に反攻する」日が来ることを信じたかった。彼らは、簡略に建てられた木造の家はただ一時的な住まいに過ぎず、しばらくは耐えようと考えていた。しかし、その後、十数年も二十年も住み続けようとは誰もか思いもよらなかった……<sup>96</sup>

白先勇が指摘したように、「反攻復国」という公式の神話は、海峡の彼岸に戻りたい当時の追放された者たちの気持ちを代弁していた。国民党政府統治の初期に、誰もこの神話を疑うことはできなかった<sup>97</sup>。しかし、時間が流れていくとともに、この神話は幻想へと変わっていった。

そんな息苦しい閉塞環境の中で、もっとも敏感に反応したのは若いインテリたちであった。一九六〇年三月、台湾大学の外国語学部に在学中の白先勇は、仲間たちと一緒に雑誌『現代文学』を創刊した。後年、白先勇が『現代文学』の創刊背景について回想するとき、自分を含めた台湾における大陸から来た者の子弟が直面した苦境を次のように説明した。

外省人の子弟たちの苦境についていえば、大陸での歴史の功罪に対して、私たちはいかなる責任も負わない。なぜなら私たちがみな年少だった。しかし、大陸での失敗による悲劇的な結果を、私たちは私たちの父兄たちとともに背負わなければならない。現実には、私たちの父兄たちが大陸で築き上げたあの古い世界はとっくに瓦解崩壊していた。私たちはあの消え失せて、ただ記憶と伝説にしか存在しない古い世界にはアイデンティファイすることはできない。私たちは、一方では父兄たちの保護の下で成長したが、他方では、父兄たちが私たちに強制した古い世界から持ち込んできた価値観から脱け出して、人格と思想的独立を求めなければならなかった<sup>98</sup>。

歴史にはじき出された悲劇的な運命を父兄たちとともに背負いつつ、若い白先勇と同世代の若者たちはあのすでに消え失せた古い世界の桎梏から自由になろうとした。「反攻大陸」によって、過去のすべてが再来するという夢が幻想と化し、高圧的政権に厳しく取り締まられた台湾社会がしだいに自信を失っていくという、希望の見えない、閉塞の状況に直面して、白先勇たちは、この抜け道の無い暗闇に引き込まれまいと、もがいた。

ただし、以上の意識は、まだ二十才を過ぎたばかりの当時の白先勇が必ずしもはっきり自覚していたわけではなかった。時代によってもたらされた苦悶は、まだ混沌とした形で

彼の作品に存在した。彼がこの時期の自分の文学を「ロマンティシズムの時期」<sup>99</sup>と呼んでいるように、この時期の作品は全部悲劇的な自殺で結末を迎えるものであったが、作品のモチーフは、むしろ「愛情があらゆるものに打ち勝つことができる」<sup>100</sup>というものだった。

『現代文学』の創刊後、白先勇たちは旺盛な文学創作を始めると同時に、西洋のモダニズムを精力的に紹介した。創刊号で彼らはカフカを特集し、続けてカミュ、フォークナー、ヘンリー・ジェームスなどを紹介しつつ、ニヒリズム、実存主義、意識の流れなどを取り入れて、二十世紀の世界文学に直接に繋がろうとした<sup>101</sup>。その試みとして、白先勇は自らの作品に、現代人の不安や困境を時間の中、社会の中における人間存在の不安定性を通して表現した。

『現代文学』は、五十年代の反共文学を離れて二十世紀西欧文学を全面的に受容しようとする当時の文学界の動きを一身に受け、台湾現代文学史において大変大きな影響を残した。しかし、このような功績の反面、松永正義が批評したように、「彼らが文学界に新風を吹き込み、西欧現代文学の達成を受容、定着した功績は大きいですが、同時にそれはまた西欧一辺倒の風潮や、気分としてのニヒリズム、アイデンティティ喪失など、現実を喪失した無国籍文学、高踏文学に道を開くものでもあった」<sup>102</sup>。

「現実を喪失した無国籍文学、高踏文学」という指摘は、白先勇がこの時期に創作した小説と「シカゴの死」以降の小説とを区別された最も重要な点といえる。

台湾時代の白先勇の作品は、周囲との一体感を求められない危機に陥った主人公たちを描き出した。彼らはそれぞれの苦境や孤独から脱け出すために、悲運に懸命に抵抗しようとした。そして、自殺は彼らの最終的な抵抗手段であった。作品はこの時期の白先勇と同世代の若者の精神状況——父兄たちのアイデンティティに自己同一化できず、抑圧、閉塞の現実には不満から、自由と独立を求める欲求——を良く醸し出している。しかし、作品には時代の背景は無く、人物像も現実性に欠けていた。言うまでもなく、そもそも厳しい統制の下で、現実の社会を写実することは、大きなリスクを負うことを意味している。台湾社会の現実には、このような現実性を欠けた無国籍文学をもたらしたといっても過言ではない。

さらに、白先勇の作品における主人公たちが、いずれも自殺をもって彼らの最後の抵抗としたことは、白先勇自身における混沌とした苦悶がいまだに出口を見出していないことを物語っている。このような苦悶が、「中国」というアイデンティティの追求というはっきりした形でアプローチされるのは、白先勇のアメリカでの体験によって「脱胎換骨」するのを待たなければならなかった。

白先勇の精神的歷程に大きく影響したのは、閉鎖的台湾社会の状況だけではなかった。白先勇の家族にできた一連の出来事も彼に大きな影響を与えた。

理想の社会のアメリカへの留学は当時の台湾の若者たちにとって、憧れだが、一般の人々にとっては狭き門であった。そんな中で、白先勇はアメリカ留学の奨学金を獲得した。しかし、このチャンスを手にした白先勇の心情はきわめて複雑であった。それは彼に対する家族の影響によるものであった。

まず、前述したとおり、白先勇にもっとも大きな衝撃を与えたのは、彼が渡米する二ヶ月ほど前の母親馬佩璋の死であった。転々とした生活の中で、どんなに困難な時であってもつねに楽観的であり、負けず嫌いの性格で白、馬の大家族をまとめてきた母親は、家族の中心であり、白先勇にとって精神的な支柱でもあったのである。台湾を離れる直前の母親との死別は、白先勇にとって、家のまとまりの象徴がなくなっただけでなく、「自分の生命の一部」を失ったように、精神的支えを失ったことを意味した。

それに加えて、アメリカに旅立つときの父親との生き別れがさらに白先勇の心を震撼させた。

母親が埋葬されたあと、私は回教の儀式にしたがって墓に四十日間通い、第四一日目にアメリカに飛び立った。父親が空港まで私を見送り、一步一步寄り添いながら、例を破って私を飛行機のタラップの下まで送ってくれた。父親はかつて百万の軍隊を率い、死と隣り合わせながら戦っていた。また、天性意志が固かったため、喜怒の感情は簡単に顔に表れない。しかし、晩年に連れ合いを失い、息子も遠出するため、あの日、寒い風の中で、つい悲涙を流した。それは私と父親との最後の対面であった。私が学業を終えて戻ったとき、父親はすでに亡くなっていた。一ヶ月あまりの間、私は生き別れと死別を味わい尽くした。人生の憂いも、ここから始まったのである<sup>103</sup>。

白先勇の父親白崇禧は国民党の名将軍であった。彼は、十八歳で従軍し、死と隣り合わせさせた幾多の戦いを経験した勇将であった。しかも、彼は国民党の元老将軍として、民国の政治舞台でも大きな影響力を発揮した。しかし、白崇禧の一生は悲劇そのものだった。民族英雄岳飛を敬慕した彼は、抗日戦争で国のために戦ったが、その後の国共内戦で破られ、大陸からはじき出された。その後、台湾においては、それまでの自分の事を曲げない性格からたびたび蒋介石と対立したのが原因で、実権を剥ぎ取られ、さらに政治生命を絶たれて、事実上軟禁同様の窮状に陥った。

白先勇の心の中で、父親は、北伐戦争と抗日戦争を経験した中国近代史上の英雄人物で、手の届かない存在であった<sup>104</sup>。しかし、空港の送別で、白先勇が目にした自分の父親はもはや昔日の英姿が見られなかった。親子の最後の対面で、白先勇はどこまで老人の「国破家亡」の心境を理解したのだろうか。しかし、あの弱音を吐いたことがなく、恐れを知らなかった父親の涙は白先勇を強く震撼したに違いない。前述したように、アメリカに赴いたあと、白先勇が中国の悲惨な近代史を描いた映画を見て、「国破家亡」の気持ちを感じたとき、始めてその父親の気持ちをはっきりとわかったであろう。

### 3、他者との出会いによる自己発見

複雑な気持ちを抱えながら、白先勇はアメリカに赴いた。実は、アメリカは白先勇にとって未知の世界であるというだけでなく、彼の姉のアメリカ体験が彼に一種の不安を抱かせている。

白先勇が香港時代にともに生活をし、もっとも仲の良かった三番目の姉白先明は、香港を離れたあと、直接アメリカに留学した。しかし、内気の姉はアメリカでの生活に適応できず、結局、三年後、精神分裂症にかかって台湾に戻っている。そのことは台湾にいた白先勇に大きなショックを与えた。姉の病気を治すために、白先勇は多くの医学関係の本を読み漁った。同時に、姉のアメリカにいた三年間に何があったかが、ずっと謎として白先勇の心に残った。

そうした不安を抱えた白先勇は、アメリカに渡ったあと、みずからカルチャー・ショックを体験した。

渡米してまもなく、白先勇はアメリカ中を震撼させた事件に出会った。それはケネディ大統領の暗殺されたことであった。そのことが白先勇にとってもっとも衝撃だったのは、テレビで、ホワイトハウスのスタッフが新しい大統領を迎えるためにケネディの遺物運び出す場面を見たときであった。白先勇にとって、「国中の悼み嘆き声のなかでも、アメリカ人は危機に臨んでも乱れず、冷静にことを処理し、たとえ故大統領の遺物に対しても情を見せない。このことは儒家伝統の洗礼を受けた中国人にとって、まさに大きな『カルチャー・ショック』であった」<sup>105</sup>。

このような理性的で、合理的なアメリカ社会のイメージと、姉のような弱者を容れられないアメリカ社会のイメージは、白先勇に複眼的にアメリカを捉えることができるようにさせた。

しかも、白先勇は渡米後最初の小説「シカゴの死」の舞台としてシカゴを選んだ。それは彼が「換骨脱胎」を経験した場所と重なっただけでなく、シカゴは白先勇が感じた六〇年代のアメリカ社会の縮図でもあったからであろう。

アメリカ内陸の交通要路にあるシカゴは、昔中西部の農産品の集散地として有名だった。十九世紀のアメリカの産業化の進展につれ、解放されたばかりの多くの黒人が南部からやってきた。その後、黒人の廉価な労働力が、大資本や、近代的技術とともに、摩天楼が並び立つ近代的工業大都市シカゴを造り出した。しかし、第二次世界大戦後、アメリカ社会における消費文化が興隆し、消費産業は在来の古い産業構造を空洞化させた。大量な黒人人口を抱えて、「ブラック・シカゴ」と呼ばれていた工業大都市シカゴでは、そのような変遷の過程で、多くの黒人が仕事を失い、行き場を失った。このような深刻な社会問題に加えて、七十年代までのシカゴはアメリカでもっとも厳しく人種隔離政策をとっていた都市でもあった。こうした黒人にとっての厳しい環境が社会に大きな不安をもたらした。

社会にはじき出された弱者に対して厳しい、というアメリカの一側面を代表したシカゴにおいて、二〇代の白先勇は「老尽少年心」を感じ、「換骨脱胎」のように成熟した。そこで、彼は同時に、ずっと謎であった、優しく、内気の姉白先明がアメリカで精神分裂症になる原因を幾分かわかったであろう。

後年、台湾に戻った白先勇は姉に、まだアメリカに遊びに行きたいのかと聞いたが、姉は頭を振りながら言った。「あそこは寒すぎるよ。」<sup>106</sup> 白先勇は、

たぶん、ボストンの冬が彼女を怯えさせただろう。アメリカの極寒の地の寂しさは、

新大陸の広い土地と同じように、果てしないものだった。ここでは、失敗者が立錐の地はない<sup>107</sup>。

と述べた。あの果てしない寂しさに包まれる冷たいアメリカは、理性的、合理的なアメリカとは、コインの裏と表である。白先勇の作品におけるアメリカがたいてい厳しい寒さに包まれているのはそのことを物語っている。

しかし白先勇のアメリカに対する違和感は、それだけではなかった。彼にとってより深刻なのは、むしろアメリカ社会の中国認識への違和感であった。

後年、白先勇はこう漏らしたことがあった。

たいへん不思議なことに、アメリカではわれわれの抗日戦争について公正的に書いた本は一冊もない。彼らは中国の「民国史」を非常におろそかにしているし、分かっていない。もっとも憎らしいことに、外国人の多くは、抗日戦争をやったのが中国共産党であり、国民政府が抗戦しなかったと信じている<sup>108</sup>。

白先勇から見ればアメリカ人が「民国史」について無知であるために、それを切り捨てて、歪んだ中国像を作り出したのである。「民国史」と密接な関係にある白先勇にとってアメリカ人のこうした歪んだ中国認識に被らせたのは、耐え難い苦しみであった。そこでわれわれは「シカゴの死」の中にある、白人娼婦の中国人を語った言葉に真剣に抗議した呉漢魂の姿と、アメリカ人の中国認識に強い違和感を抱いた白先勇自身との関連性を認識することができた。

しかしアメリカ人の中国認識に強い不満を持っていても、そのときの白先勇はそれに反論する力を備わっていなかった。なぜかという「民国史」について、彼自身もあまりにも無知であった。前文で紹介したように、当時の白先勇は将来帰国した時に父親（抗日の名将軍白崇禧）に台兒庄戦役<sup>109</sup>の実際のことを聞こうとしたのであった。

白先勇はアメリカという異質の他者との出会いで強く意識したのは、自分のアイデンティティの空虚であった。彼は渡米後の創作の再開について回想するとき、次のように述べた。

あの時期、私の創作にもっと大きな影響を与えたのは、自己発見と自己探求であった。私は、多くの留学生のように、国外に出て、外来文化の衝撃を受けると、いわゆるアイデンティティ・クライシスが生まれる。自分自身の価値観や信仰について改めて考えなければならなかった<sup>110</sup>。

白先勇は、中国の歴史、政治、哲学、芸術などの分野に関する書物や、五・四時代の小説を図書館から大量に借りて、貪欲に読み漁った。そして、中国近代史に関する本もたくさん読んだ。カルチャー・ショックによって、自己のアイデンティティをより強く意識するようになった白先勇は、自覚的に中国の歴史、文化を学習し、自己探求を始めたのであ

る。

白先勇はアメリカの「民国史」の切り捨てた中国認識に反発する一方、「民国史」を美化することによって描かれた五、六十年代の台湾社会の中国像にも強い抵抗感を持っている。前述のように、『現代文学』を創刊した時期、白先勇たちは彼らの親世代の価値と共有できないことから、そして閉塞的な現状を打開しようとして、新しい世代として独立な自己を探求しようとした。しかし、その時の白先勇の「ロマンティズム」文学からわかるように、彼の探求は人間の実存という普遍的な主題に終始し、社会的現実とかけ離れていた。それは当時の社会状況に制限されていたからだとはいえ、若者たちは、まだ、何を喪失したか、親たちの世代と異なった何を求めるかを必ずしもはっきり自覚していなかったといえる。しかし、アメリカという他者の前で、白先勇にとって、それまで混沌とした自己が見えてきた。つまり中国人としての自分は空虚な存在であった。そこから白先勇の中国をめぐるアイデンティティの探求が始まった。

湖畔での「換骨脱胎」の体験はそれを象徴するものであった。一年近くの違いと心の乱れを経て、白先勇は乱れて、混沌とした気持ちを整理し、それに取り組む糸口を見つけただろう。彼は自分の成長を感じた。「換骨脱胎」はまさにそれまで混沌とした意識への克服だといってよいだろう。

白先勇は「中国」を探求する道なりに旅たった。白先勇が「シカゴの死」を通して描いた最初の中国像は、蒼白で、空虚な「中国」である。

作品の中で、呉漢魂は「不孝」という罪悪感を背負うまでして、台湾に戻ることから逃避していたのである。台湾での白先勇の経歴と「シカゴの死」を創作するまでのアメリカでの精神的遍歴からわかるように、呉漢魂の逃避する姿は、白先勇の姿と重なっている部分が多いことは明らかである。作品のなかで、それまで混沌とした白先勇の苦悶と喪失感がはっきりした形で表現されている。「換骨脱胎」後のこの作品は、著者の自己アイデンティティを問うという非常に切実な問題を取り上げるようになったのである。

前述のように、白先勇にとって、大陸との関係を切り離され、国際的にも孤立された台湾において、人々の「帰郷」の夢が破られ、さらに、国民党政権の厳しい取締りの下で、台湾はまさに夢も希望ももたない閉塞の状況にあった。そうした喪失と苦悶とが、白先勇は家族の運命を通してよりいっそう深く感じるようになった。台湾は彼にとって、もはや自己同一化することのできる場所ではなかった。白先勇が「郷愁文学」や、「反共文学」によって埋め尽くされていた文学現状の中で『現代文学』を創刊したのも、渡米したのも新しい価値、新しいアイデンティティを探求するためであった。作品のなかで、呉漢魂の台湾からの逃避の理由は明らかにされていないが、白先勇にとって、それは自明なことであっただろう。

結局、「台北には二十階の摩天楼がない」と心の中で叫んだ呉漢魂は、希望の見出せない台湾に戻る道を自ら絶ったと同時に、再び地下室に戻ることをも拒否した。この厳しいシカゴで、この厳しいアメリカ社会で、呉漢魂はとうとう「立錫の地」さえ見つけられず、行く道が無くなったのである。

主人公が自殺を選択する、という小説の結末は、白先勇の台湾時代の小説と同じである。

死という結末は一見、非常に消極的で、暗いように見えるが、それがむしろ著者の意志と信念の表明である。台湾時代の小説の場合、白先勇は、主人公の自殺を持って、愛の尊さを表現しようとした。「シカゴの死」においても、呉漢魂の自殺は、作者自身が妥協しない意志を表しているといえよう。ぼろぼろとなっている「中国人」という身分を棄てて、アメリカ人になることもせず、逆に、希望のない台湾に戻り、父兄世代の幻の記憶のなかで生活することも拒否する。自分の空白の「中国」像に強い危機感を抱いた白先勇は、漆黒のなかで「中国」を模索するという艱難の道を選んだのである。

「シカゴの死」の中で、白先勇自分の世界に閉じこもる自我と別れを告げ、命をかけて「中国」を探求する人物像を描いた。しかし、「中国」を追い求める信念があっても、「中国」はそれによって現れてくるわけではなかった。この時期の白先勇のほかの作品は、すべて作者自身の「中国」というアイデンティティに対する模索のなかで捉えられるのである。



## 第4章 「香港——一九六〇」から見る白先勇の中国像

「紐育客」シリーズは、白先勇が自分の中の「中国」に対する追求の過程でもあった。前章で考察したように、「シカゴの死」において、主人公呉漢魂は自分が中国人だという証明ができず、「中国」を見つけられなかった。その後、白先勇はさらに「香港——一九六〇」の中でその「中国」のアイデンティティを探求し続けた。しかし、その中国像はきわめて不安定なものであった。以下、「香港——一九六〇」および香港という都市の白先勇にとっての意味を考察し、作品に見る白先勇における不安定な中国像を分析することにする。

### 一 「紐育客」シリーズの作品としての「香港——一九六〇」

#### 1、看過された「香港——一九六〇」

一九六四年、「シカゴの死」を『現代文学』の第一九号で発表したあと、白先勇は一年間ほどの間、「摩天楼へ行く」、「香港——一九六〇」、「安楽郷の一日」、「火島に行く」などを相次いで創作し、『現代文学』に掲載した。

一気に書き上げられたこの五つの短編は、発表された当時、「紐育客」というサブタイトルがつけられていなかった。この五つの作品は、一九七六年、白先勇のほかの早期作品とともに遠景出版社の『寂寞的十七歳』に収められ、また、その後も白先勇の各種の小説集に散見されるが、いずれもサブタイトルはついていない。二〇〇〇年に、白先勇の同意と関与を得て、広州花城出版社が出版した文集『白先勇』の中で、「紐育客」シリーズははじめてその全貌を現し、この五つの短編も「紐育客」シリーズの一部として収められた。

しかし、この五つの作品を「紐育客」シリーズに収める場合、ひとつの疑問にぶつかることになる。すなわち、作品のストーリーからすれば、ニューヨークとまったく関連を持たない「香港——一九六〇」をどのように扱うかという問題である。従来、研究者の間では、この作品を当シリーズに入れないのがむしろ普通だった。

「紐育客」シリーズがまだ完結していなかった一九七五年に、白先勇の大学時代の同窓劉紹銘は、白先勇の作品の選集『紐育客』を編集した。香港文学書屋から出版されたこの単行本は、「紐育客」シリーズを扱った最初の選集である。しかし、この選集には「香港——一九六〇」は含まれていない。編集者の劉氏は、作品を選ぶ基準として、「白先勇がアメリカを背景にして著した作品」<sup>111</sup>だと述べている。このような基準の下で、「香港——一九六〇」が選ばれなかった代わりに、『台北人』に属する作品「冬夜」が、登場人物にアメリカで活躍している華人がいるという理由で選ばれた。劉氏にとって、『紐育客』を編集したのは、それを「呉漢魂（「シカゴの死」の中の主人公——筆者注）のような異国の地に死せる寄る辺のない魂に身を寄せる霊屋」<sup>112</sup>にするためであり、「中国風光」と「伝統中国礼儀」を兼ね備えている香港のストーリーは、言うまでもなく、選集に入る余地がない。

また、袁良駿も劉氏と似たような見方を示している。袁氏は、白先勇が渡米したあと、「祖国を遠く離れた根のない遊子のために『流浪者の哀歌』を創作しようとし」て、「シカゴの死」をはじめとする「紐育客」シリーズの創作が始められたとし、「香港——一九六〇」を「紐育客」シリーズの範疇外としている<sup>113</sup>。

作品のストーリーや登場人物からすれば、「香港——一九六〇」には、「異国の地に死せる寄る辺のない魂」も「根のない遊子」も登場していないし、主人公にアイデンティティの危機をもたらした西洋文化の表象としての「ニューヨーク」も登場していないため、鮮明で、強烈な中国の息吹に満ちているこの小説を、「紐育客」シリーズに数えられないことが当然だったかもしれない。

しかし、興味深いことに、研究者たちの考えに反して、白先勇は「香港——一九六〇」を「紐育客」シリーズに入れた。彼は何を基準にして「香港——一九六〇」を選んだのか。もちろん、この作品がほかの四作品と同じ時期に創作されたという理由も挙げられるかもしれないが、しかし、作品シリーズ全体の整合性からすれば、白先勇はそれだけの理由で作品をシリーズに入れたとは考えられない。そもそも、白先勇は創作順の原則ではなく、作品のモチーフからその作品のシリーズをわけたからである。では、白先勇はなぜ「香港——一九六〇」を「紐育客」シリーズに入れたのか。ストーリーも、主人公もほかの作品と同質性を持たない「香港——一九六〇」が「紐育客」シリーズに入れられたのは、この作品のモチーフは、「紐育客」シリーズのそれと一致していると白先勇自身は考えているからではないか。逆に、「香港——一九六〇」に対する従来の研究と分析は作品の核心を衝いていないといえるかもしれない。

## 2、「紐育客」シリーズのモチーフ

もし「香港——一九六〇」のモチーフが「紐育客」シリーズのそれと一致しているならば、まず「紐育客」の主題を確認しておく必要がある。

「紐育客」シリーズの創作について、白先勇は次のように述べたことがある。

アメリカでの経験は大変重要である。それは主として外国へ行ったあとに私の自分の国に対する見方に大きな変化が生じたことである。外にいた時、……かえって自分の国の文化に対して特別に恋しがるし、見方についても距離を置いたと思う。もし私が海外に行かなかったら、たぶん自分がその中に身を置くせいで、私たちの歴史について客観的に見るができなかっただろう。しかし、外国に行ったあと、自分が中国人だといっそう意識するようになり、自分の国家の運命にいっそう関心を持つようになった。私が外国にいたが、しかし外国での経験の重要性というのは、実は外国で自分の国に対する見方、考え方の悟りと成長を得たことであり、外で私がほかのものを吸収したという意味ではない。当然、私は外で西洋の文化も学んだが、しかし、それ以上に私たち自分

の国家の歴史や、文化について深思し、反省した<sup>114</sup>。

ここにおいて、白先勇は自分がアメリカにいるときに最も関心を持っているのは「自分の国家」の運命や歴史、文化であるという心情を明らかにしている。その「紐育客」シリーズの中で表現した「アメリカでの経験」も、何より彼の中国に対する見方の変化と成長を反映するものに他ならない。また、白先勇は自分の文学創作の道を回顧する「驀然回首」においても、「紐育客」の創作について同様の考えを示している。

国を去ってから久しい、自分の国家に対する文化的郷愁が日増しに深くなった。そのため、「紐育客」およびその後の「台北人」の創作を始めた<sup>115</sup>。

白先勇にとって、「紐育客」シリーズも「台北人」シリーズも、「中国」というアイデンティティを探求することをモチーフとする点では共通しているのである。

しかし、この両シリーズが表現しようとする「中国」は異なったものである。それはまさにこの二つのシリーズの最大の相違といつてよい。

従来、白先勇の「紐育客」シリーズにおける「中国」というモチーフに注目した研究は少なくない。これらの研究の「中国」についての捉え方は大きく二つに分けられる。第一に、「中国」とは、自明であり、実在するものであるという見方である。劉紹銘や袁良駿の研究は、「紐育客」の苦痛と悲劇の原因を主人公と中国との間の空間上の隔離に求めた。言い換えれば、もし主人公たちは中国の大地に身を置けば、中国人としてのアイデンティティを獲得して、「紐育客」のようにアイデンティティの危機に陥ることはなかつただろうということだ。このような論点において、「中国」は中国という名の大地と同じように実在しているもので、疑う余地のない存在である。

第二に、以上のような捉えかたに対して、「紐育客」シリーズにおける「中国」を、近現代史の中で、西洋の文明に抑圧され、衰弱の運命をたどった「弱勢文化」として捉える研究もある。たとえば、劉俊は「紐育客」における主人公たちの運命について、次のように述べている。

私たちは呉漢魂（「シカゴの死」の主人公——筆者）たちの失敗のあらゆる原因をその母体文化の衰微に帰結するならば、現代社会におけるこの文化の境遇もまたその歴史的必然性——運命——によってしか決められない。したがって、西洋社会に対する中国の伝統文化の弱勢と低迷が運命付けられた中で、この文化に属し、この文化に名残を惜しむ呉漢魂たちも、自然にこの文化の運命を共にすることになる<sup>116</sup>。

劉俊の研究は、「紐育客」のアイデンティティ危機と近代中国の危機との間の関連性を指摘した点では、注目に値する。第一の観点と比べて、ここにおける「中国」は、けっして

「紐育客」たちを苦痛と悲劇から自由にすることのできる、完全無傷の姿ではなく、むしろ、「紐育客」たちと運命を共にする衰微の存在であった。「紐育客」の危機を現代中国の危機として捉えることは、非常に重要な指摘である。

しかし、劉俊は「紐育客」シリーズから危機的な状態にある中国像を探り出したものの、その危機をもたらした原因を西洋文化との衝突に求めたため、「自分の国に対する見方、考え方の悟りと成長を得た」という白先勇の強調した中国についての見方という側面を見落としたといわざるを得ない。つまり白先勇が「紐育客」シリーズの中でもっとも表現したいのは、刻一刻に変化している中国についての自分のその時々のお考えである。そのため、西洋文化の象徴であるニューヨークと無関係であることは、「香港——一九六〇」を「紐育客」シリーズから除外する理由になれない。逆に香港を通して中国を表現するという「香港——一九六〇」の特徴はまさに「紐育客」シリーズの真髓を体現したといえよう。

## 二 「香港——一九六〇」における「中国」

時は一九六〇年代の香港、七十年ぶりの日照り、命に危険が及ぶほどの水飢饉、大量に殺到する難民、蔓延して已まない疫病……、危機にさらされた香港において、人々は水のため、食料のためにどたばたしている。泣き叫び、呪い罵り、隣同士のけんかの声が町に満ちみちた。物乞い、強奪が横行し、売春、女郎買いが氾濫した。屋根裏ですることもなく過ごす主人公余麗卿は、外のやかましい騒音と屋根裏の主人が吸うアヘンの香りに包まれ、意識が朦朧としていた。彼女の脳裏に、断水で苦情を言い続ける女中、斬首されたが亡霊が散らない国民党軍師団長の夫、街頭に流浪して、物乞いと略奪をする過去の衛兵、アヘンで彼女を我が物にした無頼漢、他郷へ去ることを極力勧める妹、西洋人のごろつきにもてあそばれて身売り金がもらえない娼婦、洪水から逃れようとするような、蟻のごとき大陸難民、そして、難民を鉄の籠に閉じ込める香港警察、などなど、一つ一つの顔が回り灯籠のように浮かんでくる。それにつれ、焦燥、恐怖、不安、悲哀、無力、激憤、自責など、あらゆる感情が彼女の心に込み上げたが、彼女の麻薬に蝕まれた体は死体のように硬く、その罪悪感でいっぱいになった内心は、鉛のように重く、彼女を底のない深淵へと沈ませていく。

一九六四年六月に発表されたこの作品の中で、白先勇は六十年代のはじめの香港が直面した一触即発の危機状況を描き出した。作品の中に出てくる日照りと水飢饉は、一九六三年五月から一九六四年の初夏の間、香港で実際に起こった現実であった。この間、香港は七〇年間ぶりに晴れの日が続き、空前の日照りと水不足状況にさらされた。香港住民への水供給時間は二日に一回、一回につき四時間へと減らされた。最もひどい場合、四日に一回、一回につき四時間に減らされた<sup>117</sup>。

香港の花崗岩の地質、そして島であること、などの自然要素からすれば、水不足は意外で突発的な災難ではなかったはずだが、しかし、水飢饉を引き起こしたのはこのような自

然的な要素だけではなかった。白先勇が作品の中で描いたように、大量の大陸難民の殺到という人為的な要素こそが、資源のない小さな香港を、水や食料が不足し、疫病が蔓延する状態に陥らせた重要な原因であった。

今日、当時香港に入り込んだ難民の波の形成原因と基本的な状況はすでに明らかにされている。この難民の波を生み出したのは、中国大陸の天災と人災であったことは紛れもない事実である。事件発生当時、難民の発生原因についてはまだ諸説まちまちで、毎日の難民流入人数もはっきりしなかったが、しかし、香港の様子を通して中国大陸を見るということは、すでに西洋世界が取った共通した手法であった。西洋諸国の政府機関から、マスメディアや、中国に関心を持つ学者、普通の人々まで、みな香港で起こったかすかな手がかりに頼って中国大陸に関する情報を捉え、西洋世界と隔絶された大陸で起こっていることを推測したのである。

異国の地で郷愁に耐えていた白先勇も、香港経由で伝わってくる中国大陸に関する情報をけっして見逃しはしなかった。大陸の評論家費勇が「白先勇の香港に対する解読は、明らかに一種の強烈な中国意識に基づいている。香港に関する彼の創作は、いたるところに中国に対する関心が現れている」<sup>118</sup>と指摘したとおり、白先勇はこの作品の中で香港を通して中国を描こうとしたのである。

「香港——一九六〇」の中に描かれた二つの対照的な形象—災難を前に無力のままで死を待つ主人公と暴走しそうになった大陸の難民は、内なる対立を抱えるという中国の危機的現実を表現したものとして受け止めることができる。

特に主人公余麗卿という形象は、度重なる打撃を受け、力を無くしてしまった伝統中国の姿を活写した。われわれは大陸難民をめぐる余麗卿の複雑な思いを通して、白先勇の思い描いた伝統中国と現実の中国、そしてその両者の間のギャップを見ることができる。

まず余麗卿にとって、大陸からの難民は疫病であり、脅威であり、死をもたらすものである。

彼らは多数の難民を公共病院に収容した。ウンウンうなって、嘔吐しているのは、顔色が黒ずんだコレラの患者ばかりだった。中国大陸の疫病は黒雲のように香港の上空を覆うようになり、ああ、この「オリエントの真珠」の命数も尽きようとしている。<sup>119</sup>

この側面だけを取り出して見るなら、共産主義を洪水や猛獣とみなす、という反共文学によく使われる常套に見えるが、しかし「香港——一九六〇」はけっしてそのような粗末の反共文学ではなかった。なぜなら余麗卿自身も嘗て難民であった。作品の中で、警察が難民を捕まえ、大陸に送り返す騒ぎを聞いた余麗卿は、脳裏に次のようなシーンを思い浮かべた。

警察は大声で叫んでいる。小商人が泣き叫びながら階段から転げ落ちていく。パトロ

ールカーのサイレンはあらゆる騒音を消し、無数の鞭を空中で打ち振るように鳴り響いている。それが居留証明を持っていない難民を次々と運んでいき、野良犬のように汽車の車両に詰め込んで、新界から中国大陆に運び去った。疫病と飢饉がこれらの過剰な黄色の人体をゆっくりと消滅させていく。香港の総督は、香港の治安のために、越境した難民の駆逐を厳格に執行しなければならない、と言っている<sup>120</sup>。

余麗卿は、英国の植民地主義者にとって、疫病をもたらす難民を追い返して、大陸に封じ込むことさえできれば、彼ら自身の利益を守ることができる、ということがわかっている。しかし、彼女と同じように黄色い皮膚を持つ香港人にとって、難民の運命は自身の存在ときれいに分けることはできない。それは、皮膚の色以上に、彼女の運命は大陸の難民と驚くほど似ているからである。十何年前に、国民党政権の敗退につれ、国民党軍の師団長であった彼女の夫は「赤の政権」に死刑にされた。彼女は一人で大陸から香港に逃げ込んだ。六二年の難民と比べて、彼女は金目なものをもっていかも知れないが、死の恐怖、あがきの疲れ、家を失った孤独、冷たい世間、暗い未来などなど、彼女の内心も同様に難民のような辛酸を嘗め尽くした。この耐え難い内心の苦痛で、彼女は夫に誓ったことにそむき、名門の榮譽を放り投げて、麻薬商人の懐に身を投じ、自己麻酔の日々を過ごしている。麻薬商人の脅迫と恐喝の前で、彼女は無力であり、また、彼女は、師団長の夫人としての過去の罪業から逃れることもできず、日に日に体を蝕まれている。

私はまだ救われうるだろうか。私の体は生ぐさく腐っている。あなたは私の皮膚の下に蛆虫ばかりが這っているのが見えないだろうか。わたしはコレラ患者のように内臓がすでに黒く腐っている<sup>121</sup>。

すでに見たように、余麗卿は大陸を疫病にかかった病人と見ている。ここにおいては、彼女は自分を治らない病気にかかった患者と見ている。のみならず、彼女の目には、すべての人がみな病態を帯びている。あの梅毒に感染してまつげが蝕まれた街頭の娼婦、病態のアヘン吸引者はいかに及ばず、たとえ教師をしている彼女の妹すら「蒼白な顔は半透明の謄写版原紙のよう」である。おそらく余麗卿が見るには、香港にいる人々はみな沈没寸前の船に同乗する同類であり、お互いに助け合うべきだった。しかし彼女にはこうした「同病相哀れむ」の気持ちがあったものの、もはや実践する気力を残っていなかった。

「同病相哀れむ」の気持ちは、余麗卿の身に残っている中国文化の伝統であるように見える。それをもって、彼女は社会主義対資本主義というイデオロギーの対立を超えて、中国人を一体化に捉えることができたと言えよう。一方、余麗卿の無力に象徴されるように、こうした伝統文化がすでに崩壊し、実際に機能することができなくなった。現に極限の生存状態に追い込まれた難民たちは、「同病相哀れむ」どころか、暴力をもって同類を攻撃しかねないのである。

香港の居住民がみな乾くあまりに夏の犬のように舌を出して喘ぐ日が来るだろう。彼らは鳥の爪のような腕を伸ばして水と食物を奪うだろう。「水」、「腹が減った」と叫ぶだろう。彼らの皮膚はゴムのようにむくみ、コレラは彼らを顔が黒くなるまで下痢させるだろう。そして、これらの難民たちは山頂に駆け込み、すべての金持ちを別荘から引っ張り出して海の中に放り込む日が来るだろう<sup>122</sup>。

白先勇は香港を通して見えたのは、瀕死の状態に陥った伝統文化と人間の心の闇、罪悪が暴走しかねない現実という重層に重ねた中国像であった。しかし、六〇年代に香港が世界にアピールしたのは、白先勇の作品におけるような様相とは対照的であった。国際貿易自由港、資本主義社会のショー・ウィンドー、オリエントの真珠、買い物天国、東西の風情を兼ね備えたロマンティックな都市…、樂園香港は最も美しい桂冠を独占していた。毎年数多くの香港を訪れる者が見聞したのは日常のこまごましたものとかけ離れたモダンな建築、清潔な街道、秩序整然の交通と豊富な商品などであり、非日常の享楽に陶醉する中で、この魅力的な異国の都市の裏の一面を知ろうとする者はあまりいなかっただろう。

白先勇の作り出した、この見た目はたいへん美しいが、実は体の芯から腐りつつあった余麗卿という美人形象は、香港のこうした表と裏をうまく反映したものであると同時に、危機状況に置かれた中国の縮図でもあった。

### 三 「香港——一九六〇」における自己

さらに、白先勇がもつ、香港から大陸中国を眺め、中国を感じ、そして中国を描くという視角は彼個人の経歴と深くかかわっている。香港は、当時の西側のメディアや政府機関にとって、中国を知るための窓口であった。しかし、白先勇にとって、香港はそれ以上にはるかに特別な意味を持っていた。香港に関する創作は実は彼個人の人生体験とは切っても切れない関係にあったのである。

白先勇は香港に一九四九年から一九五二年まで三年間を過ごした。彼が後年述懐するように、それは彼にとって非常に重要な三年間であった。白先勇は子供の時代四年間ほど肺炎に罹り、周囲から隔離されて孤独な少年時代をすごした。病気が治ったあと、学校に戻ることができたが、また戦乱が続いていたせいで何回も転学を強いられ、落ちづいて勉強することはできなかった。彼が本格的に勉強し始めたのは香港においてであった<sup>123</sup>。

一九四九年、国民党が大陸から撤退するとともに、白先勇の両親は台湾に移り、上の二人の姉はアメリカに赴いて、白先勇自身は三番目の姉と一緒に香港で三年間を過ごした。家族離れ離れになった生活は少年白先勇にとって緊張を伴ったものであったが、それ以上に病気が全快したあとに隔離された世界から普通の生活への適応の難しさであった。白先勇はそのときを回想して、

病気が治癒したあと、世間に戻ったが、まったく適応することはできなかった。あたかも長年囚われた鳥が籠を出たように、驚き慌ててどうしてよいかわからず、羽があっても飛べなかった。小学校と中学校の生活は、私にとって、緊張の連続であった。<sup>124</sup>

しかし、まさにそうした緊張の中においてこそ、少年白先勇はそれまでにない寛容さを香港での学校生活で感じ取った。

九龍塘小学校はわりあい有名な学校であった。校長の葉不秋先生はとても厳しく、私たちの学業を重んじていた。先生たちはみなとてもまじめであった。そのとき私は五年生だった。毎週立ち上がって広東語でテキストを暗誦をしなければならなかった。それは私にとって最悪のことだった。広東語でちょっと話をすることはできたが、テキストの暗誦はできなかった。しかし、先生はとても優しく、私に標準語で暗誦させた。そのことは現在でも強い印象としてある。<sup>125</sup>

白先勇にとって、香港の先生は、一方では厳しく、まじめであった。毎週の暗誦をサボることはできなかった。しかし、他方では、非常に寛容であり、けっして広東語ができないからといって冷遇することは無かった。のみならず、外来である自分の作文がよければ、ほかの人と同じように教室の壁に張り出される。このように、香港という新しい場所は彼にたくさんの不思議と好奇を与えることとなった。ここでは、白先勇は病気に罹ったときと同じように、親と離れ離れになっていたが、彼が接した世界はそれによって狭くなったのではなく、むしろ学校の生活を通じて多くの新鮮な体験を得ることができた。

白先勇がのちに「台北人」シリーズの「那滿天亮晶晶的星星」において、同情をこめて、国語ができなかったために、時代によって捨てられた、というある無声映画時代のスターの悲惨な運命を描いたのは、香港での少年時代の体験とは無関係ではなからう。

病気によって隔離された生活を強いられていた白先勇にとって、香港は彼が貪欲に知識を吸収する格好な場所となった。白先勇は、冬休みや夏休みになるたびに、小説の世界に没頭し、五十何巻もの伝奇小説『蜀山剣侠伝』を何回も繰り返し読んだほどの文学好きの少年であった。また、そこで受けた厳格な中国語教育は、彼の創作の堅実な基礎となった。

以前の香港は中文教育を重視していた。国語の先生は基本の訓練を重んじ、暗記することを要求していた。……そのとき私たちは主として英文の本を読んでいたが、中文の先生はやはり暗記を重視していた。私はまだそのときの様子を覚えている。ある年をとった国語の先生が、「琵琶行」を教えるときに広東語で読み、非常に気持ちよく聞けた。「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟」。私はそれを聞いてとても好きになり、詩をしっかりと暗記した。<sup>126</sup>



白居易のこの詩はただ響きのよい詩として白先勇の記憶に残ったのではなかつたらう。「同是天涯淪落人、相逢何必曾相識」、詩人は歌姫の困苦した運命に自分の左遷された処遇を重ねた。それに白先勇が自分の人生とディアスポラの故郷としての香港を重ねたに違いない。自身故郷を離れた亡命客として、また、香港での三年の滞在経験の中で、白先勇自身とその身の回りには、多くの離散する悲劇が繰り返されている。白先勇と同じように大陸から香港に逃げ込んだ七十万人は七十万曲の哀歌でもあつた。のみならず、歴史的に避難の地として名を知られている香港は、近代以降も、絶えず翻弄され、孤立無援の苦難を嘗め尽くした<sup>127</sup>。そのため、「琵琶行」の現代版は香港社会に満ち溢れているといつても過言ではなかつた。

七十年代後期、白先勇は香港で、大陸から香港に密航し、「北斗人」という筆名で文革の真相を暴いた元紅衛兵たちに会つたことがある。白先勇は彼らの心境に自分を重ねて、次のように述懐した。

「毎依北斗望京華」、「北斗人」の哀悼の気持ちを私はよく知っている。三十年余り前に、私も同じ道をたどつて香港という島に到着したのである。ただし、私は船に乗っていたので、危険を経験しておらず、彼らよりずっと幸いだつた。しかし、私は故国を離れて、今日に至っている。心の流浪はいまだに落ち着くことはできずにいる。以前、辛棄疾の「菩薩蛮」を読んで非常に感動した。それはおそらく詞のなかで歌われている屈辱的な離散による悲しさと乱世への哀嘆のせいだつたからだろう。宋人が南に渡つた当初、金兵が隆佑皇太后の御船を追つて造口に至り、及ばずに帰つた。幼安がこれより興つた。もし詞の中における郁孤台を九竜の宋王台に変えれば、この詞はあの晩私が香港にいたときの心境の写実であつたのである。<sup>128</sup>

ここで述べられている辛棄疾の「菩薩蛮」は、詩人が一一七六年に造口を経由するとき、その四〇年前に金兵が江西西部を侵したことに触発されて書いた詞であつた。

「郁孤台下清江水，中間多少行人淚。西北望長安，可憐無數山。青山遮不住，畢竟東流去。晚江正愁余，山深聞鷓鴣。」

「郁孤台」とは、宋朝が南に渡つたときの最初の落ち着き先の造口であつた。辛棄疾は南宋の臣下として、また国と民を憂う伝統的な知識人として、この南宋の苦難の象徴的な地において、歴史を思い出し、現実を憂慮せずにいられなかつた。それから千年近く経つた二十世紀半ばごろ、あたかも歴史が再現したように、中国の知識人たちが戦火に追われて香港に至り、南宋の最後の皇帝が海に身を投じた宋王台に身を置くと、辛棄疾の場合と同じような思いを感じざるを得なかつた。そのような雰囲気の中で生活していた白先勇

は、彼の体験がその作品に見られる歴史感覚の重要な基礎となった。

したがって、香港は白先勇にとって、ただ彼の中国語の教養を養成する場所だけを意味したのではなかった。彼はそこで歴史と現実との重なり合いを体験し、その作品における歴史感覚を研ぎあげた。また、彼が香港という地で養われた「同是天涯淪落人、相逢何必曾相識」の感覚は、彼を地域の差、イデオロギーの対立から近現代の中国人を理解するという仕方を越えさせ、独特な香港、中国像を描き出させている。

実は、現代中国文学においては、香港は常に描かれているホットポイントの一つである。白先勇の大学時代の恩師であり、白先勇に文学の道を歩ませた夏済安は「香港——1950」という詩を著したことがある。この詞は一九五〇年香港で創作され、一九五八年八月の『文学雑誌』第四卷第六期に掲載された。白先勇は自らの作品「香港——一九六〇」の中で、夏済安の詩に出てくる香港要素——たとえば、あちこちに入り込む歓迎されない蟻、きれいだが人を驚かせるケシの花、英国の支配などなどを取り上げていて、夏済安からの影響を示唆しながら、夏氏と違った香港像を描いた。

その違いはまず、時代によるものであった。夏済安の描いた香港は「大陸から去ったばかりで、朝鮮戦争はまだ起きていなかったが、大局は非常に混乱していた」という背景にあり、まるで推測することのできない大きな賭博場のようなだった。香港に避難して来た上海商人は、明日が訪れてくるか否か、待っている人が来るか否かを知らないまま、賭博場で商人としての聡明さと資本を失いつくした。社会中が落ち着かず、すべてが未知であり、揺れ動いていた。上海の商人たちも、この賭博場で正真正銘の博徒になっていくか、それとも宋玉台の歴史を忘れず、再び事業を起こすかを知らずにいた。

それに対して、白先勇が描いた六〇年代の香港は、すでに見てきたように、美しい衣裳を着た瀕死の病人のようで、すべての期待が絶望に変わっていた。主人公余麗卿の言うように、「私には将来が無い。私は次の一分間のことさえ考えない。」もし夏済安の詩における香港が混沌であり、未知の世界であるとすれば、白先勇の小説においては、香港はすでに変化しようが無く、死を待つだけだった。

さらに、以上の時代の変遷によってもたらされた違い以外に、夏済安の詩において、香港は上海と相対する存在であり、両者の間の差異がはっきりしているが、それに対して、白先勇の小説において、大陸と香港との間は隔たりが見られないだけでなく、両者はむしろ同病相哀れむ兄弟であった。一方は致命的な病にかかった患者であり、他方では体中毒が拡散した瀕死の者であった。現実では、冷戦による東西両陣営の対立により、香港と大陸中国とは、人員の往来が絶たされ、イデオロギーの面においても、社会的発展においても、五〇年代よりはるかに大きな隔たりがあった。にもかかわらず、白先勇はそうした歴史的状況の中においても、香港の本質を見抜くことができた。このような感性は彼の少年時代の香港での体験とけっして無関係ではなかった。

香港での体験のほかに、白先勇の現代中国に対する認識は、さらに彼の台湾やアメリカでの実体験と深くかかわっている。一九五二年に、白先勇は香港から台湾に赴き、台湾で

大学を卒業した。一九六〇年三月、台湾大学の外国語学部に在学中の白先勇は、クラスメートと一緒に雑誌『現代文学』を創刊して、西洋のモダニズム文学を紹介すると同時に、旺盛な文学創作を始めた。後年、白先勇は『現代文学』の創刊背景について回想するとき、自分を含めた台湾における大陸から来た者の子弟が直面した苦境を次のように説明している。

外省人の子弟たちの苦境とは、大陸での歴史の功罪に対して、私たちはいかなる責任も負わない。なぜなら私たちがみな年少だった。しかし、大陸での失敗による悲劇的な結果を、私たちは私たちの父兄たちとともに背負わなければならない<sup>129</sup>。

すでに消え失せた古い世界の桎梏に束縛されるという圧迫感は、若い白先勇と同世代の若者たちに付き纏っていた。国民党政権が台湾に進駐したあと、「反攻大陸」を唱え、しばらく故郷に帰りたい人たちの期待を満足させたが、時間が経つにつれ、人々は自己の利権を確保し、異分子を抑圧する強権政治を行う政府に次第に自信を失うようになった。しかし、「反攻大陸」は実現できない夢であり、過去のすべてが再来することができないとはわかっていても、高压の政権の下で、敷かれた軌道からはみ出そうとすることは決して容易なことではなかった。白先勇と同世代である五、六〇年代の台湾の若者たちは、まさにこのような閉塞の状況の中で、まるで桎梏を掛けられたように、目に見えない力によって、希望の無い暗闇に引き込まれていくようだった。このような桎梏は、「香港——一九六〇」の中の主人公余麗卿の中にも容易に見出すことはできる。大陸から香港に逃げた彼女は、いつまでも国民党軍の師団長の夫人という身分から逃れられず、処刑された彼女の夫の魂がいつまでも彼女に付き纏っていた。

このような桎梏による束縛から脱け出すために、白先勇は自立と自由を求めるためにアメリカに脱出した。しかし、彼のアメリカでの体験は彼により大きなショックを与えることになった。もっとも象徴的なことは、第2章で触れた、ある夏休みの日に白先勇がニューヨークのLittle Carnegie Hallで、外国人によって撮影された中国歴史の映画を見て、「はじめて国家や家庭の滅亡による彷徨をしみじみと感じた」という体験であった<sup>130</sup>。

彼は生々しい映像で伝わってきた悲惨な中国の近現代史に一体感を感じつつ、他方では、自分はこの歴史からはじき出された一員であり、もはや関わることはできないと意識したに違いない。中国人としてのアイデンティティに目覚めた瞬間にそれを喪失してしまったという衝撃的な体験を経験して、白先勇は自分の思い描いた中国像の崩壊、そしてそれに対する自分の無力さを表現するようになったのである。「香港——一九六〇」に見られた「同病相哀れむ」という連帯感の崩壊、そして束縛から抜けず、身動きの取れない主人公がその崩壊に対して何もできないという無力感はまさにそうであった。こうした作者自身の中国像と現実の中国との衝突による彷徨は、その後の「紐育客」シリーズの作品によって受け継がれた。

ほぼ一年後の一九六五年二月に発表された「火島之行」のなかでは、「香港——一九六〇」からできた中国のイメージに対する白先勇の戸惑いが早速現れた。

主人公の「私」はニューヨークで裕福な生活をしている三十代の華人男性である。性格が温和であり、人をよく助けるため、華人の社会で非常に持てる男である。真夏のある日、熱心な「私」がいつもと同じように、ニューヨークに遊びに来た三人の女性を接待して、彼女たちのガイドをつとめた。この三人の華人女性の中で、香港から来た女性ははじめて会った者である。主人としての私は渾身の術を使って三人の、中でも香港の女性の好感を得ようとした。しかし、結果は惨めだった。「私」は喜怒無常の香港の女性をはじめとした三人の女性にからかわれ、翻弄され、死にそうな羽目になってしまった。

「火島之行」における香港から来た女性の人に逼る勢いと見通しのつかない気性は、「香港——一九六〇」の中で描いた瀕死で、無力な余麗卿とはかけ離れていた。その背景には、「火島之行」が創作される前の一九六四年十月に、中国原爆実験の成功による世界に対する衝撃を思い出させられる。目まぐるしく変化する中国の現実に、白先勇は絶えず自分のなかの中国像の見直しに迫られた。

## 第5章 中国の喪失と自己放逐の精神

### 一 「流浪する中国人」

前章で見てきたように、白先勇がアメリカで創作した五つの作品のなかにおける主人公は、いずれも中国人であるにもかかわらず、中国と関われない、という共通した特徴を持っている。「シカゴの死」における呉漢魂は、自分が中国人であることを証明できないし、「香港一九六〇」における余麗卿は、自分を取り囲んだ中国からの幾重もの危機に対して、病膏肓に入った体を動かさず、危機から脱出できなかつた。主人公が直面した最大の危機は自己のアイデンティティである「中国」から隔絶されていたことである。彼らは、結局、自分を救えずに、無力のなかで死んでいった。この時期の作品に見られるような「中国」に対する主人公たちの無力さは、白先勇の心情を表すものでもあったと言える。

しかし、この後、白先勇は「紐育客」シリーズの創作をはじめ、彼の「中国」への探求も一つの新しい段階を迎えることになった。シリーズの第一作である「謫仙記」（1965年）そのことを象徴している。作品のなかの主人公李彤は、それまでの無力で蒼白な主人公と鮮明な対照を成した。白先勇は、若くて美しい李彤の輝きから消滅という激しい人生を通じて、主人公が危機に対して抗争し、自分の運命を努めてコントロールしようとした不屈な姿を描き出した。

「謫仙記」は、主人公李彤の親友の一人である黄慧芬の夫、「私」の口から述べられた物語である。「私」の妻黄慧芬はアメリカのマサチューセッツウェスリー女子大学の卒業生である。「私」はいつも妻から、彼女自分と李彤をはじめとしたほかの三人の親友が昔どんなにはでやかであったことを聞かされていた。四人とも権勢をもつ家柄だったが、李彤の家が一番の資産家であり、李彤自身も四人のなかでもっともきれいで、目立っていた存在であった。1946年四人がアメリカ留学のために上海の空港を発つとき、空港で輝いていた。

大学においても、四人は人目を引いた存在であった。服装で人を判断するウェスリーでは、とくに李彤はその抜群の着こなしでウェスリーの名人となり、「メイ・クィーン」に選ばれた。

しかし、ウェスリーでの後の二年は、四人の順風満帆の生活は中国国内の内戦によってつぶされた。なかでも李彤の両親は、戦乱で船に乗って上海から台湾に向かう途中遭難し、家財とともに海に沈んだ。大きな打撃を受けた李彤は倒れて、退院した後に沈黙に変わった。卒業の時に、彼女はようやく昔日の談笑に戻ったが、もう可愛らしさがなくなっていた。

李彤は確かに美しかった。「私」の目からすれば、彼女の美しさは、「海の中からにわかに躍り出た太陽のように、全身から放たれた光が人の目を痛いほど刺す」<sup>131</sup>のだった。しかし、男性との交際や、マージャン、競馬などのときに見られる彼女の無頓着なわがまま、

けっして負けを認めない傲然とした態度は日増しに強まり、友人たちと遠のけていく。時間が経つにつれ、「私」は、李彤が何かに束縛され、しだいに憔悴していくのを感じ取った。

1964年の年末のある日、李彤の親友たちおよびその家族が団欒したところへ、李彤がベニスで水に投じて自殺したという報が届いた。この訃報は爆弾のように「私たち」の平穏で幸せな生活を襲った。

白先勇はこの作品に「謫仙記」というタイトルをつけた。「謫仙」とは、人間界に流された仙人、という意味であり、ここでは、李彤の超俗的気品、孤独さを表すものとして用いられていると考えられる。後に、この小説は中国大陸の著名な映画監督謝晋によって映画化され、『最後の貴族』というタイトルに変えられた。「謫仙」にしても、「貴族」にしても、白先勇が主人公の李彤にかけての思いは並々ならぬものではなかった、と感じさせられる。

## 二 先行研究に指摘された逆らえない力

「謫仙記」は数千字足らずの短編だが、白先勇の代表作の一つとして位置づけられている。小説は発表された後、大きな反響を起こした。なかでも、李彤の死の原因は、常に読者と批評家たちが注目する中心であった。あの超凡な気質を持つ美しい李彤は、なぜ自殺しなければならなかったのか、何が彼女を追い込んだのか、をめぐって、従来、研究者の間の議論的であった。

小説のストーリーが展開される背景からわかるように、李彤の大きく変転した運命は、興隆から混乱、衰微していく民国の歴史と密接に関連している。この点に注目して、李彤の悲劇を歴史の要素から捉える研究は少なくない。例えば、劉登翰は、李彤の両親が乗った船が遭難したことは、偶然の事故による不幸ではなく、それは「逆らえない歴史」<sup>132</sup>を象徴することとして捉えている。船が沈んだのは「中国現代史上の大きな事変を象徴しており、…そのことは、李彤『たち』が自分たちをひけらかし尽くしていたすべての政治的と経済的基礎を根底から変えた」<sup>133</sup>。したがって、監督謝晋が『最後の貴族』の悲劇は社会的な原因に求められるだけでなく、それよりも、悲劇は人類自身の矛盾によって引き起こされたものである」と述べているのに対して、劉登翰は、逆に、「李彤の運命の悲劇は、なによりも社会による悲劇であり、彼女個人の性格の要素はその次である」<sup>134</sup>と主張した。

小説のなかで、歴史の要素は、李彤の両親が遭難した部分以外に現れていないが、しかし、それが伏線として終始一貫著者の白先勇によって意識されていることは間違いない。李彤の悲劇は歴史によるところが大きいという指摘は的確だと思われる。李彤たちが留学した1946年は、長年の戦争の苦難に耐えてきた中国が勝利国の一角として米英ソ等の大国と肩を並べるようになった。しかし、そうした勝利の喜びもつかの間、国民党はやがて内戦で共産党に敗れ、台湾に敗退した。百万人あまりもの大群れが国民党とともに台湾海峡を渡った。しかも、帰郷するという願望も厳しい現実のなかでしだいに幻想へと変わっていき、大陸からはじき出された人々は大陸と隔絶されたままだった。国民党の高官と

いう父親を持つ李彤にとって、抗日戦争後の中国の歴史は彼女の人生を左右する重要な要素であったのは言うまでもない。しかし歴史の翻弄は李彤の悲劇の重要な外因ではあるが、李彤を死に追い詰めた根源的なものではない。なぜなら、李彤に限らず、彼女の親友たちの家も戦乱の打撃を受けていたし、両親を失った李彤にとって、その打撃はより深刻ではあったが、卒業した後の彼女の生活は脅かされていたわけではなかった。彼女の自殺は結局、彼女自身の性格に求めざるを得ないのである。

李彤の死を主として歴史と社会に原因を求める劉登翰は、白先勇が伝えようとする人間の抵抗問題を見落としたのではないか。それに対して、同じ大陸の研究者である劉俊は、李彤の運命における歴史の要素に目を配りつつも、むしろ李彤の個性に注目した。親を失った後の李彤が性格が大きく変わったことについて、劉俊は次のように評価している。

彼女に見られるこのようなあまりにもわがままで、情理にもとるといひねくれた行為の背後には、彼女が与えられた運命に対する不屈な抗争という執念が働いていた<sup>135</sup>。

ここでは、「不屈」という評価は李彤の性格の本質をついたと言える。李彤は、彼女の親友たちのように与えられた運命を受け入れ、それに適応していくことはできなかった。彼女は妥協を許せず、抗争してやまなかったのである。劉俊が小説から読み取ったのは、白先勇が李彤に対する深い同情であった。劉俊は、「李彤の『過去』への執着と運命への抗争のなかから、白先勇は人が運命に対して屈服に甘んじないことと、そのなかから顕れて出てくる人性の尊厳をえぐりだした」<sup>136</sup>と評している。しかし一方で、劉俊からすれば、白先勇がこの「謫仙記」と次章で取り上げる「謫仙怨」とを通して表現しようとしたのは、「人間が運命の前で（抗争して）失敗したことに対しては、同情を傾注する以外、誰もこのような『失敗』に対して手伝うことはできない」<sup>137</sup>ということである。言い換えれば、劉俊は白先勇の苦悩、苦痛の根源を運命の絶対的存在にあると受け止めていた。この観点は、歴史要素を決定的なものだと主張する劉登翰の考えとは共通している。両者とも逆らえない力—歴史か運命かに潰されたことに、李彤の死因を求めた。その結果、彼らの目には、白先勇の人生観が消極的なものとして映り、歴史の無情や人生の無常を表現する「滄桑感」、あるいは人間の滅びる宿命を憐憫する「悲憫の気持ち」によって語られた。

確かに白先勇は、歴史に翻弄された李彤の人生という悲劇を通じて、歴史の「滄桑感」を表そうとしたという意図があった。彼は謝晋監督との対談のなかで、自分の作品における「滄桑感」が文革を経験した中国大陸の読者によって理解されていることに触れ、「難儀（折騰）されたことのない人は、人間社会の滄桑を感じることはできないであろう」<sup>138</sup>と述べた。つまり歴史の無情、人生の無常を感じさせた事件を経験した人は、はじめて「滄桑感」を分かるのである。しかし、李彤の感じた「滄桑感」は一体どのようなものであろう。白先勇の憐憫は、はたして単に人間が逆らえない力につぶされることへのものであろうか。

### 三 華人社会における連帯感の崩壊

小説のはじめに、李彤とその三人の親友が初めて登場したとき、輝かしい存在であった。

…彼女たちが一緒に出国するあの日、期せずして赤いチャイナードレスを着ていた。四人が集まると、まるで一面の赤い霞のように、上海竜華空港を明るくした。四人が見つめあって、思わず笑い転げた。李彤は自分たちが「四強」だと言い出した。——第二次世界大戦後、中米英ソが「四強」だった。李彤は自分が「中国」だと名乗った。自分のドレスの色がもっとも艶やかだからだというのだ。…空港内は四人の親戚や友人でいっぱいだった。およそ百人あまりもいた。彼女たちが飛行に乗り込む前に、振り返って手を振ると、空港中にハンカチが振られ、まるで蝶がいっぱい舞っているようだった。

著者の白先勇が、李彤たちが留学に旅立つ年を1946年に設定したということから、白先勇の作品における歴史要素の重要性が窺える。もっとも輝かしかつた李彤は、「中国」の象徴でもあった。中国は長年の抗戦によって、ようやく「惨勝」をもって中国近代史上ほとんど唯一とも言える明るい時期を迎えられた。この一瞬の輝きのあと、中国はその後またたちまち全面的内戦へと突入して、再び混乱に陥った。このような激動した歴史が李彤の運命によって暗示されていると思われる。

そのような歴史の激動に左右されたなかで、李彤たちの運命も大きく変転することを強いられた。戦乱から逃れるために台湾に赴く途中で遭難した両親の死の報に接した李彤は倒れ、彼女の親友たちも同じく戦乱の打撃を受けた。李彤をはじめ、みんなこの戦乱によって故郷に戻れず、海外で「流浪する中国人」になった。白先勇は李彤らについて、

流浪する中国人は、常に恐怖の脅威から逃れられず、前途が予測できないまま絶えず逃亡している<sup>139</sup>。

と述懐している。李彤たちはもはや自分たちが意気揚々とあとにしていた中国へ戻ることはできなかった。このような根を失ったという喪失感常に彼女たちを恐怖に陥れていた。とくに李彤の場合、彼女は幼いころから自分を甘やかしてきた両親まで失って、一夜にして天涯孤独の身になった。李彤と彼女の親友たちはみなそうした喪失感の恐怖から逃亡しようとした。しかし、作品のなかで、彼女たちはそれぞれ異なった方法をとっていた。

まず、李彤以外の三人は、過去の記憶に逃げ込み、周囲の古い友人たちといっしょにいてことによってかろうじて過去を取り戻そうとした。彼女たちにとって、故郷は輝かしい過去への追憶のなかにしか存在しなかったからである。

黄慧芬は「私」に対して、彼女たちがウェスリーでのしゃばりの時代だけを話したが



り、旧い友人たちを離れたくないことを理由に、ニューヨークに常住することを「私」との結婚の条件の一つとして挙げた。黄慧芬からすれば、「旧い友人たちがみんなニューヨークで仕事をしているため、ニューヨークに住むことで初めて外国に住んでいるという感じがしない」のである。

ニューヨークでの最初の一、二年の生活マンハッタンの地下鉄のような忙しさであった。昼間は仕事を先を通い、夜、家に戻ったら、慧芬はすぐ友人たちに誘い出される。週末の二日間はいつも宴会で埋められ、日程は一、二ヶ月前からすでに決まっていた。このようなめまぐるしい生活は興奮剤のように人を刺激し、慧芬たちは、このような耐えがたい忙しさをもって自分たちの喪失感による空虚さを埋めようとしたのだろう。結局、慧芬はついにひどい不眠症にかかった。私は強制的に家をニューヨークの郊外バッファローに引っ越した。しかし、バッファローでの静かな生活は慧芬にとって、絶えられないことであった。六年後に、慧芬の強い意志で、「私たち」はまたロング・アイランドに引越して、ニューヨーク戻ることになった。慧芬は「私」に警告した：「もし私がまだ Buffalo に住むなら、彼女は一人で（私たちの子）莉莉を連れてニューヨークに連れ戻り、前と同じように会社に勤める。彼女は（今の生活より）むしろニューヨークに戻り不眠症にかかったほうがましだ」った。慧芬は新居に引っ越した最初の週末に、旧友たちを招待して盛大な宴会を開くことを決めた。

「ひどい不眠症」をかからせた旧友たちとの付き合いと、静かだが、うっとうしくて退屈な郊外の生活との間に、黄慧芬はあえて前者を選んだのである。故郷の喪失、心の空虚は、黄慧芬にとって、不眠症よりずっと大きな脅威であったのである。

では、李彤はどうだったのだろうか。彼女も喪失の恐怖から逃亡しようとした。しかし、李彤は黄慧芬たちのように強いられた運命をそのまま承認し、それに順応する道を選ぶことはできない。「謫仙」である彼女の性格からも運命による強制を甘受することを許せない。李彤は抗争するのであった。

李彤は依然として魅力に満ちており、周囲の注目の的であった。しかし、彼女は昔のようにちやほやされるのを楽しむのではなく、むしろ周囲と相容れられなかった。妥協しない彼女のとった行動は、周りから見れば奇矯であり、受け入れがたいものであった。

黄慧芬の結婚のあと、ほかの二人の親友も相次いで結婚相手ができただけに対して、李彤だけが絶えずボーイフレンドを変えていた。彼女はマージャンをやるとき、大きな役でしか狙わなかったため、結果はいつも散々だった、また、みんなで競馬に行ったとき、みんな競馬の玄人、李彤のボーイフレンドである香港商人鄧茂昌の薦めに従って本命に賭けたが、李彤だけがあえてアドバイスを聞き入れず、本命でないものにしか賭けなかった。結局、李彤だけが大きく損した。にもかかわらず、鄧が自分の言を聞けば損することはなかったと言ったのに対して、李彤はむきになって、「私がどうしてあなたの言うことを聞かなければいけないの？私がどうしてあなたの言うことを聞かなければいけないの？」<sup>140</sup>と切り替えた。彼女は常に決められた道に従うことはできず、従順ではありえなかったのである。

李彤のこのような激しい性格に、彼女の回りの「正常」な人たちがついていけなかった。李彤に好感をもつまじめな周大慶は、彼女の前では堅苦しくて対応に窮していた。李彤は孤独だった。親友のひとり張嘉行の盛大な婚礼で、新婦の介添えであった李彤は、あまりの息苦しさに抜け出した。彼女に必要なのはシャンパンではなく、きつい酒であった。李彤は、彼女の親友たちが努めて營造し出した歓楽の雰囲気には溶け込むことができなかつたどころか、それが彼女に「息苦しき」を感じさせるものであった。

李彤が過去を思い慕う気持ちは黄慧芬たちに劣らなかつたはずだった。しかし、彼女は過去に深い感情をもっている、もはや過去に戻れないことを自覚していた。その自覚の形成には、もちろん劉登翰が指摘した逆らえない歴史や劉俊が主張する人間の宿命などの原因が見られる。しかしそれ以外に、さらに重要なのは、李彤が自分と友人たちのすれ違いを意識したことである。すでに見てきたとおり、逆境に対する李彤の抗争する態度と黄慧芬たちの妥協する生き方は相容れないものであった。そのため災難が降りかかる前の、あの強い連帯感で結ばれた四人の世界は、もはや取り戻せないものとなってしまったのである。逆境を前に、抗争するあるいは妥協する、この二つの対立する生き方の絶えない衝突が李彤と友人たちを引き裂いた。

白先勇は李彤と友人たちの間に見られたその衝突、分裂を通して、第二次大戦直後に形成された自分の中国に対するイメージ苦難を乗り越え、希望に満ちたという中国像の動揺を告白した。白先勇の苦しみは、中国の内部に存在したこうした解決のできない衝突、矛盾であり、中国人としての連帯感の崩れである。

#### 四 抗争意識への相反する感情

李彤の死は歴史や運命によるものではなく、彼女の意志表明による自殺である。旧友たちが自分の營造し出した世界の中に浸り、心の慰めを求めて、心の中の喪失感を解消し、忘れようとした時に、李彤は強いられた運命から逃れず、もがき、抗争し続けた。作品のなかにある李彤が踊るシーンがそれを象徴している。

李彤は体がうねり、回転がますます大きくなり、ステップもますます激しくなった。チャチャチャのリズムが、疾風のように長髪をひらひらとなびかせ、髪先に留まったきらきらと輝いた大蜘蛛のヘアピンが髪とともに躍動した。腰のベルトにつけてあった胡蝶蘭が振り落とされ、紫のマリのように床に転がり、踏み潰された。顔は上向いたまま、瞼を垂れさせながら眉をしかめて、魔の笛に操られたコブラのように体を大きく振り、体がばらばらになりそうなほどに、苦しそうに踊りまわった<sup>141</sup>。

しかし、歴史、運命に対する李彤の抗争は、ドンキホーテの挑戦のように無謀であり、抗争してもけっして自分の運命を変えることはできない。逆に自分が傷ついて落ちぶれて

いだけだった。彼女のわがままで奇抜な行動は、親友たちの袋たたきに会ったり、迷惑になったりした。彼女のことを好きだった「良い人」の周大慶は、ついにほかの人と結婚してしまった。また、李彤が「私」と黄慧芬の子の莉莉に母親が持たせてくれた嫁入り道具であったダイヤをプレゼントしたとき、「私」が、「莉莉が気に入ったなら、義理の娘にしたらどう」といったのを受け、「莉莉には黄慧芬という素敵なお母さんいるから、まだ私なんかを必要としているの？それに、私ってお母さん人なれるような人に見えるの？・・・」<sup>142</sup>と応じた。李彤は抗争のために払った代償はあまりにも大きかった。彼女は何もかも失っていた。李彤昔の世界に戻れないし、周囲の世界からも疎外されていた。同時に、彼女自身は妥協を許せないから自らを周囲から疎外したのである。そして、自殺は李彤の最後の抗争となった。白先勇が述べているように、

李彤は世間と妥協をしない、たとえ灰になるまで燃え尽きても。それは自焚であった。李彤の最後は、世界に対して降伏しないという表明であった。彼女の死はこのような意味合いを持っているのである<sup>143</sup>。

このような自分を傷つけても抗争し、絶望的ともいえる抵抗をした李彤に触れ、著者は主人公にかけた思いを次のように述懐している。

李彤は他人の憐憫に耐えられないし、他人の同情もいらない。何もいらない。彼女は自己放逐して、自分で世界を切り開くのである<sup>144</sup>。

李彤の短い人生を通じて、著者の白先勇は、単に中国文学における「滄桑感」を表現しようとするに止まらなかった。むしろ、歴史に翻弄される人間が歴史の無常を感じとるのみならず、自己放逐によって、抗争の意志を表明するという人間の意欲と主体性を表現し、たたえようとしたのである。したがって、運命に決して屈服しようとしなない孤高な李彤に対して、白先勇の思い入れは強かった。落ちぶれていった李彤に、白先勇は不屈な精神を見たのである。ここから、白先勇の、主人公の悲劇に対する心からの「悲憫」と、主人公のけっして屈服しない「謫仙」としての非凡な気品に対する敬服との両面を読み取られるのである。

孤独の李彤に、一人だけ理解者があった。それは作品のなかの「私」——陳寅であった。黄慧芬の夫として、陳寅は平穏な生活を送っているが、李彤があまり可愛くなくなったと感じた黄慧芬たちと異なって、彼は李彤に強く魅力を感じていた。李彤が友人のなかで孤立無援になったとき、陳寅はいつも李彤に肩を持った。周りにとって李彤の迷惑な行動に対して、陳寅だけが理解を持って受け止めていた。彼は李彤の強情と不遜をむしろ妥協しない意志の表明としてとらえ、敬服の目で見ている。李彤と黄慧芬の間の陳寅は、けっして一般に見られるような「三角」関係ではなかった。白先勇が述べたように、陳寅と李彤

との間は心を許せる関係であり、知己であった。作品のなかの「私」は、単にストーリーをまとめるための語り手ではなかった。白先勇と謝晋監督との対談のなかからわかるように、「私」にかけて白先勇の気持ちは並々ではなかったのである<sup>145</sup>。

実は、陳寅——「私」は白先勇でもあるのではないか。「私」は、表では、黄慧芬とともに周りの友人たちと同じように平穏な生活をしているが、内心においては、「李彤的な」衝動を強く秘めていた。そうでなければ、彼は李彤の奇矯な行動を理解することはできないであろう。

李彤の不屈な精神に共感すればするほど、「私」は李彤の死に大きな絶望感を受けた。李彤の死を知ったあと、「私」は「胸元に押さえられない焦燥を感じた」。この焦燥感は、おそらくこういうふうに理解できると思う。つまり李彤の不屈な精神にある種の可能性—中国性を「私」は見出した。しかしその可能性が現実の世界と衝突し、共存できないため、結局不可能（死）となってしまった。作中の「私」の焦燥、困惑は、中国にある種の希望を見て、また喪失してしまった白先勇の心情の写しである。

この点で言えば、白先勇は決して「悲憫」の気持ちだけをもって「紐育客」たちを描いたのではない。白先勇の心には、悲憫と不屈の二つの気持ちが激しく衝突していたのである。白先勇の次の言葉も彼自身が「紐育客」たちの困境を超越していなかったことを示した。

私は人物を書くとき、彼らと同じ水平線に立っている。彼らの困境は、私にもあると思う。私は人より高い位置に立って人を批判することをしていない。私から見れば、人に対する最後の審判は、人によるものではなく、神——（人）より高い主宰のみ、人に最後の判決を下すことができる。われわれ作家の責務は、人の困境、人の苦しみを映し出すことにある。私にとって、文学は説教ではない、芸術でもない。もし文学が読者の共感、同情を引き起こせば、文学者はすでに目的を達成した<sup>146</sup>。

白先勇は自分の描いた人物と同じ困境にあり、同じようにもがき、苦しんでいる。しかもその内面の衝突によるもがき、苦しみは、白先勇にとって大きな意味を持っている。

完璧な人間はいない。完璧は一種の理想に過ぎない。文学作品は人間が完璧への道を目指してもがくことを書くのである。もがいている中で、失敗のほうは多く、成功のほうは少ないが、しかし、少なくともその方向へ行く<sup>147</sup>。

この言葉から分かるように、白先勇は最終的に失敗に終わるかもしれないことを自覚しながら、もがくことの意味を積極的に受け止めている。もがくことから、白先勇は歴史や運命につぶされない人間の主体性を見出し、翻弄されるという人間の困境から脱出するかすかではあるが一種の可能性を見ていた。「紐育客」シリーズに綴られたのは、まさに白先

勇自身の中国に関する内面の衝突、もがくことの記録である。白先勇の「滄桑感」には歴史や時間だけではなく人間の意志のもたらした激変もあり、「悲憫」の気持ちのほか、内面衝突から生まれた人間のもがきへの敬服もある。李彤の性格、内面の世界に注目することによって、その作品に込められた白先勇の人生観が決して消極的ではない一面が明らかになった。

李彤という人物には、白先勇が恩師夏済安の姿を重ねたのではないかと思われる。

## 五 恩師夏済安の苦闘と無念

「謫仙記」は1965年7月に台湾で発行されていた『現代文学』第25号に初めて載せた。第25号の『現代文学』には、およそ雑誌の半分ぐらいのページ数で「夏済安先生記念特集」が組まれている。それは、この年の2月に脳溢血でなくなったアメリカ在住の中国作家夏済安を記念するためだった。特集は主として夏済安が創作した小説と西洋の小説に対する評論とが載せられていたが、特集のすぐあとに白先勇の小説「謫仙記」が続いた。注目されるのは、「謫仙記」というタイトルの前にさらに一ページが割られており、そこにまず目に飛びついたのは、頁の真ん中に書かれている、異様に大きなサイズの三つの文字——「紐育客」だった。さらに、その左下に陳子昂の詩「登幽州台歌」が書かれている：前不見古人、後不見来者。念天地之悠悠、独然愴然而淚下。

「紐育客」という三つの文字のサイズは、『現代文学』の歴史上またとない大きなサイズだった。それが陳子昂の詩とあわせて、読者に大きなインパクトと、異様な悲愴感を与えた。「紐育客」シリーズの一作目と位置づけられた「謫仙記」が、著者の白先勇が明言しなくても、恩師夏済安を失った白先勇の悲愴感が滲んでいる作品であったことは容易に想像できる。

白先勇と夏済安との師弟の縁は台湾文学史上の美談である。大学時代の白先勇の人生道を大きく変えたきっかけは、夏済安が編集した『文学雑誌』だった。

その出会いについて、白先勇次のように回想している。

ある日、台南のある小さい本屋で、私はカバーが色あせ、ほこりいっぱいだった『文学雑誌』を二冊見つけた。第一、二号だった。買って帰って読んでみたら、まるで詔勅を拝聴するようだった。……夏済安先生が編集された『文学雑誌』は私に西洋文学に対する情熱をもたせる架け橋であった。私は人生のなかできわめて重大な決定を下した：大学を受験しなおし、転じて文学を専攻する<sup>148</sup>。

白先勇はこのとき、台南にある成功大学水利専攻の学生であった。当初、白先勇は国のために三峡ダムを建設するという夢をもって、わざわざ台湾大学への推薦入学のチャンスを放棄して、あえて水利専攻を選択したのである。成功大学をやめ、台湾大学外国語学部

に志望しなおしたことは、白先勇が水利建設の夢に別れを告げたことを意味している。

しかも、成功大学を離れることは、自分の夢に合わせて、いっしょに台南に来てくれて、自由自在な大学生活の楽しみを分かち合っていた親友の王国祥をあとにすることもあった。情を重んじる白先勇にとって、この決断はけっして容易に下せるものではなかった<sup>149</sup>。王国祥との約束を破ってまで文学に転向するという白先勇の決断は、王国祥に対して白先勇が一生、心が咎めることとなった。

さらに、文学に志向することは、白先勇の親からも反対されていた。白先勇の回想によれば、父親の白崇禧は西洋の科学技術の成果にあこがれていたため、とくに自然科学を重視し、逆に、文芸を重んじない人だった<sup>150</sup>。白先勇が小さいころから、親にとくに可愛がられていたのは、勉強の成績が優秀だったためだった。兄弟のなかで、親に最も信頼され、期待されていた白先勇が文学の道を選択したことは、親の期待と背馳するものだった。それを熟知した白先勇は、両親と相談しないまま台湾大学外国語学部の入試に参加して、受かったのである。政治的生涯のなかで最も暗澹たる時期にあった父親に、台北に戻った白先勇が心の慰めとなったどころか、むしろいっそう嘆かわしさをもたらすこととなった。数年後、母親と死別した後、白先勇は晩年の父親と別れてアメリカに赴いて、「作家工作室」で創作を習った。彼が再び戻ってきたのは父親がすでに亡くなった後だった。白先勇の文学に従事するという選択は、同時に親に対する後ろめたさを伴っていた。

このように、作家になるという夢を追い求めるために、白先勇は理想を変え、親友と両親に感じる後ろめたさを耐えなければならなかった。逆に、夏済安に導かれた文学の道は、白先勇にとって、そこまで譲れない理由があった、と言える。

白先勇後年、自分の主導で創刊した『現代文学』の創立の背景について回想したとき、次のように述べている。

台湾大学外国語学部が、当時、無為の治だったため、私たちは文学活動に従事する時間が十分あった。幸いなことに、私たちは夏済安という、文学の造詣が深い導師に出会えた。私たちの文学創作に対する先生の指導は、私たちがその後の創作の基本路線を定めた。先生が編集した『文学雑誌』は、実は、『現代文学』の先駆である<sup>151</sup>。

では、夏済安とその『文学雑誌』は、どうして白先勇にとって、そんなに魔力を持っていたのだろうか。

夏済安は1916年生まれ。江蘇呉县人。1940年に大学卒業後、上海、西安、重慶、雲南、北京各地で転々と外国語の教員と勤め、1950年に香港の滞在を経て台湾へ。1959年まで台湾大学外国語学部で8年間教鞭をとり、その間、1956年に劉守宜、呉魯芹らとともに『文学雑誌』を創刊し、編集長を務めた。1959年にアメリカのファンダの助成を受けて渡米し、シアトルのワシントン大学、バークレーカリフォルニア大学などで教え、中国問題研究センターの客員教員、副研究員を務めた。1965年2月、脳溢

血でアメリカでなくなった。50歳の若さだった。

夏済安の一生は不遇だったが、彼が編集長を担当する『文学雑誌』は、白先勇にだけでなく、当時の一世代の若者に大きな影響を与えた雑誌であった。

『文学雑誌』の創刊号で、夏済安は「読者に告ぐ」を載せ、文学が現実に直面すべきだ、という理念を高く掲げた。

私たちは現実から逃避したくない。まじめな作者は、必ずその人の時代を反映し、その人の時代の精神を表現する人である、というのは、私たちの信念である。……私たちは文章の美しさを無視するのではない。しかし、私たちがより重要だと考えているのは、正直に語る、ということである。

権力とイデオロギーによって厳しく統制されていた台湾文壇において、「正直に語り」、時代と時代精神を表現することは、困難を極めた挑戦であった。夏済安およびその同志たち『文学雑誌』を創刊したのは、まさにそうした陳腐で閉塞な文壇に挑戦する勇気を持つ文学者たちに陣地を提供しようとしたのである。夏済安の呼びかけに、閉塞した台湾社会に身をおき、教条的で、硬化した情況に大きな不満を持つ者たちが応えた。後に台湾文壇に名を揚げた著名作家聶華苓、於梨華、王文興、陳若曦、歐陽子、叢蘇らも、みな『文学雑誌』の周辺に集まった。

白先勇の場合、彼の文壇への登場も夏済安という「伯樂」に負うところが多かった。文学を志向するという強い意志を持っていた白先勇が台湾大学外国学部に入學した後、最大の夢は『文学雑誌』に小説を載せることだった。しかし、書いたものを提出しても、学部の先生に推薦してもらえなかったため、挫折感を味わわされた。それでもあきらめなかった白先勇は、勇気を出して知音を求めに、ずっと憧れていた夏済安を訪ねた。結局、呈された作品が夏済安によって温かく迎え入れられ、『文学雑誌』に載せることとなった。その作品は白先勇が正式に発表した最初の小説——「金大奶奶」だった。それは白先勇が夏済安を恩師として仰いだ理由でもあったろう。

このように、夏済安とその『文学雑誌』に導かれ、白先勇を含めた多くの若者が文学創作の道を歩むようになった。彼らの多くは後に台湾の文学を代表する文学者として活躍した。しかし、多くの文学青年を育てた夏済安自身の短い一生は挫折に満ちていた。

夏済安は大学時代から文壇に登場し、作品を発表しはじめたが、彼の二、三十代の多くは、戦火の中で転々とした中で過ごした。戦乱の時代の中で、創作も難しかったし、創作したにしても、発表がもっと難しかった。台湾に落ちついた後、夏済安は、経済が不景気のなかで生活に追われながらも、文学評論や、小説創作、英文著作の翻訳などに取り組み、若者の文学創作に力を貸した。彼の精力的な活動を支えたのは台湾における中国文学の前途に対する強烈的な危機感と責任感であった。夏済安と親交のあった陳世驥が回想したように、夏済安が『文学雑誌』にかけた期待は大きかった。彼は台湾の新文芸創作を促成し、

中国文学研究の理論を推進しようとしたのである<sup>152</sup>。事実上、『文学雑誌』は国民党の「御用文学」である「反共文学」や「戦闘文学」に抵抗する者の障地として、文学を政治的宣伝道具として利用するという当時の文壇の雰囲気打破のために大きな役割を果たした。夏済安たちの努力は、当時の台湾において、困難を極めたことだけだけでなく、危険もともなっていた。1960年、『文学雑誌』が廃刊に追い込まれた。直接の原因は財務上の困難だったが、同時に、『文学雑誌』と深い関係にあり、同じくリベラルの色彩を持つ雑誌『自由中国』が、『文学雑誌』と前後して、国策に違反したという理由でつぶされ、雑誌社の社長雷震が逮捕された、という背景も、夏済安にとって、けっして他人事ではなかった。

その前年、夏済安は研究助成金を得て、アメリカに赴いた。彼は死まで再び台湾に戻ることはなかった。彼のアメリカでの生活は不安定だった。彼は固定した仕事もなく、台湾のパスポートは彼にいろいろな制約をもたらした。それでも夏済安は台湾に戻らなかった。それは統制が厳しくなる一方の台湾では、もはや彼が自分の夢を実現する場が残っていなかったからであろう。それにもかかわらず、夏済安は自分の理想を放棄することはなかった。アメリカにおいて、彼は中国研究に全精力を傾け、新中国の文芸と社会制度の研究に取り組み、人民公社や左翼文学運動に関する研究書を何冊も著した。

夏済安の境遇から、「謫仙記」における李彤たちの運命が容易に思い出されるだろう。つまり、彼らはみな中国に自己アイデンティファイしていたにもかかわらず、中国に戻れず、中国に強い関心を持っているにもかかわらず、中国に関われなかった。夏済安の弟である夏志清が語ったつぎのエピソードは、夏済安たちのそうした悲哀を物語っている。

一九六二年八月、イギリスで中国大陸の文芸問題に関するシンポジウムが開かれた。あるアメリカの学者が発言するとき、もし中共が郭沫若や沈雁冰をこの盛会に出席させることができれば、もっと理想的だと述べた。この発言は前置きであり、ジョークが込められていたかもしれなかったが、会議に出席したバークレーの中国問題研究センターの主任であった陳世驥は納得いかず、私たち学者の会議は、なぜ中共文芸のヘッドたちの出席が必要あるか、と問い質した<sup>153</sup>。

中共文芸に関する会議に当事者である中国大陸の文芸リーダーを招くことは、当時は現実的ではなかったが、自然な考えだったといえる。しかし、この冗談めいた発言は、中華民國の背景を持つ海外の華人学者にとって、耳ざわりであった。なぜなら、発言の言外の意は、会議に出席した陳世驥、夏志清は新中国を代表する資格はない、ということだと捉えたのである。しかし、陳世驥の激しい反論は、逆に陳たちの悲哀を表すものでもあったのではないか。すなわち、アメリカの学者の発言は、実は、海外にいる華人は中国という背景があっても、長期的に中国大陸から隔絶されたため、中国のことについてけっして外国人より多く知っているわけではない、という陳世驥たちの痛いところに突いたのである。夏志清の回想では、陳世驥は機会あるたびに、中国の文化を称揚し、けっして譲れなかった。しかし、よその者からすれば、彼らはすでに中国によってはじき出され、中国から隔絶された存在であった。実は、夏済安も当初、この会議に招かれた。しかし、彼はイギリ



スに上陸したにもかかわらず、中華民国のパスポートを所持していたため、結局、中国と国交のあるイギリスによって入国を拒否され、会議で発表することはできなかった<sup>154</sup>。

中国人であるにもかかわらず、中国にかかわれず、中国研究に畢生を捧げたにもかかわらず、中国について発表する自由を与えてもらえなかった。夏済安は台湾からアメリカに自己放逐したが、しかし、この自己放逐は彼により多くの自由を与えられなかった。夏済安の中国研究は現在も英文の文献に埋もれており、彼の小説も白先勇らの翻訳がなければ、おそらく中国を読む読者に読まれることはなかったであろう。畢生中国文学のために心血を注いだにもかかわらず、常に中国から疎外された夏済安は、ついに五十歳の若さでこの世を去ったのである。

夏済安たちのような悲哀は、たとえ新文化運動の旗手であった胡適でも免れなかった。一九四九年以降、アメリカに赴いた後、胡適はプリンストン大学の中国語蔵書部で閑職を得たが、夏志清が嘆いていたように、「胡先生がニューヨーク、サンフランシスコで出版される僑報の文芸欄の原稿を直す時間があるのは、奥様がマージャンをやって時間をつぶすこととはあまり変わらなかった」<sup>155</sup>。

夏済安に三年遅れて、同じくアメリカに「自己放逐」した白先勇は、夏済安たちの悲哀を身をもって感じていた。自分の恩師が最後の気力を尽して抗争しても、歴史に規定された運命の網を突き破ることができなかったのを目にして、骨身にしみる悲しみを感じずにはいられなかった。抗争すればするほど自分を追い込むことになる李彤に、白先勇は、恩師の執着、抗争に対する自分の敬意と悲愴感を託したのであろう。

## 第6章 暗闇の中での模索——「謫仙怨」

### 一 「台北人」たちの中国への反発と依存

「謫仙記」のなかで、白先勇は、民国とともに歴史によってはじき出された者に注目し、歴史の「裏」の世界を描き出した。そして追放された人々に対する「悲憫」と、これらの人々が忘れられていくことに対する危機感から、白先勇は自分の筆で彼らの歴史によって翻弄された悲劇的な運命を描きとめ、自分の文学で歴史の「裏」の面を後世に残そうとした。これは白先勇が歴史に対する抵抗の意思表示でもあった。「謫仙記」が創作された後の数年間、白先勇は「台北人」シリーズの創作に打ち込んだ。それは消滅しつつある「台北人」の世界を書き残そうという作者の強い危機感と責任感が伺えた。

「謫仙記」が発表された四年後の一九六九年三月、「紐育客」シリーズの二つ目の作品「謫仙怨」がようやく公刊された。作品のタイトルからわかるように、「謫仙怨」の「紐育客」シリーズの前作とのつながりが強く意識されている。すなわち、海外にいる「流浪する」「謫

仙」——中国人を対象にして、彼等、そして白先勇自身の精神世界を表現するものであった。さらに、「謫仙記」が故国に戻れない「謫仙」の悲劇と不屈な抗争を表現したのに対して、「謫仙怨」は、逆に、母親の影響から逃れたくても、母親を離れられないという怨みを表現した作品である。しかも、「謫仙怨」と同時に、白先勇は「台北人」シリーズの第八作目である「思旧賦」を発表した。「台北人」シリーズでずっと歴史という主題を追及した白先勇の意識は、「謫仙怨」のなかにも反映された。作品における主人公の母親によって象徴されているように、「台北人」シリーズの歴史主題が伏線として作品を貫いていた。

「謫仙怨」は、ニューヨークに住む若い中国人女性黄鳳儀の生活を題材にしている。前半は、主人公が母親宛に書いた手紙という形で展開している。

主人公の黄鳳儀は、母親にあてた手紙のなかで、もう独身の自分のためにアメリカ在住の中国人男性を探してくれるのをやめてほしいと頼んだ。なぜなら、昔のボーイフレンドがアメリカの女性に奪われたあと、自分はもう傷つけられたくないからである。また、中国の缶詰も送らないでほしい、自分はすでに中国料理を作っていないからである。母親に対して、黄鳳儀は、自分はすでに給料の高い、気に入った仕事を見つけ、もう留学生ではなくなった、と母親に自慢した。いま、自分の給料でとてもきれいなコートを買って、非常にモダンな女性に着飾っている。それだけでなく、ドルを仕送りして、母がマージャン遊びで親戚に借りた借金を返し、これからも思う存分マージャンを楽しめるようにすることができる。小説の後半では、主人公のニューヨークでの生活と仕事が明かされる。夜が訪れたなか、ネオンが輝く町で、母親に自慢したきれいなコートを着た黄鳳儀はある暗い地下のバーに潜り込み、そこで老練にバーンのママさんや、貪婪な客に対応していた。

作品の内容からわかるように、主人公の黄鳳儀は、矛盾と対立に満ちた精神的世界に生きている。一方では、黄鳳儀は母親の影響から逃れ、真の自由を享受しようとした。母親から絶えず送られて来た手紙や、中国の缶詰、そして、中国人の結婚相手を探してくれる努力は、主人公にとって、いずれも面倒くさく、耐え難いものであった。彼女はむしろ、逆に、中国人という身分を隠し、忘れようとしたからであった。母親に宛てた手紙のなかで、主人公は、自分がニューヨークが好きな理由は、ここで自分の身分を忘れることができるからだと書いている。

私はこの大都市を深く愛するようになった。……サングラスをかけてタイムズ・スクエアの人の波に押されながら歩くとき、見上げた摩天楼が一系列一列に後退していくのを見て、自分がちっぽけな存在だと感じた。この千万人もいる大都会に埋もれて、私はほんとうの自由を得たと思った。それは自分ひとりで行動し、誰にも注目されない自由である。……ニューヨークにいる最大の長所は、次第に自分の身分を忘れるところにある。私は、自分が完璧な紐育客とほんとうに思うようになった<sup>156</sup>。

「紐育客」になったことは、母親から自由になり、自分の身分を忘れることであること

を意味している。

しかし、他方では、紐育の人の波に埋もれて、自由を享受している主人公は、けっして母親の存在を煩わしくしか思わないではなかった。彼女はむしろ一生懸命仕送りをして、母親の生活と夢を支えようとしたのである。

手紙のなかで、黄鳳儀は小さいころのことを思い出しながらその理由を明らかにしていく。それは主人公が十歳ぐらい台北にいたときのことだった。母親に連れられて伯母の家に行ったとき、マージャンで大負けした母が、最後の勘定するとき、お金が足りなかったため、こっそりと伯母にお金を貸してもらった。あのときの母のへりくだった様子を見て、黄鳳儀はつらくて母を許せなかった。しかし、アメリカに行ったあと、主人公はしだいに母親の心境を理解するようになった。というのは、

おそらく伯母の家にいるときだけ、伯母の家の派手さや、京劇、マージャン、および伯母の家を出入りする人々だけが、あなたに暫く憂いを忘れさせ、昔の日々に戻らせることができるだろう<sup>157</sup>。

作品からわかるように、主人公の父親がいたとき、主人公の伯母の家よりも地位の高い国民党の高官であり、生活ももっと派手だった。しかし、父親がなくなった後、主人公の家も没落した。そのため、黄鳳儀は母親のへりくだった態度に強く屈辱を感じていたのである。母親が伯母の家で初めて過去の繁栄という夢に浸り、自分の体面と尊厳を見出せるのと同じように、主人公も、母親の体面と尊厳を支え、母親の夢を支えることによって、はじめて自分の生きる尊厳を見出せるのである。その意味では、主人公もその母親と同じように、あのすでに消え去った生活にしか自分の存在価値と尊厳を見出せないのである。娘として、自分の体を売り、自分の尊厳を売るまでして、母親が昔の夢に浸ることができるように仕送りをして支えたのは、母親の体面を支えるだけでなく、逆説だが、彼女自身の体面と尊厳を支えることでもあったのである。手紙のなかで、黄鳳儀は、

これは私が初めてお金を稼いで仕送ったのだ。思い切って使ってほしい。……ママは昔、いつも男の子を産まなかったことで、年をとったら扶養してもらう人がいない、という不運を嘆いていたが、でも、ほら、娘でもお金が稼げたら、同じことじゃない<sup>158</sup>？

主人公が母親に「思い切って使ってほしい」というときに、彼女の自立と自慢を感じさせる。彼女がニューヨークの暗闇に埋もれながら自分の尊厳を犠牲にして働いて、一生懸命母親を支え、母親と共有した夢に存した尊厳を維持しようとしたのである。

もし、主人公は「紐育客」だとすれば、直接作品に登場しなかった主人公の母親は明らかに「台北人」である。白先勇の「台北人」シリーズに登場した主人公と同じタイプの人物である。すなわち、栄華を極め過去をもちつつ、歴史の翻弄によって、はじき出され没

落した人々であり、厳しい現実と将来に希望を見出せないなかで、現実直面する勇気を失い、過去の記憶に浸り、虚妄の夢に自分の心の安らぎを求めようとした人々であった。前述したように、白先勇は「台北人」シリーズの作品のなかで、歴史によってはじき出された人々の悲惨な有様を描き、彼の父兄たちの世代の絶望的な精神世界を表現した。まさにそのような精神的な苦悶と抑圧を拒絶しようとして、白先勇はみずから「紐育客」になる道を選択したのである。しかし、黄鳳儀に見られるように、「紐育客」になったことは精神的な開放をもたらさなかった。黄鳳儀は母親を拒絶しつつも、母親のところにしか自分の尊厳と存在価値を求められなかったのである。主人公は、自由を得るために母親、母国に反逆し、その影響から懸命に逃れようとした。しかし、彼女は、一方では自由を味わいつつも、他方では、新しい道を見つけ、そこに新たな希望を見出すことはできなかった。そのため、主人公は自分の過去と断絶することはできなかった。彼女は自らの尊厳を売るまで自分と母親の過去を維持しなければならなかった。それは「紐育客」に運命付けられた「怨」でもあったのである。

実は、「謫仙怨」が『現代文学』に発表された一九六九年の三月に、白先勇同時に「台北人」シリーズの作品「思旧賦」を発表した。そのなかで、白先勇はもっぱら過去の世界に浸った幾許もない余命の「台北人」を描いたと同時に、彼らの子弟の群像を描き出した：荒廃した李家の庭にぼんやりと座っていた李家の若君、家族と決裂して市井で生きる道を求めるお嬢さん、家中の財物を盗み出して消えた若い召使いカップル。「謫仙怨」における主人公と同じ世代のこれらの若者たちは、それぞれ異なった人生の道を歩むようになったが、彼らの間でひとつの共通した出発点があった。それは、彼らは、みな、もはや自分たちを庇護することができず、逆に自分たちを葬ろうとした旧世界を裏切ったことである。気が狂い、恥辱、のろいは彼らの反逆の身に烙印したシンボルであり、若君は気が狂い、お嬢さんは駆け落ち、下僕は窃盗する、これらは名門の仮面を剥がし落とし、その裏に隠れていた精神上の分裂、家族間の愛情の喪失、道徳の消滅……などなどを暴きだした。しかし、彼らは黄鳳儀と同じように、反逆をした後も出口を見つけられず、ひたすら旧世界の価値観からの無情の鞭撻に忍耐せざるをえず、行方を塞がれた。

彼らと比べて、「謫仙怨」における「紐育客」である黄鳳儀はまだまじだった。彼女はまだ自由を享受することができる。そして、何より彼女は「私は吸血鬼だ」と叫びだすことができる。どの社会にも拘束されずに自由に生き、しかしどの社会にも受け入れられないこの「吸血鬼」には、ごくわずかなであれ、まだ行き場を失った反逆者たちのために抗争する可能性が残されていたのである。

## 二 白先勇におけるアイデンティティ・クライシス

社会に排除され、承認されない「吸血鬼」形象の創出は、実は、著者の白先勇の関心を反映するものであった。前述したように、白先勇は「台北人」である自分の父兄世代の旧

世界の価値観に自己同一化できず、アメリカに自己放逐して、「紐育客」の道を選択した。そこで、「外」から台湾を眺めるようになった白先勇は、ただ台湾にいたときのように、父兄の世代の価値観のもとで精神的な抑圧と苦悶を感じ反発しただけではなかった。彼の精神的探索はより深まるようになった。「紐育客」シリーズの創作より「台北人」シリーズの創作がより重要だと認識した彼は、その後、大陸から「追放」された多くの「台北人」形象を次々と描き出した。「台北人」シリーズのなかで、白先勇は、単にまったく活気を見出せない旧世界の頹廢と、そのなかでもつばら過去に対する追憶に頼るしか生活の意義を見出せない人々の悲惨さを表現したにとどまらず、主人公たちに悲運をもたらした原因である歴史の要素に注目するようになった。彼は「敗者」の視点から歴史を捉え、見落とされていた歴史の裏の面に光を当てたのである。

白先勇がこのような視点をもつようになったのは、彼が「紐育客」であったことによるところが大きい。「紐育客」シリーズのなかで、白先勇は、海外で疎外されている中国人が自分の母国——大陸、台湾に関わらず——にも隔絶され、疎外されたという苦境を表現した。台湾から飛び出した白先勇は、大陸に関係する情報に終始強い関心を持っており、六〇年代のはじめに大陸から伝わった日に日に発展するというニュースは、彼を中国人としての誇りを感じさせ、また、六〇年代末、文化大革命における伝統文化に対する破壊などに関する報道は、彼の心を痛ませた<sup>159</sup>。しかし、白先勇がどんなに大陸中国に強い関心をもっているとしても、これらのすべての出来事は彼に関わりたくても関われないことであった。まさにこのような何度も痛感させられた疎外感による悲哀は、白先勇に自分の父兄の世代の「台北人」が味わわされた疎外感を理解するようにさせたのであろう。

「台北人」と「紐育客」に表現された疎外感とは、同時に白先勇自身のアイデンティティ・クライシスの表現でもあった。それについて、『現代文学』の編集長を長く担当した柯慶明は、あの時期の白先勇を回想して次のように評している。

初めて彼と知り合ったあの夜、彼は感情を抑えられず、滔々とidentityについてしゃべりまくった。アイデンティティ問題のなかった私にとって、本当に新奇な経験だった。当時、外国文学を専攻した彼が、国外に渡ったら中国文学を教えることを頼りに生活しなければならなかったことは、彼を相当大きく困惑させたと思った。その後、「台北人」シリーズの小説の全部と、彼が創作を企画したが、しかしついに「謫仙記」などしか書けなかった「紐育客」シリーズの小説を相次いで読んだあと、はじめて作品の中の主人公によって表された「アイデンティティの焦慮」を悟った。実は、当時、彼自身を困惑させた焦慮は、祖国を熱愛し、しかし異国での生活を選択した人にしかもち得ない焦慮であった<sup>160</sup>。

自分のアイデンティティを探求するために、白先勇が自分の歩んできた道をたどるとき、彼にとって、避けて通れないのは、国民党将軍であり、大陸中国から追放された「台北人」

の代表でもある父親の白崇禧との関係であった。

1966年の末、白先勇は父親を失ったショックを受けた。後年、白先勇は父親に対する感覚を次のように述べている。

父は私にとって多重の意義をもっている。それは父の身分は複雑だからである。一方では、父は北伐と抗日などの重大な事件を経験し中国現代史上の英雄人物、という雲の上の人である。しかし、英雄という形象は私のなかでは抽象的である。父親として、父は非常に人性をもつ一面がある。私にとって、父は一人の人ではなく、二人ないし何人もの人である。この何人かの「白崇禧」に対する私の反応も違う<sup>161</sup>。

すでに紹介したように、白先勇がアメリカに留学する前、父親とは疎遠だった。白先勇が台南にある成功大学に入学した原因のひとつは、「家を離れるのを待ちきれず、自由を追い求めようとした」<sup>162</sup>ためであった。その後、白先勇は台湾大学に入りなおして、水利の専攻を放棄し、文学専攻に改めた。それも理科系を重視する父親の意志に反したものであった。白先勇がアメリカに旅立つ日に、飛行機の下まで見送り、老いの涙を流した父親を前にして、白先勇はただ驚きと茫然しか感じられなかった。あのときの彼は父親の内心の苦痛を理解できなかった。父が経験していた歴史は、白先勇にとって実感を伴わない抽象的なものだったのである。台湾を離れる直前に発表された白先勇の作品「寂寞の十七歳」のなかで描かれている、父母の価値観に束縛されて息切れしそうになった主人公の青年は、まさに白先勇のそのときの気持ちを表現したものだと言えよう。

しかし、1966年12月に、父の死で三年ぶりに台湾に戻った白先勇は、すでに三年前のように、台湾に自分の精神を抑圧することしか感じられなかった、あの白先勇ではなかった。彼は疎外を自ら体験したことによって、「台北人」の精神世界を理解しようとするようになった。それを認識した白先勇は、父親の生前に父と交流できなかったことを悔しがった。

私は文化的飢餓症にかかった。……多くの中国近代史に関する書物を読み漁った。台兒莊戦役を読んで、帰国するときに、父に戦争当時の実際の状況を聞くつもりだった<sup>163</sup>。

しかし、父親の死によって、白先勇は永遠にその機会を失ったのである。白先勇の言行に滲み出た父に対する自責の念は、ただ親孝行できなかったことから生じるものではなく、父を理解できなかった自分の浅薄さに対する反省から生じたものでもあったであろう。

白崇禧が亡くなった後、台北近郊の六張犁にある回教共同墓地のなかに作られた白家墓園——「榕蔭堂」に埋葬された。白先勇の母親と、長兄、三番目の姉もここに埋葬されていた。墓地の名白崇禧がみずから名づけたものである。それが白崇禧の故郷に対する思いが込められている。白先勇の回想によれば、父親は原籍が桂林の会仙鎮山尾村であり、幼

いころから本族を中興させた祖先である榕華公に憧れ、1925年に山尾村に榕華公のために立派な石墓を造った。しかも、桂林にいたころ、前線から戻ると、父親が必ず家族を連れて山尾村にいる祖母を訪ね、榕華公の墓を祭りに帰る。幼いころの白先勇にとって、父親の形象は常に山尾村や、榕華公と織り成していた。したがって、父親が自家墓地に「榕蔭堂」と名づけたのは、白先勇はからすれば、それは「遙かからより榕華公に挨拶する」<sup>164</sup>ためだった。

郷土と祖先を熱愛する者にとって、落ち葉が根っこに戻れずに流浪の運命を強いられることは、どれだけ苦痛なことを容易に想像できよう。しかも、白崇禧の晩年が失意の中で過ごしたことは、そうした苦痛をよりいっそう増したに違いない。白先勇は父親の悲劇の中から、「台北人」の悲運を見出しただけでなく、父親の強靱な性格を感じ取ったのである。数百年前、中央アジアから困難に極まる旅を経て中国に遷移してきた一族は、強靱な生命力がなければ長続きはできなかったのである。更なる遷移を運命付けられたとき、白崇禧は弱音を吐かずに、強いられた漂泊する運命に耐えたのである。その歴史を受け継いでいると認識するようになった白先勇は、父親の人生を感嘆して、「榕華公の庇護を受けた後代の一脈は、このようにはるばる千里以外の島に安息した」<sup>165</sup>と述べた。

このように、白先勇は一方では、父の世代の価値観に自己同一化することはできず、「紐育客」になることによって、そこから逃れようとしたが、逆に「紐育客」としての経験から、父親を代表とする父兄の世代が中国からはじき出され、中国に関われない疎外された悲運を理解するようになった。しかし、他方では、白先勇は父親と通して、自分の根っこを再確認し、中国との切っても切れないつながりをより強く意識させられるようになったのである。このような中国に強い自己同一感を持ちながら中国に関われないという矛盾の中で、白先勇にとって、アイデンティティ問題は常に自分を苦しめる問題であった。そのような苦悩はまさに「謫仙怨」の中で表現されている「怨」ではないか。母親から逃れようと同時に、母親に自分の存在意義を託した主人公黄鳳儀の気持ちは、白先勇の父親に対する気持ち、中国に対する気持ちを物語っている。

一九六九年に、白先勇はインタビューのなかで自分のアイデンティティに触れ、次のように告白している。

台北は、私が最もよく知っている所である。ご存知のように、私はここで教育を受けここで成長したのである。しかし、私は、台北が私の家だとは思わない。桂林も違う。どちらも違う。わかってもらえないかもしれないが、私はアメリカでひどいホームシックにかかった。家は、私にとって、具体的なある「家」、ある建物、ある場所、あるいは外のいかなる場所ではなく、これらのすべてであり、あらゆる中国に関する記憶の総合である。非常に説明しがたいが。しかし、私は本当にひどく家を懐かしく思っている<sup>166</sup>。

「謫仙怨」において、黄鳳儀は母親に送金することによって、自分の精神的支えとした。

現実において、アイデンティティ問題に悩まされた白先勇も、彼の中国に対して、何もやらずに入られなかった。前述した柯慶明は、アイデンティティ問題に悩まされていた白先勇をよく理解していると思われる。白先勇の小説を通じて彼における「アイデンティティの焦慮」を理解するようになった柯慶明は、次のように続けた。

今になって、あのとき、みんな相次いで『現代文学』に見切りをつけたなかで、白先勇がほとんどすべてを顧みずに独力で『現代文学』を支えようとした様子を思い出して、時々思った。それは白先勇がアイデンティティの焦慮を解消しようとしたためであり、中国を遠く離れたことに対する贖罪的行為であったろう<sup>167</sup>。

母に送金した黄鳳儀のように、中国から隔離された白先勇にとって、雑誌『現代文学』は、唯一の中国に関われる手段だったかもしれない。

### 三 『現代文学』にかける白先勇の思い

白先勇の「謫仙怨」と「思旧賦」を載せた『現代文学』第三十七号（一九六九年三月）は、この雑誌が編集長と出版社を換えたあとに出版された二号目であった。関係者の回想と当時の関連する資料を総合してわかるように、雑誌の体制に対する改革は、1968年に白先勇が台北に戻って行ったものである。改革の主な内容として、余光中が王文興にとって替って編集長になったことと、雑誌を台湾大学外文系から切り離し、仙人掌出版社から出版発行することを含める。改革の成果は一年しかもたなかった。第36、37、38、39号が出版されたあと、仙人掌出版社がつぶれ、編集長を担当した余光中も出国した。しかし、この改革は、六十年代末『現代文学』に対する白先勇らの危機意識を体現し、時代の先端を走っていたこの雑誌が新たな方向を模索する試み反映した。

すでに紹介したように、『現代文学』は、西洋のモダン文学を紹介する『文学雑誌』の影響を受けて、一九六〇年に創刊されたものである。『文学雑誌』は、五十年代、文学を政治宣伝の道具として利用するという台湾文壇の主流に抵抗し、若者のために西洋近代文学に目を開かせたため、若い世代に強く支持された。したがって、『文学雑誌』が廃刊したあと、白先勇や、王文興、欧陽子らの台湾大学の学生たちは、『現代文学』を創刊し、『文学雑誌』の官製文学に迎合しない抗争の精神を受け継いだ。『現代文学』は、伝統文学に対する継承を拒み、西洋近代文学の思想や、理論、創作方法を倣い、二十世紀西洋文学のモダニズムの立場を直接移植することを通じて、六十年代の台湾の文学の道を切り開いた。この時代の状況について、松永正義は、「一方では、西欧の自由主義を基礎とする民主的要求であり、他方では、これに対する抑圧である。これは六十年代のもとも主要な動向であった。文学界において、50年代の反共文学を拒絶し、全面的に二十世紀の西欧文学を吸収しよう



する動向は主流となった」<sup>168</sup>と評している。

『現代文学』は、戦後台湾で成長した新世代の「新機軸を打ち出す精神に富んだ文芸思潮」<sup>169</sup>を体現したため、雑誌は常に資金難という難題に直面していたが、周辺には豊富な人材が集まった。白先勇は『現代文学』の歴史を顧みて、「(雑誌には) 206篇の小説が刊行され、七十人の作家が登場した。六十年代に台頭した台湾の知名小説家は、多かれ少なかれ、みな『現代文学』と関係を持っている」<sup>170</sup>と誇った。

白先勇の述べたように、後ほど台湾で名を馳せた作家たちの多くは、『現代文学』と切っても切れない関係にあった。たとえば、陳映真は一九六三年から一九六五年にかけて前後五篇の作品を発表した。なかでも、「將軍族」は彼の看板作といわれている。あるいは、王禎（「鬼・北風・人」）や施叔青（「壁虎」）らの作家は、いずれも『現代文学』でデビューを果たしたのである。

以上のように豊富な作者群を擁していた『現代文学』は、同時に多くの献身的な編集者によって支えられていた。雑誌は専任の編集者がなく、台湾大学の教員と学生、およびOBの協力で編集されていた。白先勇は創設者の一人として、渡米の一九六三年まで三年間、ほかの創設メンバーとともに原稿の編集から出版までのすべての仕事を受け持った。雑誌は、その後、編集責任者の交代によって、編集方針もそれぞれ異なっていた。一九六五年の末に雑誌の創設者の一人であった王文興は、アメリカから帰国したあと、編集責任者となった。彼は、「今後、我国の作家が合格できる水準に達するには、思想からテクニクまで、一律に西洋に倣うしかない」<sup>171</sup>という考えに基づいて、『現代文学』創刊当初の性格を回復した。その後、西洋モダン文学の大家の作品の翻訳、および台湾大学の学生による作品批評が大きな紙幅を占めた。中国現代文学の未熟さを痛感した彼自身も、たとえば長編小説『家変』という作品のなかで、内容から文体まで、いずれも「五・四」以来の新文学伝統に対する挑戦の意欲に満ちていた。

『現代文学』は編集者の交代によって編集方針も変わっていたが、しかし、官製文学の正統性に挑戦し、西洋近代文学を移植して新しい方向を開拓しようとする雑誌の反逆精神は終始一貫していた。このような精神は文壇に新風をもたらした。

しかし、六〇年代後期になると、台湾文壇に新しい変化が生じた。時代の最先端を走っていた『現代文学』はこの新しい動きにどう対応するかが問われるようになった。

この時期、台湾における体制イデオロギーが経済発展に伴って、しだいに経済建設を中心とする近代化の方向に傾いた。台湾社会も、従来の農業社会が資本主義経済の波によって急速に崩壊しはじめた。こうしたなかで、人々は都市部の高度成長の裏に、農村、社会底辺の生活が脅かされ、危機状態を呈し始めることを、朦朧だったではあるが、意識し始めるようになった。

このような背景の下で台湾の文壇において、現代文学の思潮と対抗して、二つの郷土文学観が次第に形成された。まず、戦後、言葉の障害により創作を断念させられていた日本植民地時代の先輩の作家たち、呉濁流、鐘肇政らが文壇に再登場した。一九六四年、呉濁

流は『台湾文芸』を創刊し、台湾という土地に根を下ろす文学に発表の場所を提供したと同時に、彼自身も旺盛な創作活動を展開した。

先輩の作家たちの台湾という土地と、台湾の現実への注目に対して、若い世代の文学者も共鳴した。彼らは台湾における新しい現実注目し創作の意欲を見せた。「尉天聰、陳映真、黄春明、王禎和、施叔青、七等生らが『文学季刊』を創刊、六十年代文学のモダニズムと現実喪失への批判の上に、台湾の現実を描こうとする志向をみせはじめ、人的にも思想的にも七〇年代の文学動向の母体となった<sup>172</sup>。これらの若い作家たちはみな台湾本省人であり、その中の多くは『現代文学』の周辺に集まっていた文学者だった。彼らは、吳濁流らの先輩作家の本土性を汲んだと同時に、『現代文学』の成果を土台にして、台湾文学の新たな一章を開いた。

さらに、この時期の文壇に対する大陸の影響も無視することはできない。文化大革命期に突入する中国大陸における「破旧立新」の造反精神は一世風靡した時期であった。陳映真が読書会を作り、魯迅、毛沢東の著作を読んだことで一九六八年に投獄されたことからわかるように、大陸の革命思潮は台湾社会において潜在的に影響をもっていた。

このように、六十年代の後期、『現代文学』はひとつの大きな転機を迎えることとなった。何より、体制イデオロギーが近代化に切り替えたことによって、官製文学に抗争することを最大の特徴とする『現代文学』そのもの存在意義は新たに問われることになった。さらに、『現代文学』の周辺に集まっていた若い文学者たちはモダニズムの限界性を指摘し、『現代文学』が目指した目標以外の道が模索されたなかで、『現代文学』をどうすればいいのか？白先勇が1968年の年末に台湾に戻って、『現代文学』の改組を行ったのは、おそらくこのような危機意識を抱いたのだろう。

この改革の方針は、『現代文学』の従来の人雑誌の性格を変え、学院内のものから一般公衆に向けた雑誌に変身させることであった。一九六三年から一年間ほど雑誌の編集に関わっていた余光中は、改組のあとの『現代文学』の編集責任者となった。余光中の回想によれば、改革後の雑誌は改革前と比べて、二つの大きな変化があった。ひとつは作者に原稿料を支払うことだった。もうひとつより重大な意義を持った改革は、現代中国作家の写真を雑誌のカバーに載せることだった。余光中はその意図を次のように説明している。

私は本土の作家をカバーに置き、あわせて特集を組んで、もって本人を位置づけようとした。こうした目的は本土文学の自信を生み出し、本土作家の士気を鼓舞するためであった。このことは、長年来、『現代文学』がもっぱら西洋の大家の翻訳を載せたというやり方（変え）、より均衡が取れるようなものにするためであった<sup>173</sup>。

西洋の近代文学や、思想をどのようにして台湾の現実と結合して、台湾本土の文学の特徴を出すかは、けっして容易なことではなかった。余光中は原稿料を支払うという制度をとることによって、雑誌を脱学院化し、社会に、読者により接近させるようにする、とい

う第一歩を踏み出した。さらに、本土の作家の紹介と宣伝に力を入れたのは、『現代文学』のもっぱら西洋近代文学を重んじる性格の限界性と弊害を意識し、それを矯正しようとする意欲を示したといえる。

さらに、『現代文学』は改革によって性格を大きく変えたが、しかし、変わらなかったものもあった。『現代文学』の従来抗争する精神はそのまま継承されていたのである。学院から切り離されたあと、『現代文学』は仙人掌出版社で出版するようになった。白先勇はこの出版社に希望を託したのは、この出版社は政府によって取り締まった文星出版社と深い関係があったからである。

文星出版社は、「台湾の知識人や学生たちの精神的食糧」<sup>174</sup>であった『文星叢刊』を出版した、歓迎を受けていた出版社であった。『文星叢刊』で欧陽子、王文興、白先勇三人の小説集を出したのを最後に、一九六七年に、台湾当局によって閉鎖された。その後、出版社に勤めていた林秉欽、国震唐が株主を集めて仙人掌出版社を創設した。出版社は文星出版社のときに倣って、『仙人掌文庫』を出版し、版の設計まで『文星叢刊』を真似ていた。白先勇の回想によれば、林秉欽は文星出版社のときに倣って、雑誌を作りたかったので、白先勇に『現代文学』を発行する仕事を受け持つ話を持ちかけた。発行状況が良くなかったことで悩んでいた白先勇は、迷わず承諾しただけでなく、資金を出して株主にもなった。『現代文学』は、その後、仙人掌出版社で出版することになったが、結局、一九七〇年に出版社の倒産で三号しか出せなかったが、白先勇の意欲を良く示している。彼があえて仙人掌出版社の株主になったのは、文星出版社の事業を続けるためであり、『現代文学』を『文星雑誌』のような挑戦精神に富む雑誌に作りたかったのである<sup>175</sup>。

このように、白先勇が『現代文学』にかけた思いは並々ならぬものであった。彼は自分の作品のなかの主人公黄鳳儀と同じように、あの幻影と化した中国から逃れようとしたが、同時に、黄鳳儀が送金することによって、初めて母のところから自己の存在価値と尊厳を見出せたのと同じように、白先勇も『現代文学』への献身によって、初めて自分のアイデンティティ危機意識をすこし和らげることができるであろう。「中国」を執拗に探求する白先勇にとって、『現代文学』は、唯一、明るい希望を与えられる存在だった。白先勇はその存在について大きな誇りをもっている。

六十年代の大陸を振り返れば、文人の一連の悲劇であった。……大陸文学は一面の空白だった。こうしたなかで、台湾におけるこの一筋の文学の線香は、絶滅したものを復興させるという時代的意義を持っていたのである<sup>176</sup>。

しかし、六十年代末の『現代文学』の改革の成果は長く続くことはできなかった。仙人掌出版社が倒産したあと、白先勇、柯慶明らが一生懸命雑誌の維持に努めたが、それが一九七三年についに停刊に追い込まれた。

この最後の希望を失った白先勇は大きなショックを受けたに違いない。『現代文学』が停

刊後の翌年、白先勇はボストンアジア協会の年次大会で発表した論文「流浪する中国人」の最後に、次のように述懐している。

これらの台湾の作家たちは、人生を暗くて希望を見出せないものとして描き、千篇一律のように見える。実は、それは、彼らが自分自身の社会や政治状況に対する失望感を忠実に反映したからであった。台湾政府は前途多難であり、大陸は恐怖の手段で知識人を迫害し、想像力に富む作家ほど真っ先にその矢面に立つ。そのようななかで、これらの台湾の作家たちは何をもって楽観的になれるのか？……<sup>177</sup>

流浪する中国人に対する自分のこのときの気持ちを、白先勇は同じ「六十年代世代」の台湾作家叢更の小説のなかの一節を引用して表現した。

あの夜は非常に寒く、非常に暗かった。私たちは自分が見えず、自分の影も見えなかった。私たちは互いに話さなかったが、しかし、それぞれ何を考えているかは知っている。そう、私たちはみんな知っている。たとえ真っ暗、真っ暗な夜でも……しかし、私たちは行かなければならない。なぜかわからないが、行かなければならない……<sup>178</sup>

白先勇は「謫仙怨」を通してこの暗闇の正体を暴いた。それは父兄の世代の「中国」の虚妄を知り、強い反感を抱いた一方、その虚無の「中国」にしがみつくしか自分の存在を見出せないという閉塞感である。その希望の見えない「中国」像は、60年代末の中国—文革の災害が深刻化した大陸と経済発展による社会変動が激しくなった台湾—をめぐる暗い現実と中国人の心痛を映し出した。

## 第7章 歴史に翻弄される中国人

前二章で考察したように、「紐育客」シリーズでは、白先勇は、まず「謫仙記」において、民国期の中国大陸からアメリカに留学した李彤を通じて、中国によって拒絶された「紐育客」の悲劇を描いた。そして、「謫仙怨」において、台湾から渡米した黄鳳儀を通じて、中国から逃れようとしつつ、中国と切り離せないという「紐育客」の「怨」を表した。民国期の大陸と戦後の台湾というバックをそれぞれもつ李彤と黄鳳儀のストーリーは、「紐育客」としての白先勇自身の「中国」に対する思索の精神的遍歴の反映でもあった。激動する中国を見つめつつ、その後の白先勇は、自分の中の「中国」アイデンティティを探求し続けてやまなかった。そして、「紐育客」シリーズのつぎなる作品のなかで、白先勇は「文革」の大陸に目を向けるようになった。

一九六七年、十年にわたる文革がようやく終焉を迎え、文革の実態も次第に世界に知れ渡るようになった。日ごろより中国に関する情報に強い関心を持つ白先勇は、「文革」を通じて、自分の中の「中国」像を問い直すようになった。「文革」を題材にした作品「夜曲」と「骨灰」は、白先勇の「中国」に対する新たな探求であった。

### 一 「夜曲」に見られた理想と現実の隔絶

一九七九年一月に、台湾『中国時報』の特集頁「人間副刊」に刊行された「夜曲」は、白先勇が「謫仙怨」を発表した10年後に創作した「紐育客」シリーズの新作である。作品は、「文革」によって、中国大陸とニューヨークとの間に分断された昔の恋人同士が、二十五年が、ニューヨークで再会したという話である。

「夜曲」の主人公呉振鐸と呂芳は、25年前にアメリカで留学していた中国人留学生であり、恋人同士であった。一九五一年、音楽大学で先に学業を終えた恋人の呂芳が、他の仲間とともに祖国の建設に貢献するために、呉振鐸より先に帰国した。二人が大陸での再会を約束したが、それきり呂芳の消息がわからなくなった。アメリカに取り残された呉振鐸は、二年後、耐え切れずにアメリカ人と結婚し、その後、心臓外科の名医として出世した。しかし、彼の心の中には、呂芳のことを忘れることができず、ついにアメリカ人妻と別れた。そんな彼のところに、ある日、呂芳が二十五年ぶりに姿を現した。期待と喜びで感情を高ぶらせた呉振鐸に、呂芳は平静な口調で自分と昔の仲間たちの大陸で経験した悲惨な境遇を淡々と語った。呂芳自身は「洋奴」として隔離審査され、下放された夫と死別する運命を強いられ、留学仲間であり、情熱的だった高宗漢はひどくつるし上げられるのに耐え切れず、自殺した。また、劉偉は、難こそ逃れたが、やはり下放され、田舎で厳しい労働を強いられた……最後に、呂芳はいつしよに晩餐をするという呉振鐸の誘いを断り、訪れる目的である借金のことを切り出した。小説の最後に、小切手を手にした呂芳は呉振鐸のマンションを後にした。再会に対する呉振鐸の期待と興奮が寒風の中ですっかり冷め

た。

白先勇のこの作品と「骨灰」は、「文革」を背景にただけに、これまで、中国大陸の研究者にも注目されていた。例えば、白先勇の研究者劉俊の研究はその代表的なものである。

劉俊は、作品を、「アメリカと中国大陸の間に、(大陸に) 戻った人がそこからまた出ようとしているが、(大陸に) 戻れなかった人は逆にそこに戻ろうとしている」というパラドックスに基づいて展開したものとして捉え、「このような『戻っていく』と『出てくる』とが交錯した追求は、『夜曲』における人生のパラドックスの基本的な手がかりを構成した」<sup>179</sup>と評した。しかし、そんな彼は「夜曲」の主題を次のようにまとめている。

「夜曲」は、基本的に文革に対する一種の強烈な告発であった。呂芳、高宗漢、劉偉らの祖国に対する真摯な愛と祖国に尽力しようとする情は、この大きな政治という棍棒の重い一撃の下で殆んど消えうせてしまった。肉体を消滅する自殺と、人生のもう一回の自己追放とは、実は彼らがそれぞれ異なった方式で同じような精神的絶望を表現したものであった。それはすなわち、このような政治的雰囲気と政治環境は、民族と国家全体を狂った形で壊滅の深淵に陥らせている。ここにおいて、もはや彼らの立身の地はなかったのである<sup>180</sup>。

つまり、劉俊は「夜曲」を文革に対する告発の作品として捉えているのである。「夜曲」は文革を告発する作品という指摘は正しい。しかし、それだけでは、「夜曲」と大陸ではやっていた「傷痕文学」とは変わらず、この作品の核心とは言い難い。実は、劉俊自身が指摘した作品におけるパラドックスこそが作品の最大な特徴であり、それは白先勇がこの作品における追求を反映していると思われる。劉俊はパラドックスに注目したが、このパラドックスの一面、すなわち呂芳による文革に対する告発についてしか語っておらず、もう一面を代表するもう一人の主人公呉振鐸の存在の重要性を看過したと言わざるを得ない。白先勇は作品の中で、むしろ「紐育客」の呉振鐸の視点から、一定の距離をとって大陸の文革を見つめつつ、自分と「中国」というアイデンティティについて思索し続けていたのである。つまり、作品を通して、白先勇は、文革を告発する一方、呉振鐸を通じて、彼自身の「中国」探求を深めていたのである。

白先勇は、二人の主人公の対照した運命に見られるパラドックスを通じて、かつての恋人同士の間隔を表現した。

一方では、呉振鐸はアメリカで高い地位を得、主流社会に身を置き、ライフスタイルまでアメリカ化して、アメリカ社会に溶け込んだにみえるが、しかし、呉振鐸は昔の恋人が忘れられないのが原因で、ついにアメリカ人妻と離婚した。仕事の面でも、高名な医者にもかかわらず、患者の苦痛に対して、自分も驚くほど冷淡で、無関心であった。しかし、他方では、彼は、学業を終えたら、祖国に帰って同胞の病を治すという留学前の父親の言い聞かせをいつまでも忘れられず、自分が帰国しなかったことを自責し、ひとりの中国人

を治したこともできなかつたことを悔しがっていた。呉振鐸はその愛国的抱負を実践できなかつたが、依然として中国を愛している「紐育客」であつた。

それに対して、呂芳はアメリカで学業を終えたあと、熱烈な報国心から、恋人の卒業を待ちきれずに、仲間の高宗漢たちと先に帰国し、中国の社会主義建設に身を投じた。しかし、その時代において、まさに彼らが外国から帰ってきた者であつたが故に、彼らはすでに疎外されていた。結局、国家建設に貢献するどころか、彼らは度重なる政治運動の中でもがいていた。最も情熱的な高宗漢はその素直な性格のために、最も厳しい迫害を受け、ついに自らの命を絶つた。死んだ後の惨状を呉振鐸に淡々と語つた呂芳は、呉振鐸に告白した。

私は現在の生活にたいへん満足している。本当にたいへん満足している。私は国内にいたとき、長年、夢でも手に入れようとする願い——またニューヨークに戻ることにいう願い——がついに達成できた。振鐸、私はあなたが想像したほど勇敢ではなかつた。私は耐え切れなくなることもたびたびあつた。しかし、私はあそこに死ぬのが怖い。高宗漢の結末を見て、自分の国において、死んでも葬るところがないとは、実にすっかり絶望（寒心）させられることだ<sup>181</sup>。

往年の留学時に、コーヒーショップで仲間たちとともに国家の興亡を論じ、互いの報国の抱負語り合つた恋人が、二十五年後再会する時、呉振鐸は、コーヒー、菊の花、ピアノなど呂芳が好きだつたもの苦心してアレンジし、呂芳と二人で共有していたあの過ぎ去つた歳月をよみがえらせようとした。しかし、彼のあらゆる努力が呂芳との間を隔絶した25年間でできた溝を埋めるには、あまりにも無力だつた。言うまでもなく、この溝は彼らが自ら作り出したものではなく、あの不条理の時代、歴史によって強いられたものであつた。そして、このような不条理が皮肉なパラドックスを作り出した：かつて同じく報国の情熱を強く抱えていた仲間が、一方では、その抱負を実践したことによって、その夢が夭折し、安息の地を求めてアメリカにわたり、「紐育客」になろうとした。他方では、愛国の抱負を実践できなかったほうは、逆に往年の夢をもち続け、中国に関われなかつたことをむしろ自責し続けていた。

報国に燃えていた呂芳は文革のなかで自分の理想に幻滅を覚え、「紐育客」になる夢をもち続けるようになった。彼女の愛国の情熱は自分の祖国で完全に消え去り、ひとりの人間として、心の安らぎを求めようとした。つまり、彼女の愛国の理想を壊したのは、ほかならぬ自分の祖国でであつた。

では、呉振鐸はどうだつたのか。自分の心に密封していた温かい過去をようやく解き放ち、昔日の恋人と分かち合いたい彼は、気持ちはまだ過去に浸っていた。呂芳によって語られた大陸でのあまりにも残酷な遭遇は間違いなく彼に大きな衝撃を与えたが、彼は呂芳の勇敢に敬意を示しつつも、まだ過去の夢を捨てられなかつた。

呂芳が高宗漢の悲劇的な死を語ったあと、呉振鐸は呂芳に自分が高宗漢を嫉妬していたことを告白した。それは、呂芳が帰国して杳として音信がないなか、呂芳に好感を持っていた高宗漢が自分の位置にとって変わったという疑いだけでなく、もう一つ呉振鐸自身はずっと認めようとしなかった原因があった。

彼は勇気があって帰国した。しかし、私にはなかった。これは私の長年来の心の悩みであった。自分がまるで出陣間際に脱走する脱走兵のようだった。……私は現在、有名な心臓科医者だが、しかし、私はひとりの中国人を治したこともない。ひとりもない  
…… 182

かつての呂芳たちに劣らなく愛国心をもっている呉振鐸は、呂芳と連絡がつかなくなったこともあって、結局、帰国して自らの理想を实践する勇気はなかった。そのため、呂芳の話聞いた呉振鐸は、帰国しなかったことがむしろ幸いだったと安堵を感じずに、むしろ依然として国家のために貢献することはできなかったことに対して負い目を感じ続けていた。彼は夢を实践できなかったが、逆に、だからこそ夢を昔のままもてたといえるかもしれない。しかし、またニューヨークに戻ってきた目の前の呂芳はもはや昔の呂芳ではなかった。彼女はまるで異なったもう一つの人生を経験してきた。そんな呂芳との間に、呉振鐸が乗り越えられない深い溝が横たわっていた。呂芳は、自分が逆境のさなかで、まだ呉振鐸のことを心配して、「幸い呉振鐸は帰ってこなかった」と、けっして呉振鐸を忘れてはいなかったが、二十五年の年月の歴史が二人の間に決定的な溝を作った。呂芳はすでに別人だった。彼女にとって、呉振鐸は、昔の自分が抱いていた空しい夢の一部に過ぎなかった。そのため、彼女はニューヨークに一年も来ていたが、あえて呉振鐸と連絡しなかった。もし、経済的な理由がなければ、呂芳は呉振鐸をあの空しい理想とともに決別して、「静かに余生を過ごしたかった」。呉振鐸との再会は、呂芳にとって、呉振鐸が期待したように旧い夢をよみがえらせるためではなく、実にやむをえないことだったのである。

呂芳と別れて、寒風の中に残された呉振鐸がマンションに戻り、マンションの門番に「外は本当に寒い」と述べたいことは、もはや呂芳との過去を取り戻せない、夢から醒めたことを現している。いままで、自分のもっていた呂芳への思い、そして、中国への思いは、呂芳の中国での25年の遭遇という現実の前で、あまりにも無力で、蒼白だった。彼はこだわっていた夢のために抵抗しようとしたが、逆に自分の夢が現実の前でどんなに無力であったかを認識させられた。

忘れられない呂芳と、こだわってきた中国とが、呂芳によってもたらされた文革の衝撃を受け、呉振鐸、いや、白先勇は自分の中の中国を見つめなおさなければならなかった。作品は文革に対する告発だけでなく、白先勇自身が、自分の中の「中国」を再認識させられるきっかけとなる作品であった。

文革が暴いた道徳の崩壊、人性の破滅を目の当たりにして、白先勇は二十数年来、自分



が思い描いた「中国」は、甘かったではないかという不安に襲われたのであろう。70年代初期に完結した「台北人」シリーズでは、白先勇は良き時代の中国の崩壊を描いたものの、理想としての中国への郷愁によって「中国」に対する甘美なる想像、期待も表現した。例えば「思旧賦」は、往年の名門一族の崩壊を表現しながら、二人の老婦人の主人一家に対する変わらぬ愛情を通して、人情深いという「中国」を映し出した。白先勇は長年心に思い描いた理想の中国像が残酷な現実によってひどく動揺させられたに違いない。

## 二 「骨灰」における白先勇の「中国」像

同じく文革を題材とする作品「骨灰」は、一九八六年、台湾の雑誌『聯合文学』12期に発表したものである。その翌年の四月四日、白先勇は三十九年ぶりに中国大陆に戻った。この一步を踏み出すことによって、それまで自分のなかの「中国」を探索し続け、想像していた白先勇は、ついに中国を自分の目で確かめることができるようになった。そして、コンプレックスから解放されたように、白先勇は、その後、「紐育客」シリーズを創作しなくなった。その意味では、「骨灰」は「紐育客」シリーズの終結篇であるともいえる。

「骨灰」は、主人公の「私」の目を通して、中国近代史に翻弄される二人の老人—「私」の父親の兄羅任重、母親の従兄龍鼎立—を描いたものである。

一九四九年、国民党が大陸で敗退したなかで、「私」と母親は父の兄羅任重と共に先に台湾に退避した。大学の教師であった父は、後に追ってくると約束したが、結局撤退に間に合わず、長男と一緒に上海に残された。六十年代、アメリカに留学中の「私」が父に手紙書いたが、それが「文革」の中で、父の「反革命」の証拠とされた。結局、下放され、強制労働を強いられた父は、その後倒れて亡くなった。「文革」後、「私」の兄が父の遺骨を探したが、見つけれなかった。しかし、「私」がアメリカの会社の技術者として、大陸に派遣されることが決まったあと、父の生前の勤務先が父の遺骨探しに積極的に乗り出して、見つけてくれた。父の名誉も回復され、遺骨も追悼会のあとに革命烈士墓地に埋葬される予定である。

その追悼会に向かう「私」は、飛行機の乗り換えのためにサンフランシスコで一泊をした。サンフランシスコにいる父の兄羅任重を訪れた「私」は、意外なことにそこで龍鼎立に出会った。羅任重はかつて国民党政権に忠を尽した特工であったが、台湾に渡った後に権力の中心から排斥され、投獄されて、七十年代にアメリカに移住した。一方、龍鼎立は新中国が誕生する前に、国民党政権に抗議する学生運動をリードした「中国民主同盟」の「民主闘士」であった。彼は共産党が国民党政権を打倒したことに力を貸した人であった。しかし、そんな彼も、文革の中で、やはり迫害され、下放された地で毎日墓地を掘り返し、農場を建設する作業を強いられた。大陸が開放されたあと、彼は亡くなった妻の骨灰をもって、アメリカにやってきた。

「私」を交えて、二人の老人は、酒を飲みながら、一緒に感傷に耽った。二十数年前、

二人はそれぞれの政治的理想のために奮闘し、鋭く対立した。羅任重は、龍鼎立がリードした学生による「平和運動」を弾圧し、自分の親戚でもあった龍鼎立たちを逮捕した。そうした羅任重を龍鼎立は「殺人者」「(国民党)走狗」と非難した。しかし、終わってみると、二人の追求と努力がすべて水の泡となった。羅任重は自分が死んだら、遺骨を海に散骨すると望んでいる。一方、妻の遺骨をスーツケースに入れて大陸から持ち出した龍鼎立は、アメリカで墓地を探そうとしている。二人の老人にあとを頼まれた「私」は、一晩悪夢に囚われて、目覚めの悪い夜明けを迎えた。

ストーリーからわかるように、「骨灰」は文革だけでなく、国民党と共産党が対立した歴史まで視野に入れている。いわば、ストーリー史というより大きな枠の中で思索するのである。そして、注目すべきは、従来の「紐育客」シリーズのなかの主人公と比べて、「骨灰」における主人公の羅任重と龍鼎立とは、歴史の表舞台とは無縁で、或いは受動的に政治に巻き込まれた者ではなく、二人は、かつて自ら政治に身を投じ、歴史の表舞台で活躍した人物だった、ということである。

この作品は、国共両党の歴史という敏感な主題を扱っているだけに、いろいろな批判ないし攻撃を含めて<sup>183</sup>、注目度が高かった。作品に対するイデオロギー的批判はさておき、以下、この作品に対する白先勇文学に対する見方を袁良駿と劉俊の研究を中心に検討したい。

袁良駿は、「夜曲」と「骨灰」のなかで描き出された呂芳や、羅任重、龍鼎立らの人物像を「中華人」と名づけ、その思想的な意味が「台北人」と「紐育客」をはるかに超え、白先勇の小説創作の新しい高峰だと位置づけている<sup>184</sup>。

「中華人」についての定義は為されていなかったが、袁良駿の説明によれば、例えば、羅任重と龍鼎立とは、かつて政治的立場を異にし、激しい対立と闘争を繰り返した敵であったが、しかし、すべてが過ぎ去った後、互いに両立できなかつたいとこ兄弟である二人の老人は中華民族の歴史的運命について、ある種の共通した認識に到達した。袁良駿は、「この種の共通した認識の基本的な内容は、党派を超え、分岐を消滅して、中華民族の復興のために再度協力して奮闘することである。これは八十年代の炎黄子孫の最も貴い見解と理想である」述べた。

明らかに、袁良駿が「中華人」を用いる時、中華民族の再興と国家の統一を強く意識している。確かに、白先勇の思想からすれば、彼が、「私たちの国は、政治上はまだ統一できないでいるが、文化上は先に統一をすることができるはずである。わが国の歴史のなかで、隋唐五代十国時代、政治的には四分五裂だったが、文化的には統一していた。各国はおのおの中国の伝統文化を保持していた」<sup>185</sup>と述べたのも不思議ではなかった。しかし、それは、果たして、袁良駿が評したように、「祖国を平和的に統一する最強音」<sup>186</sup>であったのだろうか。

白先勇が祖国の平和統一に反対するとは考えられない。しかし、作品における白先勇の意図は、平和的統一の最強音を発する、ということにあるのではなかったことは明らか

である。呂芳や、羅任重、龍鼎立を「中華人」として捉えるには、あまりにも無理がある。

まず、「夜曲」における呂芳は、再び留学先だったニューヨークに戻っただいぶ前からすでに情熱が冷め、心が死んでいた。国を出て、ニューヨークに戻るのは彼女の長年の唯一の夢だった。では、「骨灰」における羅任重と龍鼎立とは、どうだったのだろうか。

「私」の伯父羅任重は、かつて、抗日の英雄であり、国民党に忠を尽していたが、国民党とともに台湾に行った後、その正直の性格のせいで陥れられて、二年間の牢屋生活を強いられた。その後、一家でアメリカに移民した。そんな彼が「私」に頼んだ：「伯父さんが死んだ後、私を火で灰にして、すべて海に撒いてくれ。大陸に漂ってもいい、台湾に漂ってもいいが、ぜひとも私をアメリカに埋葬しないでくれ」<sup>187</sup>。大陸でも、台湾でももはや自分の立錐の地がない羅任重は、アメリカをも拒絶し、死んだ後もあえて漂流を選択したのである。しかし、もし、自分のやってきたことに空しさを感じた羅任重が、異邦の地でまだ母国に対して未練を残していたとすれば、そのいとこ兄弟である龍鼎立には、もはやそのような気持ちが微塵もなかった。「民主闘士」として共産党と共闘したにもかかわらず、文革期の大陸でひどく苦しめられてきた龍鼎立は、艱難をともにしていた死別した妻の骨灰をも持ち出して、異邦の地であるニューヨークで安息する場所を探すことを望んだ。

したがって、これらの人物を中華民族の再興と統一を強く望む「中華人」としてくくったことは、いかにも無理があり、そこには、袁良駿自身のなかにある分断された兩岸の統一を望む気持ちが強く働いたといわざるを得ない。実際、袁良駿はこの作品を同時期に打ち出された中国共産党の一国二制度、第三次国共合作という方針とを結び付けて考えている。袁良駿は、「骨灰」は親国民党でもなければ、反共産党でもない、と作品と政治との距離を意識したが<sup>188</sup>、しかし、彼は、作品に込められた白先勇の意図を大陸の政治的動きとは歩調が一致であるように述べており、その理解の仕方自体はかなり政治的であったとさえ言える。

かつての敵同士であった羅任重と龍鼎立の間には、確かに一種の共通した認識に到達した。しかし、それは袁良駿が述べたような中華民族の復興と国家の統一への祈願といったようなオプティミスティックな認識ではなかった。その共通した認識とは、むしろ、羅任重の言葉を借りれば、「私たちは苦労を重ねてきたが、すべてが無駄だった」<sup>189</sup>ということであった。

この点に関して、もう一人の白先勇研究者劉俊が正確に捉えていると思われる。劉俊は、「すべてが無駄だった」という羅任重の言葉に注目して、次のように述べている。

「無駄だった」（という言葉）は、その外在形態から見れば、彼らの政治的行為と政治への投身が最終的に全部当て外れたことを意味するが、しかし、羅任重と龍鼎立の内心において、それは、彼らが自分の政治的情熱と政治的追求に対する全面的かつ徹底的な否定であった<sup>190</sup>。

つまり、若いころの羅任重と龍鼎立は、積極的に政治に身を投じて、自分たちの政治的情熱を傾注していたが、しかし、政治に翻弄されたなかで、あげくの果てには、今までの何十年来の追求がすべて空しく感じられたのである。このような捉え方は、作品の文脈からすれば自然だし、白先勇の意図に近いと思われる。

ここでは、劉俊は白先勇が「夜曲」と「骨灰」に「政治」の要素を導入したことに注目して、そこに白先勇の小説におけるこの両作品の特別な意義を見出した。その意義とは、「政治」の導入は、作品の題材を広げたことに止まらず、白先勇がそれまでずっと回避し、「超越」してきた敏感の議題を扱うようになり、思想的に政治を潜在的な主役とするという斬新な観念を形成させた<sup>191</sup>、ということである。

その場合、劉俊からすれば、白先勇の「無駄だった」という政治に対する判定のなかで、彼が政治に対する強い失望と批判の意味が含まれている<sup>192</sup>。劉俊にとって、「夜曲」にしても、「骨灰」にしても、いずれも白先勇が歴史における政治の果たした役割に対する負の価値判断の表明であった。劉俊は、白先勇が作品のなかで、「人間は政治の前ではちっぽけで、無力な存在であり、政治の使役と支配とを受動的に受け入れる以外、他にほとんど何もできないのである」<sup>193</sup>ということを表現したと見ている。そうした彼からすれば、白先勇は政治に対して基本的に否定的な態度を取っているのである。

白先勇が政治によって翻弄されている人々の運命に強い関心をもっている、という点において、劉俊の指摘は正しい。しかし、劉俊は白先勇の政治に対する意識を果たして正確に把握しているかがやや疑問である。

劉俊の問題は、おそらく白先勇の文革に対する告発や批判を、そのまま白先勇の政治に対する否定へと一般化するところにあると思われる。

確かに、文革の残酷さと醜さを主人公たちの運命を通じて表現した「夜曲」と「骨灰」において、「政治」は、白先勇の従来の小説と比べて、よりはっきりした形で現れている。例えば、「骨灰」の場合、作品は、はじめの設定から読者に人の運命がいかにか政治に翻弄されているかを感じさせられるものだった。すなわち、文革中の父親が「反革命」という窮地に追い込まれた直接の原因は、「私」がアメリカから送った手紙であった。革命陣営外にいる息子のせいで、父親がひどい目に遭った、というわけだ。逆に、文革後、中国の建設に協力する立場になった「私」を迎える前に、見つからなかった父親の遺骨も見つかり、革命烈士墓地に移された。つまり、愛国の海外中国人という「私」が原因で、反革命とされ、死に追い込まれていた父親も革命烈士になり得たのである。そして、政治に翻弄される者は政治からかけ離れた者に限らず、政治に積極的に関与した者も免れない。「骨灰」における羅任重と龍鼎立の運命はそのことを物語っている。

しかし、それは劉俊が述べたように、「政治」が潜在的な主役としてこの両作品に初めて登場したわけではないと思われる。なぜなら、それまでの白先勇の作品、とくに歴史主題を意識して創作するようになった後の作品において、その多くは「政治」が作品の表に出なくても、読む者に常に「政治」の存在を意識させるものであった（例えば、「謫仙記」を思

い出せばよい)。そもそも、歴史のプロセスは政治とかけ離れては語れないものである。とくに、近代以降の激動した中国の歴史は、常に政治によって左右されていた。白先勇はけっして、作品において「政治」を避けて、あるいは「超越」してきたのではなく、むしろ常に意識し続けてきたといえる。前の諸章ですで見えてきたように、白先勇は、自分のなかの「中国」を追い続けたなかで、中国の文化だけでなく、中国の歴史や、現実にある中国の政治に絶えず強い関心を持ち続けていたのである。

白先勇が作品を通じて、政治によって翻弄された人々の悲惨さを表現したことは、彼が政治そのものに対して否定的な態度を取るという結論にはつながらないと思われる。『史記』の例を引き出すまでもなく、もし、政治によって進展していく歴史過程は、記載され、語られている歴史の表だとすれば、白先勇が作品を通じて表現しようとしたのは、華々しく展開していく激動する歴史によって翻弄され、はじき出された敗者、弱者の運命だったのである。白先勇は、けっして歴史に書き残されないこれらの者を描き出すことによって、語られてこなかった歴史の裏を読者の前に呈したのである。

「度尽劫波兄弟在、相逢一笑泯恩讐」という魯迅の詩は、よく大陸と台湾の兩岸関係改善のために引用されていた。どんなに時間が経っていても兄弟は兄弟であり、出会えば一笑のなかで恩讐を水に流す、という意である。1982年7月に、第三次国共合作を国民党側に呼びかけようとして、廖承志が国民党の指導者蒋経国に宛てたのなかで、この詩が使われていた。袁良駿の白先勇の「夜曲」と「骨灰」両作品に対する評価がこのような時代背景を強く意識したのだろう。しかし、今見てきたように、白先勇の作品から読み取れたのは、表の政治世界で恩讐を水に流そうとする動きがある一方、羅任重や龍鼎立のような政治に翻弄されていた者がいることに対する関心と「悲憫」であった。

したがって、白先勇は作品のなかで、常に「政治」を意識しており、人々の運命をわが意のままに左右するという「政治」の暴力性を意識しつつも、作品を通じて政治そのものを断罪しようとするのではないことは明らかである。それは文革中の悲惨の状況を描き、文革を告発することを主要目的とする大陸の「傷痕文学」と白先勇の作品との間の重要な違いの一つである。白先勇は正統な歴史の表からはじき出された者の一員として、歴史の裏にある人々の運命を表現しようとしたと思われる。

しかし、一般化された意味での政治でない場合、具体的に言えば、文革の場合に関して、白先勇は作品を通じてその残酷さを告発したほかに、彼自身の発言からもわかるように、やはりかなり厳しいものだった。白先勇は、「中国人の道徳的破産」<sup>194</sup>である文革は「空前絶後の大悲劇」<sup>195</sup>だと捉え、文革によって、「中国大陸は人間地獄に化し、中国文化は太古野蛮の暗黒期に後退した」<sup>196</sup>と述べた。また、「我々中国はこんなに厚くて深い文化的伝統と人文主義があるにもかかわらず、やはり文革のような現象が発生した」<sup>197</sup>ということは、まことに恐ろしいことであったと嘆いた。

白先勇の文革に対する批判からわかるように、彼が文化大革命を特に許せないのは、なによりこの大革命が中国何千年来の文化的伝統に対する重大な損害であった。前の章です

でに紹介したように、渡米後の白先勇は「文化的飢餓症」にかかり、中国の歴史、文化について食欲に吸収し、それが彼の作品における歴史主題の形成の直接のきっかけであった。彼が自分のなかの「中国」を問い続け、探求し続けたが、なによりも中国の文化的伝統に自己アイデンティファイしたのである。白先勇は次のように述べている。

私は中国を愛している。しかし、私が愛した中国は国民党中国でもなければ、共産党中国でもない。私が愛しているのは五千年の文化伝統をもっている中国である。私たちの国は、政治上はまだ統一できないでいるが、文化上は先に統一をすることができるはずである。わが国の歴史のなかで、隋唐五代十国時代、政治的には四分五裂だったが、文化的には統一していた。各国はおのおの中国の伝統文化を保持していた<sup>198</sup>。

白先勇のような、母国から放逐されたことと、自己放逐を経験しても、依然として自分の出自のアイデンティティにこだわる者にとって、自国の文化に自分のアイデンティティを求めることは唯一の選択だったかもしれない。

アメリカに赴いた60年代、白先勇は異国で疎外感を感じるようになり、隔絶されていた母国に強い関心と憧れを持つようになった。その場合、白先勇は自分のなかで、記憶や書籍によって中国の歴史、文化に対する認識を形成させた。その中国像は、台湾や、中国大陆といったようなはっきりした形ではなく、五千年の文化と歴史をもち、重たい近現代史を背負ってきたあの土地と人民であった。一方、現実の中国は、国共内戦による政治的分断と人々の運命への翻弄、文革による中国文化への破壊など、白先勇の思い描いた中国像に衝撃を与え続けた。このように、想像と現実という二つの「中国」の重なりと衝突は、白先勇の屈折した民族的アイデンティティを形成させた。

### 三 現実に追従しない白先勇

「夜曲」と「骨灰」からわかるように、文革は、白先勇が自分のなかの中国像を再認識する重要なきっかけであった。文革によってもたらされた惨状の全貌は、1976年の文革の収束を待たなければならなかったが、しかし、白先勇はそれまでにすでに多様なルートを通じて、間接的ではあるが、「文革」について実態を把握し、それに対する認識を形成させていた。

前章ですでに見たように、白先勇は60年代、台湾から渡米した後、自らの疎外体験から歴史主題を意識するようになり、「台北人」シリーズの創作に精力的に取り組むようになった。「文化的飢餓症」にかかった彼は中国の歴史を読み漁った。しかし、西側陣営による対中国封じ込め政策の中で、白先勇が得られる中国に関する情報がごく限られていたし、そのなかに現実とかけ離れていたものも多かった。現実の中国について、白先勇は原爆の開発成功に誇りを感じ、中国に対してぼんやりと憧憬をしていた。

しかし、文革が始まった後、60年代の末頃から、「文革」の惨状は、次第に海外華人によって知られるようになった。西側のメディアでは紅衛兵が仏像を壊すなど、伝統に対する破壊が報じられ、文学界でも、たとえば、1969年に、夏志清は「一九五八年来中国大陸の文学」とう論文のなかで、政治に干渉された大陸文学界の惨憺たる光景を暴露した。白先勇の場合、1970年に発表した「冬夜」のなかでも「文革」に触れ、大陸の実情を多少知っていたことが窺える。

白先勇に限らず、実は、閉鎖的台湾に抑圧と苦悶を感じ、アメリカに自己放逐した五、六十年代の台湾の文学青年たちが大陸中国に強い関心を持っていたことは、共通していた特徴であった。言うまでもなく、大陸の「文革」の行方も彼らの心を捉えていた。

70年代になると、「文革」がまだ終息しなかったが、文革に実態に関する情報が国内から脱出した人や、中国への訪問者によって伝えられた。例えば白先勇の三番目の姉先明の親友である卓一玉の夫—許芥昱が一九七三年親戚訪問のために大陸に入り、何人かの作家を訪問した。翌一九七四年に出版された許芥昱の『中国文壇近況』の中には、白先勇がもっとも関心を持っていた作家沈從文の状況が伝えられた<sup>199</sup>。そして白先勇が台湾にいた頃に、一緒に『現代文学』に携わった劉大任は一九七四年「愛国華僑」として文革のなかの大陸を訪問し、平等社会という社会主義理想とかけ離れた現実を目の当たりにして、理想の幻滅を味わった<sup>200</sup>。しかし、最も人々の心を震撼させ、直接に白先勇に影響を与えたのは、やはり台湾大学外国語学部時代のクラスメート、同じ『現代文学』の創立者である陳若曦、および陳の作品『尹県長』であった。

1966年、陳若曦は夫とともにヨーロッパ経由で中国大陸に入り、その後、1973年に広州から香港に出たまで、七年間も大陸で過ごした。「尹県長」は、陳若曦が自ら大陸で見聞、体験した文革を結晶させたもので、嵐のように展開されていた文革の荒唐無稽さと残酷さ、そして、文革のなかから現れ出ていた人性の罪悪と暗黒面を暴露した作品である。作品は、台湾や香港の多くの雑誌に転載され、大陸外の華人世界に大きな衝撃を与えた。それは作品が多くの人々にアイデンティティ・クライシスをもたらしたからであった。平等で、人道的であったはずの新中国、希望に満ちたはずの中国、実は専制的な支配の下で、人性を抑圧し、ねじ曲げた社会であったという事実は、海外の多くの華人が抱いていた憧れを砕いて、幻滅させた。

1976年、白先勇は陳若曦をカリフォルニア大学のサント・バーバラ分校に招いて、講演をしてもらった。それは二人が1964年以来、12年ぶりの再会でもあった。翌年、二人は再び話し合った機会を持った。その後、白先勇は陳若曦の作品に「ユートピアの追求と幻滅」という題で書評を寄せた。

書評のなかで、白先勇は、自分と陳若曦との交流を紹介した。杭州や、西安など各地を回った陳若曦に大陸の風景の如何を聞いた白先勇に対して、陳若曦は「大陸の風景は私が想像していたほど美しくなかった」と答えた。そのことについて、白先勇は自分の想像と陳若曦との間の差異を次のように述べている。

私の記憶のなかでは、故国の風光は、山河が雄大であり、美しくないところはなかった。もちろん、私が三峡や、西湖、そして、北京－上海間鉄道沿線の江南風景を見たのは、抗日戦争が勝利し、挙国が喜びに沸く時であった。それに対して、陳若曦が西安を観光したとき、ちょうど『文革』にあたり、時期が異なれば、心情もおのずと異なっている。……実は、人の世は移り変わる（滄桑）が、山河はちっとも変わっていないのである。陳若曦は大陸に行く前、ユートピアの理想を追求する気持ちでいっぱいだった。しかし、大陸についた後、『文化大革命』という人類史上驚天動地の大悲劇を目の当たりにした。そのため、（彼女にとって）日と月はその光を失い、山河は色を変えたのも無理もなかった<sup>201</sup>。

陳若曦におけるユートピアの追求と幻滅は、そのまま「夜曲」における呂芳に当てはまるとは言えなくても、両者の間の関連性は容易に想像できよう。また、陳若曦のユートピアに共感を持ち、抗日戦争勝利直後の祖国の山河を心に焼き付けた白先勇は、呉振鐸の祖国への思いを彷彿させられるといっても過言ではなかろう。陳若曦との交流を通じて、白先勇は自分の作品のなかで、自分の中の「中国」像を見つめなおし、自分にとっての「中国」を問い続けたのである。

自己のアイデンティティの思索過程で、自らのなかの「中国」を問い続けた白先勇にとって、「文革」による衝撃は大きかった。それは悪夢のように時々彼を襲った。80年代のある文章の中で、白先勇は次のように述懐している。

文化大革命が中国人の道徳の破産であり、中国の歴史上の一大汚点であったことは疑えない事実である。政治的立場の如何に関わらず、私たちは文革の発生について、けっして喜ぶことなく、むしろ悲しみ哀れんでいる。「四人組」、「五人組」などに罪を着せることで、果たして天下に謝するに足るのか。文革期間中、私たちの民族性の暗い一面と、封建的伝統の恐怖の一面が、併発症のようにすべて露呈した。……中国人のこれらの古い癖は、いずれも何十年來、後を絶たない革命運動が打倒しようとする対象であったが、文革によって、それらすべてが復活してしまった。革命で流した血は無駄だった。中国人の靈魂は依然として救済を待たなければならない。これは中国人の最大の悲哀である。

202

そう嘆いた白先勇は、「文革」によって、自分の「私たちの民族の人文的伝統に対する自信が大きく揺るがされた」<sup>203</sup>とまで述べた。

しかし、それにしても、白先勇は陳若曦の幻滅に理解を示しても、陳若曦や劉大任のように、絶望しなかった。彼は絶望することはできないのである。「骨灰」を創作した1986年、白先勇は彼を訪れにきた大陸の学者王晋民に対して、何度も感情を高ぶらせて自分



の中国に対する気持ち告白している。

私は私たちの国家を非常に熱愛している。私たちの国が強大になることを願っている。私は海外に身を置いているが、しかし、ほとんど毎日中国で発生しているすべての出来事に心をひかれている。この三十年来、中国が政治上の誤りを犯したせいで、中国の人民は多くの苦難を蒙らせられた。私は彼らと同じように心が痛み、一刻も安寧を感じたことはなかった。私の家庭と父親の教育は、私を国家主義者にしたのである<sup>204</sup>。

言うまでもなく、白先勇は自分が「国家主義者」であると告白した時、これまでの白先勇の作品と彼の発言から察せられるように、それは政治的意味でのナショナリストと区別された文化的国家主義者である。文革は彼の民族的人文伝統に対する自信を大きく揺るがしたが、それでも白先勇はけっしてあきらめなかった。文革にどんなに憤りを感じていても、彼は中国の文化を生み出したあの土地とそこで生活している人々に背を向けることはできなかったのである。

前述したように、世人に文革の内幕を暴いた陳若曦の小説集『尹県長』は海外で大きな反響を起こした。それに対する論評は主として中国の現状に対する作品の批判に集中していた。白先勇も陳若曦の作品に「ユートピアに対する追及と幻滅」という題で書評論文を寄せた。その中で、作品に対するほかの論評と異なり、白先勇は、陳若曦が表現しようとした主題は、中国人は幾重もの束縛を受けても、人情、人間性が消えないということだった、と指摘した。白先勇は、小説集『尹県長』にある作品「北京にいる耿爾」の中で描かれた、政治的理由で別れを強いられた若いカップル耿爾と小金とが互いに哀れみ同情しあう、というストーリーを引用して、次のように述べた。

彼は、ただ失意のプチブルジョア知識人にすぎず、彼女は、地主家庭出身の薄命女子であった。共産社会の中で後れた分子と見なされたこの平凡な二人が、同情し、理解しあうあの一刻から、全体主義的専制に抑圧されて奄奄としていた人性が昂然と頭を上げ、人性の本来の尊厳を回復した。これは「耿爾在北京」の作者が表現しようとした最終的な主題であった。それはすなわち、階級がはっきりとした専制の社会の中で、人間と人間の間、階級を超越したつかの間の同情と憐憫は、人類の唯一の救済の道である、ということである<sup>205</sup>。

白先勇は、「中国文学が人物の役を処理する時、いつも二点を強調している。一つは正義感であり、一つは人情である」<sup>206</sup>と述べ、それが中国の最も尊い徳目だと位置づけている。そうした視角から、白先勇は「旧い道徳は新しい制度の抑圧の下で、いかにもがいて人間の尊厳を回復したかを描く」<sup>207</sup>という特徴を陳若曦の作品から見出した。『尹県長』の中で、白先勇が主人公の尹県長より、人を裏切らないために迫害され死に至ったという尹老

の形象に注目している。白先勇からすれば、政治的高圧の下で、同情しあい、支えあうという人間の情と義とは、中国道德文化の真髓である。

文学の主要な関心は、社会制度について論評するにあるのではない。その細部から見れば、最も重要なのは、いかに中国人の尊厳を維持することにあると思う。人情と正義感があって、始めて中国人の尊厳を論じることができる。中国人はアメリカ人や、ヨーロッパ人、アフリカ人と異なっているのは、この二点があるからである。私たちはほこりに思っている<sup>208</sup>。

このような視点から陳若曦の作品を理解した白先勇にとって、情、義を重んじる文化は同時に「人類の唯一の救済の道」という普遍性を持っているのである。

実際、白先勇自身の作品は、感傷的、消極的で、悲劇的な結末迎えるものが多いが、しかし、彼の小説において、暗闇の中で一縷の道徳的光明を見出すような描写も散らばっている。例えば、「夜曲」における主人公の呂芳は、呉振鐸との再会を果たした後、その冷たさが呉振鐸をすっかりがっかりさせたが、しかし、そうした呂芳は、文革中、つるし上げられてもっとも苦しめられていた時、心の中で思ったのは、「幸い呉振鐸は戻らなかった」ということであった。また、ようやく渡米を許可され大陸を離れる直前、あえて危険を冒して、こっそり惨たらしい死に方をした旧友高宗漢の家を訪ねて祭った。これらのシーンを通じて、白先勇は、人性は消滅しないということを表現しようとしたのではないか。

このように、白先勇の文学創作には、その滄桑感から情義を重んじる道德文化を反映する性格まで、いたるところに中国文化の影響および白先勇自身が意識的に生かす痕跡が顕著に見られる。また、彼の文学評論や発言からは、彼はいかに中国に深い情を持ち、中国に自己同一化していることがわかる。白先勇自身が述べたように、「中国は政党を超越した中国であり、政治を超越した中国である。それは五千年來の文化の累積によってできた全民族的な中国であり、広々とした大地をもつ中国であり、『詩経』、『楚辞』以來の中国である」<sup>209</sup>。このようなアイデンティティは、けっして政治によって消滅することはないのである。

「骨灰」を発表した翌年、白先勇は中国大地を39年ぶりに踏んだ。「骨灰」をもって白先勇の「中国」をめぐる探求は一段落したが、白先勇のアイデンティティへの追求は止まることなく、続いている。

## 終章

白先勇は、現在の中国で最も読まれている作家として、彼の作品における普遍的な主題と、「台北人」シリーズをはじめとした作品の中に現れた「歴史意識」は特に高い評価を受けている。しかし、その場合、白先勇の作品における「歴史意識」を単に彼の「悲憫」の気持ちや、中国文学における「滄桑感」の伝統に対する継承、という側面から捉えるなら、白先勇文学における重要な特徴を見落とすことになる。なぜなら、彼における「歴史意識」は、白先勇自身の精神的苦闘の過程の中で形成され、最終的に彼の作品の中で結実したものである。この点を明らかにするために、本稿は、「歴史意識」を体現した「台北人」シリーズより、「紐育客」シリーズの作品に注目し、それらの作品を白先勇自身の精神的な葛藤と自らのアイデンティティに対する追求を反映したものとして捉え、作品の中に現れた白先勇の「中国」像の変化過程と、白先勇における「歴史意識」の独自な特徴を明らかにした。

戦後、台湾に撤退した親の世代の価値観に共感を持ちえず、また、閉塞した台湾の社会状況に抑圧を感じた「六十年代世代」の一員として、白先勇はその仲間たちの多くと同じように、大陸からはじき出された後に、さらに出口の見えない台湾を脱出しようとして、アメリカに自己放逐をした。この世代の若い文学青年たちは、親の世代や、台湾社会に疎外感を感じ、西洋の現代文学の導入によって、そうした抑圧感を打破しようと努力した。さらに、彼らは異国でまた疎外感を感じ、それが彼らの創作の源泉となり、例えば「留学生文学」や白先勇の「紐育客」シリーズを生み出した。

しかし、白先勇の場合、彼は他の仲間と同じような二重の疎外感に加えて、さらに自分自身の幼年時代の孤独な体験と、同性愛者であることによって、人より周りから疎外された孤独感に深い理解があった。彼は自分自身の体験と国家、民族の歴史、及びそれによって翻弄された人々の運命とを重ね、歴史にはじき出された人々を、ただ「悲憫」をもって表現しただけでなく、同じにはじき出された者としての視線から疎外された敗者、弱者の悲運を描き、歴史の表舞台で決して現れることのない「裏」の一面を見事に抉り出した。近代国家の意識が形成された中で、二十世紀の中国からはじき出された「漂泊者」たちには、さらに深刻なアイデンティティ・クライシスを伴っていた。彼らを表現した白先勇の作には、中国文学の伝統である「滄桑感」の影響を顕著に表しているが、そうした「滄桑感」には、さらにアイデンティティの喪失という従来になかった深刻さが伴っており、それが白先勇文学にもっと深みをもたらすことになった。

同じにはじき出された一員として、白先勇自身もアイデンティティ・クライシスを痛感した。彼は「台北人」シリーズを通して、自分の父兄世代の悲運を表現したと同時に、「紐育客」シリーズを通して、二重も三重もあった疎外感の中で、自分の中にある「中国」のアイデンティティを絶えず探求した。その意味では、「紐育客」シリーズの作品は、白先勇が自らにある「中国」のアイデンティティを探求する精神的歷程を表現したものだといえる。

早期作品の中で、白先勇は、止まらぬ時間の流れの中で生命が減びていく、という人類が抱えた普遍的な不安と危機意識を表現した。渡米したあと、民族の歴史と自分のアイデンティティを意識するようになった白先勇は、自分の中にある「中国」のアイデンティティを見つめるようになり、「中国」に関するアイデンティティ・クライシスについて思考するようになった。

「シカゴの死」は、白先勇の「中国」意識がはじめて登場した作品であった。主人公は、アメリカという「他者」に語られた中国像に強い違和感を持ち、自分のアイデンティティを強く意識させられたにもかかわらず、自分の中の「中国」はあまりにも蒼白で、空虚なものだったことに気が付いた。そこから白先勇は自らの出自である「中国」に対する探求を始めた。「香港——一九六〇」の中で、白先勇はこの時期の自分の中国認識をあらわした。一般的な捉え方とまったく異なった、数え切れない危機に囲まれたという香港像は、白先勇にとって、「中国」の分身に他ならなかった。そこにおいて、寛容、同情に満ちていた伝統的な中国像が崩壊し、東西対立という厳しい政治状況の中で、「中国」はもはや瀕死の主人公のように救いようがなく、一触即発の危機に満ちていたのである。伝統中国の危機と「中国」に隔絶された自分の無力感という、白先勇の「中国」に関する思いの中に、焦燥感が滲んでいた。

「謫仙記」と「謫仙怨」のなかで、白先勇の「中国」への探求が一つの新しい段階を迎えることになった。それまでの無力な主人公とは対照的に、白先勇は、若くて美しい李彤の短い一生を通じて、主人公が危機に対して抗争し、自分の運命を努めてコントロールしようとした不屈な姿を描き出した。歴史に規定された運命に決して屈服しようとしぬ孤高な李彤に対して、白先勇が強い思い入れをもって描いた。しかし、歴史に対する抵抗は無謀であり、失敗という運命は最初から決まっていた。しかも、中国の歴史の規定から逃れようとしつつも、「中国」を必要とするのは「紐育客」の危機であった。「謫仙怨」のなかの主人公黄鳳儀は、台湾にいる母親を拒絶しつつも、母親のところには自分の尊厳と存在価値を求められなかったのである。新たな希望を見出すことはできなかった彼女は、けっして自分の過去と断絶することはできなかったのである。このような「謫仙」たちを、白先勇は深い「悲憫」を持って描き、歴史に翻弄されつつ、それに屈服しようとしぬ「流浪の中国人」の抵抗の意志を表明する一方、中国ときっても切れない関係にあるという認識を示し、「中国」をめぐる感情の屈折さ、不条理さを表現した。

こうして自らのアイデンティティ「中国」の空白に直面しても決して諦めず、「中国」を捜し求め続けたため、白先勇は「文革」の後、文化、道徳の廃墟と化した中国大陸に深刻な喪失感を覚えながらも一筋の可能性を見出そうとした。「文革」後に発表した「夜曲」、「骨灰」という二つの作品を通じて、白先勇は今までの、自分の記憶と想像に頼った、現実性の乏しい「中国」像を問い直した。しかし、作品は、ただ「傷痕文学」のように主人公の悲運を通じて「文革」を告発するに止まらず、白先勇は、中国の道徳文化に対する「文革」の抑圧と破壊にもかかわらず、なお強靱に生き延びた中国文化における「情義」に一

筋の光明を見出だそうとした。この意味では、アイデンティティの危機に直面しながらも、決して屈することなく、探求し続けるという「シカゴの死」以来の白先勇の姿勢が貫いていた。

白先勇の「中国」へのこだわり、特に伝統文化への注目が顕著であるため、彼の作品を「炎黄子孫」の中華民族の復興への切望と見なし、伝統文化への回帰を賞賛する者もいる。しかし本稿の分析から分かるように、白先勇の中国認識、中国伝統文化に対する理解は、彼自身の視角を持っていて、中国の伝統文化を無批判に賛美するようなものと一線を画した。すでに見てきたように、白先勇の「中国」は危機と希望の入り混じったもので、単純明瞭な政治スローガンにふさわしくない混沌、不安が付きまとっているし、伝統文化も現代社会の中で、幾ばくの束縛を受け、機能しなくなりつつある。

また、歴史に翻弄される人々の悲運を表現した白先勇の作品を、葬られた歴史への哀愁を表すものとして捉え、あるいは、はじき出された人々の悲劇を深い「悲憫」をもって書き留める研究もある。前者の場合、見落としてはならないのは、白先勇の作品は悲劇という結末を迎えるものがほとんどだが、主人公の自殺などの悲劇は、同時に屈服しない、抵抗の意志の現われでもあった、ということである。そして、後者の場合、忘れてはならないのは、白先勇が深い同情の念を持って、歴史に翻弄された人々を良く理解できたのは、なにより、彼もはじき出された者の一員であったからである。そして、幾重もの疎外感を味わわされた白先勇は、「滄桑感」という中国の文学的伝統を受け継ぎながら、従来の「滄桑感」になかった「外」、「周辺」からの視点、「裏」を見つめる視点を獲得した。このようなイデオロギーに左右されない「流浪する中国人」という視点は、中国文学をより豊かにするものである。この点について、白先勇ははっきりと自覚を持っている。彼は自分を含めた「六十年代世代」の作家たちを「五四」時期の文学先駆と対比して、次のように分析している。

「五四」新文学運動と異なっているのは、六〇年代台湾の若い作家たちは、「五四」時期における彼らの先駆のような、中国の伝統文化を徹底的に打倒するという熱狂さや革命的情熱がなかった。彼らは、中国の伝統文化に対して、むしろ理性的に再認識し選択するという態度をとっており、しかも、中国の伝統と西洋の近代とを結びつけようとしていたのである<sup>210</sup>。

このような従来の文学に対する思想上、視野上の突破は、夏志清が白先勇たちを高く評価した所以でもあった。彼は次のように述べている。

彼らが真理を求め（求真）つつ、自分たちを中国固有文化の継承する者、発揚する者と自認する態度は、二十世紀の文芸の真なる精神を貫いている。このような精神は、若い世代の西洋の作家の中で、逆に容易に見られないのである<sup>211</sup>。

その意味では、「流浪する中国人」という独自の視点をもって中国を捉えた白先勇は、二十世紀の現代中国文学史において異彩を放っている重要な作家だということは決して過言ではないのである。

白先勇の精神的軌跡を辿ることは、二十世紀の中国人の精神史のある共通の側面を明らかにしたと共に、海外中国人の独自の精神状態をも浮き彫りにした。というのは、自我の喪失は、過去から断絶された二十世紀の中国人の誰もが経験した困境である。その断絶の頻繁さ、長さはいずれも歴史上未曾有なものであったため、現代中国人は自我の空白、空虚を強く意識せざるをえない。二十世紀後半の中国大陸だけを見ても分かるように、十年が経てば、政治、文化、理念から社会倫理、生活習慣まで目まぐるしく変化し続けた。過去が切り捨てられた後に人々の中に大きな空洞だけが残された。

一方、こうした内面の空虚を埋めようとして、人々はまた新しい思潮や、主義、政治的スローガンに走り、そして、また歴史の翻弄に遭遇し、幻滅を味わった。このような抜け出せない困境に陥った中国人に対して、中国に自己アイデンティファイしながらも、それと距離を置き、中国を相対化した白先勇のような海外中国人の精神的苦闘は、歴史の翻弄に抗い、人間の尊厳を示したものである。こうした「流浪の中国人」の経験は、中国人全体の精神的財産として認知し、受け継がれていくことは大切であろう。

注記：

- 1 「台湾文学名著」の選評は、台湾行政院文建会が主催して、『連合報』の協力で行ったものである。選評は三段階に分けられた。第一段階では、大学教授や研究員、編集者など、七名の文学関係者の推薦で、153部の候補作のリストが作られた。第二段階では、大学の文学教師を中心に九十数人の投票で、候補作が五十四部に絞られた。そして最終段階で、最初にリストを作った七名の文学関係者の投票によって「台湾文学名著」三十部が決定された。『台北人』は第二段階の投票では、有効票六十七票の中で、六十一票を得て、そして最終の投票では全七票を得て第一位に選ばれた。「台湾文学名著」に選ばれた作品のリストは、一九九九年二月五日の『連合報』副刊に掲載された。詳しい内容を陳義芝「關於『台湾文学經典』、陳義芝主編『台湾文学經典研討會論文集』、聯經出版事業公司、一九九九年、を参照。
- 2 「中国現代小説刊行会」編「編集後記」、季刊『中国現代小説』第Ⅱ卷第12号、通巻48号、蒼蒼社出版、を参照。
- 3 夏志清著「白先勇論（上）」『現代文学』第39期、一九六九年十二月、1-2頁。一九七六年遠景出版社が白先勇早期の短編小説集『寂寞的十七歳』を出版した際、白先勇は夏志清の同意を得て、この評論のタイトルを「白先勇早期的短編小説—寂寞的十七歳」代序」に変更して刊行した。その時から本文に引用された最後の一句も「将来中国文学史上に一つ重要な位置を占めるはずであろう」に変わった。夏志清の『『現代文学』的努力和成就』（『現文因縁』、現文出版社、一九九一年十二月、52頁）によると、夏志清は「白先勇論（上）」の後編を計画したが、時間がなかったので、書かなかった。
- 4 夏志清著「白先勇論（上）」『現代文学』第39期、一九六九年十二月、4頁。
- 5 夏志清の『『現代文学』的努力和成就』、『現文因縁』現文出版社、一九九一年十二月、46-47頁。
- 6 王德威「重讀夏志清教授『中国現代小説史』——英文本第三版導言」、夏志清『中国現代小説史』復旦大学出版社、二〇〇五年、31頁。
- 7 龔鵬程「小説の道—論夏志清『中国現代小説史』」、陳義芝主編『台湾文学經典研討會論文集』聯經出版事業公司、一九九九年、478頁。
- 8 李瑞騰「二十年来台湾的文学評論」、『台湾文学風貌』三民書局、一九九一年五月、132頁表三を参照。
- 9 何田田「論『台北人』的人物和主題」、『文芸』月刊76期、一九七五年十月。
- 10 李仆「一根小刺——讀白先勇『台北人』之后」、『青年戰士報』十一面、一九七五年十二月十日。
- 11 高天生「可憐身是眼中人——試論白先勇的小説」、『台湾小説与小説家』前衛出版、一九八五年、104頁、を参照。
- 12 松永正義「『中国意識』と『台湾意識』—揺れ動く中国/台湾イデオロギーの構図」、若林正文編著『台湾—轉換期の政治と経済』田畑書店、一九八七年九月、320頁。
- 13 高島俊男「台湾の作品を続々と紹介—白先勇「永遠的尹雪艷」など」、『声無き処に驚雷を聞く—「文化大革命」後の中国文学』日中出版、一九八一年六月、98頁。
- 14 文岩『『台湾作家小説選集（三）』—前言』、中国社会科学院文学所編集『台湾作家小説選集（三）』、北京中国社会科学出版社、一九八二年十二月、9頁。
- 15 袁良駿『白先勇論』第三章、爾雅出版有限公司、一九九一年六月、を参照。
- 16 陳正醒「白先勇『孽子』と中国」、『猫頭鷹』7、一九八九年十二月、69頁の注（2）を参照。

- 
- 17 陳正醜「白先勇『孽子』と中国」、『猫頭鷹』7、一九八九年十二月、59-60頁。
- 18 松永正義著「台湾文学の歴史と個性」、『彩鳳の夢——台湾現代小説選I』、研文出版、一九八四年四月、202頁。
- 19 白先勇『現代文学』創立的時代背景及其精神風貌—写在『現代文学』重刊之前」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月、276頁。
- 20 松永正義「中国文学全体の未来における一つの可能性をみる——台湾文学の現在（陳映真の場合）——」『凱風』No. 10・11、凱風社、一九八四年七月、を参照。
- 21 岡崎郁子「劉大任——アメリカに新天地を求めた知識分子作家」、『台湾文学——異端の系譜』田畑書店、一九九六年、を参照。
- 22 『現代台湾文学史』編委会「王文興及其『家變』」、『家變』遼寧大学出版社、一九八八年、を参照。
- 23 劉紹銘「十年来台湾小説（一九六五年——一九七五年）——兼論王文興的「家變」」、『小説与戯劇』洪範書店、一九七七年。
- 24 王晋民『白先勇伝』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、1-2頁。
- 25 王晋民『白先勇伝』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、25頁。
- 26 王晋民『白先勇伝』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、5頁。
- 27 白先勇「第六隻手指——記念三姐先明以及我們的童年」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月。
- 28 王晋民『白先勇伝』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、20頁。
- 29 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版、一九七七年九月、67頁。
- 30 蔡克健「訪問白先勇」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月、452頁。
- 31 王晋民『白先勇伝』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、75頁。
- 32 蔡克健「訪問白先勇」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月、454頁。
- 33 白先勇「樹猶如此」、『聯合報』一九九九年一月二十四-二十六日。
- 34 拙論「追尋自我的歷程——白先勇作品中的『普遍性主題』與『歷史主題』的消長和融和的關係」『華文文学』(中国)、二〇〇一年一月、を参照。
- 35 欧陽子『王謝堂前的燕子—「台北人」的研析与索隱』、爾雅出版、一九七六年。
- 36 李師鄭「烏衣巷口夕陽斜——欧陽子『王謝堂前的燕子』讀後」、『書評書目』一九七六年八月。
- 37 桂文亜「王謝堂前白先勇答客問」、『連合報』一九七六年九月二十五日第二十版。
- 38 蔡克健「訪問白先勇」、『第六隻手指』爾雅出版、一九九五年十一月、449頁。
- 39 曉立「白先勇短編小説的認識價值」、『讀書』一九八一年七月、60-61頁。
- 40 封祖盛「論白先勇の小説」、『当代文学研究叢刊』1、一九七九年十二月、107頁。
- 41 陳正醜「白先勇『孽子』と中国」、『猫頭鷹』7、一九八九年十二月、59頁。
- 42 陳正醜「白先勇『孽子』と中国」、『猫頭鷹』7、一九八九年十二月、62頁。
- 43 山田敬三「民族アイデンティティと白先勇の文学」、『台湾文学研究の現在』緑蔭書房、一九九九年三月。
- 44 蔡克健著「訪問白先勇」、『第六隻手指』、爾雅出版社一九九五年十一月初版、第445頁。
- 45 蔡克健著「訪問白先勇」、『第六隻手指』、爾雅出版社一九九五年十一月初版、第445-446頁。
- 46 蔡克健著「訪問白先勇」、『第六隻手指』、爾雅出版社一九九五年十一月初版、第446頁、447-448頁。



- 
- 47 白先勇「我們看菊花去」、《寂寞的十七歲》、遠景出版社一九八四年二月第十一版、25—26頁。
- 48 夏志清「白先勇早期的短篇小說——「寂寞的十七歲」代序」、《寂寞的十七歲》、遠景出版社一九八四年二月第十一版、5頁。
- 49 蔡克健「訪問白先勇」、白先勇著《第六隻手指》、爾雅出版、一九九五年十一月、467—468頁。
- 50 白先勇「社会意識与小說芸術——五四以来中国小說的幾個問題」、《明星咖啡館》、皇冠出版、一九八四年六月、16頁。
- 51 袁良駿《白先勇論》(第二章)、爾雅出版社有限公司、一九九一年六月、49頁を参照。
- 52 白先勇著「『現代文学』創立的時代背景及其精神風貌——写在『現代文学』重刊之前」、《第六隻手指》爾雅出版社、一九九五年十一月、277頁。
- 53 夏志清著「白先勇早期的短篇小說——「寂寞的十七歲」代序」、《寂寞的十七歲》、遠景出版社、一九八四年二月第十一版、7頁。
- 54 蔡克健著「訪問白先勇」、《第六隻手指》、爾雅出版社一九九五年十一月、第445頁。
- 55 白先勇「為逝去的美造像」、白先勇著《明星咖啡館》、皇冠出版社、一九八四年六月、第288頁。
- 56 白先勇著「金大奶奶」、《寂寞的十七歲》、遠景出版、一九八四年二月第十一版、15頁。
- 57 白先勇著「玉卿嫂」、《寂寞的十七歲》、遠景出版、一九八四年二月第十一版、125頁。
- 58 同上。
- 59 白先勇著「玉卿嫂」、《寂寞的十七歲》、遠景出版、一九八四年二月第十一版、第98頁。
- 60 王尚義著「現代文学的困境」、《從異鄉人到失落的一代》、大林出版社、一九八一年十一月再版。
- 61 白先勇「那晚的月光」、白先勇著《寂寞的十七歲》、遠景出版、一九八四年二月第十一版、219頁。
- 62 白先勇「驀然回首」、白先勇著《驀然回首》、爾雅出版一九七八年九月、71頁。
- 63 白先勇「驀然回首」、白先勇著《驀然回首》、爾雅出版一九七八年九月、75—76頁。
- 64 白先勇「第六隻手指」、白先勇著《第六隻手指》、爾雅出版、一九九五年十一月、10頁。
- 65 蔡克健「訪問白先勇」、《第六隻手指》爾雅出版一九九五年十一月、453頁。
- 66 白先勇「驀然回首」、白先勇著《驀然回首》、爾雅出版一九七八年九月、78頁。
- 67 歐陽子「白先勇的小說世界」、《王謝堂前的燕子——『台北人』的研析与索隱》、爾雅出版、一九八三年七月第八版、9頁。
- 68 楊錦鬱「把心靈的痛苦變成文字——在洛杉磯和白先勇對話」、《幼獅文学》第64卷之4、一九八六年十月、134頁。
- 69 山田敬三「民族アイデンティティと白先勇」、《台湾文学研究の現在》、綠蔭書房、一九九九年三月。
- 70 陳正醒「張系国『不朽者』試論——六十年代世代の「中国意識」との関連で」、《茨城大学人文学部紀要(人文学科論集)》第二十二号、一九八九年三月、42頁。
- 71 この十四編の小説は、1)「永遠的尹雪艷」、2)「一把青」、3)「槓茅」、4)「署寄萎 議恣朔匯匚」、5)「椎匯頭僮匯違碯議凝冗雜」、6)「房症驗」7)「塑幻哇」8)「溝禅雜」9)「雜播蕃芝」、10)「拍房」、11)「諾爺戰疏唱唱議佛佛」、12)「嘎坩妾知」、13)「喬匚」、14)「忽壤」、である。
- 72 歐陽子「『永遠的尹雪艷』之語言語調」、《王謝堂前的燕子——『台北人』的研析与索隱》、爾雅出版、一九八三年七月第八版、36頁。
- 73 白先勇「永遠的尹雪艷」、白先勇著《白先勇文集 第2卷：台北人》、花城出版社、二〇〇〇年四月、4頁。
- 74 白先勇「一把青」、白先勇著《白先勇文集 第2卷：台北人》、花城出版社、二〇〇〇年

---

四月、35頁。

75 歐陽子『王謝堂前的燕子—『台北人』的研析与索隱』、爾雅出版、一九八三年七月第八版、第109頁。

76 袁良駿「論白先勇小說的傳統特色」、『文学評論』3、一九九〇年六月、34頁。

77 白先勇「世紀性的漂泊者」、『第六隻手指』爾雅出版社、一九九五年十一月、217頁。

78 白先勇「世紀性的漂泊者」、『第六隻手指』爾雅出版社、一九九五年十一月、217頁。

79 尉天聰の「最後の貴族」という評論は、桂文亜の「王謝堂前答客問」（『連合報』一九七六年九月二十五日第二十版）の中で一部分が紹介された。しかし原文の出自、発表の年月及び全文の内容について、残念ながら筆者が把握していない。

80 桂文亜「王謝堂前答客問」、『連合報』、一九七六年九月二十五日第二十版。

81 白先勇「流浪的中国人」、『第六隻手指』爾雅出版社、一九九五年十一月、107頁。

82 白先勇「冬夜」、白先勇著『白先勇文集 第2卷：台北人』、花城出版社、二〇〇〇年四月、172頁。

83 白先勇「流浪的中国人」、『第六隻手指』爾雅出版社、一九九五年十一月、108-109頁。

84 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、221頁。

85 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、228-229頁。

86 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、237頁。

87 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、231-232頁。

88 白先勇「安樂鄉的一日」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、221頁。

89 白先勇「流浪的中国人」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版一九九五年十一月、を参照。

90 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、213頁。

91 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、222-223頁。

92 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、222頁。

93 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、221頁。

94 白先勇「芝加哥之死」、白先勇著『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、224頁。

95 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、76-77頁。

96 白先勇「隣舍的南瓜」、『樹猶如此』、聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、123-124頁。

97 白先勇「流浪的中国人」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、108頁。

98 白先勇『現代文学』創立的時代背景及其精神風貌—写在『現代文学』重刊之前」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月、276頁。

99 蔡克健著「訪問白先勇」、『第六隻手指』、爾雅出版社一九九五年十一月、445頁。

100 白先勇「為逝去的美造像」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、288頁。

101 松永正義「台湾文学の歴史と個性」、『彩鳳の夢——台湾現代小説選 I』、研文出版、一九八四年四月、206頁。

- 
- 102 松永正義「台湾文学の歴史と個性」、『彩鳳の夢——台湾現代小説選Ⅰ』、研文出版、一九八四年四月、206—207頁。
- 103 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、75頁。
- 104 蔡克健「訪問白先勇」、『第六隻手指』、爾雅出版社一九九五年十一月、464頁。
- 105 白先勇「知己知彼——論對米文化交流」、『明星咖啡館』、皇冠出版、一九八四年六月、73頁。
- 106 白先勇「第六隻手指——記念三姐先明以及我們的童年」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月、10頁。
- 107 白先勇「第六隻手指——記念三姐先明以及我們的童年」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月、10頁。
- 108 白先勇「白先勇與青年朋友談小説」、白先勇著『明星咖啡館』、皇冠出版社、一九八四年六月、第279頁。
- 109 一九三八年四月、国民党の軍隊が台兒庄で日本軍磯谷、坂垣軍団の二万人の精鋭を殲滅し、抗日戦争の初勝利を得た。白先勇の父親白崇禧は台兒庄戦役の勝利に大きく貢献したとされる。
- 110 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、77頁。
- 111 劉紹銘「台北人」與「紐約客」、白先勇著『紐約客』、文学書屋出版、一九七五年、9頁。
- 112 同上。
- 113 袁良駿『白先勇論』、爾雅出版社有限公司、一九九一年六月、54頁。
- 114 白先勇「為逝去的美造像」、『明星咖啡館』皇冠出版社、一九八四年六月、295頁。
- 115 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、78頁。
- 116 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、249頁。
- 117 姬宮栄一『香港』、中央公論社、一九六四年十月、110—111頁。
- 118 費勇「叙述香港」、『華文文学』(中国)二〇〇一年二月、10頁。
- 119 白先勇「香港——一九六〇」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、259頁。
- 120 白先勇「香港——一九六〇」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、261頁。
- 121 白先勇「香港——一九六〇」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、261頁。
- 122 白先勇「香港——一九六〇」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、264頁。
- 123 白先勇「我的創作經驗」、『樹猶如此』聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、195頁。
- 124 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、67—68頁。
- 125 白先勇「我的創作經驗」、『樹猶如此』聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、195—196頁。
- 126 白先勇「我的創作經驗」、『樹猶如此』聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、196頁。
- 127 一二七八年に、南宋の益帝が元軍の追撃から逃れるために、九龍まで逃げたことがあった。また、南宋の最後の皇帝そこで元軍に迫られ、海に身を投じて自殺して、その地がそれによって宋王台と名付けられるようになった。
- 128 白先勇明「一部悲愴沉痛的流亡曲」、『明星咖啡館』皇冠出版社、一九八四年六月、32頁。
- 129 白先勇『現代文学』創立的時代背景及其精神風貌—写在『現代文学』重刊之前、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版、一九九五年十一月、276頁。

- 130 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月初版、78頁。
- 131 白先勇「謫仙記」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、296頁。
- 132 劉登翰『台灣文學隔海觀－文學香火的傳承與變異』、風雲時代出版股份有限公司、一九九五年三月、130頁。
- 133 劉登翰『台灣文學隔海觀－文學香火的傳承與變異』、風雲時代出版股份有限公司、一九九五年三月、129－130頁。
- 134 劉登翰『台灣文學隔海觀－文學香火的傳承與變異』、風雲時代出版股份有限公司、一九九五年三月、131頁。
- 135 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、368頁。
- 136 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、370頁。
- 137 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、374頁。
- 138 白先勇、謝晉「未來銀幕上的“謫仙”」、『文匯』一九八八年一月、37頁。
- 139 白先勇「流浪的中國人」、『第六隻手指』、爾雅出版社一九九五年十一月、120頁。
- 140 白先勇「謫仙記」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、305頁。
- 141 白先勇「謫仙記」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、301－302頁。
- 142 白先勇「謫仙記」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、311頁。
- 143 白先勇、謝晉「未來銀幕上的“謫仙”」、『文匯』一九八八年一月、37頁。
- 144 同上。
- 145 白先勇、謝晉「未來銀幕上的“謫仙”」、『文匯』一九八八年一月、38頁を参照。
- 146 白先勇「我的創作經驗」、『樹猶如此』聯合文學出版社有限公司、二〇〇二年二月、204頁。
- 147 白先勇「我的創作經驗」、『樹猶如此』聯合文學出版社有限公司、二〇〇二年二月、199頁。
- 148 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、70頁。
- 149 王国祥も一年後白先勇の後について、台灣大學物理學部に受験しなおし、奇跡的受かった。しかし、再会の喜びもつかの間だった。王国祥は再生不良性貧血にかかり、生死の間で迷っていた。二年間の休学、治療を経て、王国祥は奇跡的に健康を回復したが、しかし、薬の副作用で王の脳がダメージを受け、王のその後の人生に大きな影響を与えた。1992年、王国祥は再生不良性貧血の再発によって、55歳の若さでなくなった。王が一生相伴った深い友情と不遇な一生が白先勇の心に大きな傷跡を残した。
- 150 王晋民『白先勇伝』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、25－26頁。
- 151 白先勇『現代文學』創立的時代背景及其精神風貌』、『現文因緣』一九九一年十二月、9頁
- 152 陳世驥「序」、『夏濟安選集』志文出版社、一九七一年三月、7頁。
- 153 夏志清「悼念陳世驥一並試論其治學之成就」、『文學的前途』、純文學出版社有限公司、一九七四年十月、215頁。
- 154 夏志清「悼念陳世驥一並試論其治學之成就」、『文學的前途』、純文學出版社有限公司、一九七四年十月、214頁。
- 155 夏志清『胡適雜憶』序』、夏志清著『新文學的傳統』新星出版社、二〇〇五年五月、53頁。
- 156 白先勇「謫仙怨」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、321－322頁。
- 157 白先勇「謫仙怨」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、320頁。
- 158 白先勇「謫仙怨」、『寂寞的十七歲』、遠景出版、一九八四年二月第十一版、320頁。
- 159 白先勇「我的創作經驗」、『樹猶如此』聯合文學出版社有限公司、二〇〇二年二月、2

---

02頁。

- 160 柯慶明「短暫的青春！永遠的文学？」、白先勇著『第六隻手指』爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、365-366頁。
- 161 蔡克健「訪問白先勇」、白先勇著『第六隻手指』爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、464頁。
- 162 白先勇「樹猶如此」、白先勇著『樹猶如此』、聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、20頁
- 163 白先勇「驀然回首」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月初版、78頁。
- 164 白先勇「少小離家老大回—我的尋根記」、白先勇『樹猶如此』、聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、79頁。
- 165 同上。
- 166 林懷民「白先勇回家」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月初版、167-168頁。
- 167 柯慶明「短暫的青春！永遠的文学？」、白先勇著『第六隻手指』爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、366頁。
- 168 松永正義「台湾文学の歴史と個性」、『彩鳳の夢—台湾現代小説選 I』、研文出版、一九八四年二月、206頁。
- 169 白先勇「六〇年代台湾文学：「現代」與「郷土」」、白先勇著『』聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、183頁。
- 170 白先勇『『現代文学』的回顧與前瞻』、白先勇著『第六隻手指』爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、249頁。
- 171 王文興『『新刻的石像』序』、『現代文学』第35期、現代文学雜誌社、一九六八年十一月、218頁。
- 172 松永正義「台湾文学の歴史と個性」、『彩鳳の夢—台湾現代小説選 I』、研文出版、一九八四年二月、208頁。
- 173 余光中「一時多少豪傑」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、346頁。
- 174 白先勇「冠礼」、白先勇著『樹猶如此』聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、105頁。
- 175 白先勇「冠礼」、白先勇著『樹猶如此』聯合文学出版社有限公司、二〇〇二年二月、106頁。
- 176 白先勇『『現代文学』的回顧與前瞻』、白先勇著『第六隻手指』爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、257頁。
- 177 白先勇「流浪的中国人」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、120-121頁。
- 178 白先勇「流浪的中国人」、白先勇著『第六隻手指』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、121頁。
- 179 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、442頁。
- 180 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、473。
- 181 白先勇「夜曲」、『白先勇文集第1卷：寂寞的十七歲』、花城出版社、二〇〇〇年四月、303頁。
- 182 白先勇「夜曲」、『白先勇文集第1卷：寂寞的十七歲』、花城出版社、二〇〇〇年四月、306頁。
- 183 袁良駿『白先勇論』、爾雅出版社有限公司、一九九一年六月、207頁。
- 184 袁良駿『白先勇論』、爾雅出版社有限公司、一九九一年六月、61頁。
- 185 王晋民『白先勇伝』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、181頁。
- 186 袁良駿『白先勇論』、爾雅出版社有限公司、一九九一年六月、61頁。

- 
- 187 白先勇著『白先勇文集第1卷：寂寞的十七歲』、花城出版社、二〇〇〇年四月、319頁。
- 188 袁良駿『白先勇論』、爾雅出版社有限公司、一九九一年六月、207頁。
- 189 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、477頁。
- 190 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、483頁。
- 191 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、484頁。
- 192 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、480頁。
- 193 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、483頁。
- 194 白先勇「一部悲愴沉痛的流亡曲」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月、31頁。
- 195 王法耶、潘秀玲記錄「白先勇與青年朋友談小說」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月252頁。
- 196 白先勇「一部悲愴沉痛的流亡曲」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月、27頁。
- 197 白先勇「一部悲愴沉痛的流亡曲」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月、29頁。
- 198 王晉民『白先勇傳』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、181頁。
- 199 白先勇「天天天藍」、『明星珈琲館』皇冠出版社、一九八四年六月、101頁。
- 200 岡崎郁子「劉大任—アメリカに新天地を求めた知識分子作家」、『台湾文学—異端の系譜』田畑書店、一九九六年四月、230頁。
- 201 白先勇「烏托邦的追求與幻滅」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月初版、104—105頁。
- 202 白先勇「一部悲愴沉痛的流亡曲」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月、31頁。
- 203 白先勇「一部悲愴沉痛的流亡曲」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月、30—31頁。
- 204 王晉民『白先勇傳』、華漢文化事業公司、一九九二年八月、182頁。
- 205 白先勇「烏托邦的追求與幻滅」、白先勇著『驀然回首』、爾雅出版一九七八年九月、116頁。
- 206 白先勇「中國大陸的道德真空」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月、238頁。
- 207 同上。
- 208 白先勇「中國大陸的道德真空」、『明星珈琲館』、皇冠出版社、一九八四年六月、239頁。
- 209 劉俊『悲憫情懷』、爾雅出版社有限公司、一九九五年十一月、447頁注8からの孫引きである。
- 210 白先勇「六〇年代台湾文学：「現代」與「郷土」、『樹猶如此』聯合文学出版社、二〇〇二年二月、186頁。
- 211 夏志清「白先勇早期的短編小説—「寂寞的十七歲」代序」、白先勇『寂寞的十七歲』遠景出版、一九八四年二月第十一版、4頁。